
R a b b i t ぱにっく

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a b b i t ぱにつく

【Nコード】

N 2 4 6 9 A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

市内の幼稚園で、ごく平凡に保母として働く高島さくら。だが、彼女の平凡だった日常は突然な出逢いによって、覆されてしまう。人の言葉を話す黒ウサギ・朔さくとの出逢い。そしてさくらの過去。『森の民』という人語を解し、人獣両方の姿を持つ種族の青年と暮らしていた事があったさくらは、朔もその『森の民』であることを知り、彼に懐かしさを覚える。やがて、懐かしさは恋心へ。しかし、兎族・『森の民』は過去の因縁が忘れられずに、未だに人間を恨んでいて。惹かれ合うさくらと朔。過去と現在いま。そして、彼女にきつ

く絡みつく前世の記憶。狭間で、さくらは運命の決断を迫られる！

プロローグ

「は……今日もしんどかったあ、ガキンちよの元気なこと。お母さん達も、あたし達のそれ以上に大変なんだろうなー」

「そうですねー？ 子供って、ワガママは言うし、急に泣き出すわで大変ですけど、そう考えるとお母さんって、パワーがあるって言うか、スゴイですよねえ」

夕暮れの河川敷沿いの道を行く、女二人組。

見かけ、仕事上の先輩と後輩と言った感じである。

歩いていく二人の影が、不格好な案山子^{かかし}のように、地面に伸びあがっている。

「あ、やっと明日休みだあ」

先輩の方が、ひどく情けない声で呟いた。

「明日って、確か……となり街の公園まで遠足でしたよね？ いいなー、先輩」

「あはは、頑張れー……まだ若いんだし」

「先輩だって、若いじゃないですかあ」

にこにこ笑う先輩を、後輩が膨れ面でどつきに掛かる。

「じゃ、ここらでね？ お疲れさまあ」

後ろ向きのまま手を振って、後輩とY字路で分かれる。

「お疲れさまでしたー」

遠くに後輩の声を聞きながら、彼女はほうと溜息をついた。

Y字路で別れた二人。それは、あたかもこれからの二人の行く道を、示しているかのようだった。

彼女は、後輩と別れると、バスを終点で下車し、閑静な田舎道を歩いていった。

私、高島さくら、23才。（いや、年は余計だったか）市内にある、幼稚園の保育をしています。

ちなみに、居間は実習生を育成中。これがまた、ダメっ子で……。とりあえず、毎日が大変で、めまぐるしくて……。だけど、どこかで退屈してる。

『なんか、普通でないことが起こればいいなー』

なんて、軽々しく考えたのがいけなかったのかも知れない。

その後に起こることが、私の人生を大きく左右することになるなんて、私は夢にも思っていなかった。

旅ウサギ・朔（前書き）

市内の幼稚園で、保母としてごく平凡に働く高島さくら（23）は、仕事帰り、自宅の玄関先でとんでもない拾い物をする。

その拾い物は、どんどんさくらの人生を変えていつて……？
人と、妖の恋を描くラブ・ファンタジー

旅ウサギ・朔

さくらは、玄関先に丸まっている黒い物体に一步、いや、数歩後じさった。

なんだろう、死骸だろうか？ パカパカと、切れかけの電灯が照らし出すそれは、そのまま動かない。

動かないのなら、そうなんだろう。でも、進まなければ中には入れない。

「死骸！？ ちょっとちよつとお、勝手に、人ん家の玄関先で死なないでよねー……もう」

触ってみて、もしスプラッターだったらどうしよう……。

オロオロと、処理に困って散々迷ったあげく、おっかなびっくり、それに触ろうと手を伸ばした瞬間、その物体がゆっくりと起きあがった。

「わあ、よかったあゝ……生きてたのね、にゃんこちゃん」

さくらは、途中で言葉を途切った。

そつと抱きあげたそれは……それは幾分か、猫よりも耳が長かった。

「つて、なに、ちつこいウサギ？ 縫いぐるみみたい」

こんな都会に、ウサギ？

ここの住人、誰かのペットが逃げたのか？

いやいや、ここはペット禁止のマンションである。

「どうしよう、これ」

さくらは、仕事で疲れていたし、細かいことを考える余裕がなかった、面倒くさかったのである。

だから、そのウサギが人間の言葉を話しても、まったく驚かなかった。

「スマン、ちょっと離してくれるか？ 窮屈だな」

「うん」

「ふう、夜分に申し訳ない、脅かすつもりはなかったんだ、でも…

「おい、ひもじくて動けなくなっちゃった」

すらすらと、人語を話し出した黒い物体　　基いウサギは、ちょこんと後足で立つと、なんとも可愛らしく説明を始めた。

「玩具かしら、ファスナーは、つと」

さくらは思案顔で、むにつ、と子ウサギの背中をつまみ上げる。

「あわわ、おい、本物だつてばよう、降ろしてくれ」

情けない声で訴えられ、さくらは、じたばたと暴れる子ウサギを降ろしてやった。

つままれたウサギは「ひどいなあ」とこぼしつつ、せつせと毛繕いをする。

「ご、ごめんね？ やっぱり…ちょっとびっくりしちゃって」

さくらは、バツの悪そうに毛繕いをする子ウサギを撫でつけた。

「いいよ、慣れてるからさ。それにしても、人っておい、達より恐がりなんだなあ」

子ウサギは、ふこふこと小さな鼻を動かしてウインクした。

「動物は話さないでしょ？ インコとかなら分かるけど」

「動物だつて話ささ？　ただ、今の人間は聞こえないのが多いからね。おい、達も喋らないようにしてる。って、父ちゃんの受け売りだけだな」

人間のように、につこりと笑った子ウサギに、さくらはそつと触れた。

「こんなに小さいのに、一人で偉いね。どうしてこんな所にいたの？　家族は？」

「いや、おい、一人だよ。気づいたときには、あちこち旅してたなあ」

照れくさそうに、笑いながら言う子ウサギを抱っこすると、さくらはピコピコと動く鼻面を撫でた。

「ねえ、よかつたら、ウチくる？」

こんな、小さな生き物に共感するなんて……昔ならそう思ったけど、今はなんとなく、この不思議な「めぐり合わせ」に感謝したい。

「いいのか？ 姉ちゃん、いいヤツー」

手放しに喜ぶ子ウサギが可愛くて、さくらは微笑む。

「あたしはね、さくら。名前、聞いてなかったねえ」

「おいら朔さくって言うんだ、似てるな？ なんだか」

「だねえ、待ってね、今開けたげるから」

さくらは、朔を抱っこしながら片手で鍵を開けた。

「ここにいてね」

さくらは、朔をソファに乗つけると、いそいそとキッチンに入り、鍋を火にかけた。

「あー、もう8時過ぎてるよ……なんか冷蔵庫に入ってたっけ？」

ばふっ、と勢いよく冷凍庫を開けるさくら、しかし勢いがありすぎて冷凍食品が雪崩になる。

「きゃ、きゃあー！？」

ガラガラと、冷凍食品が転がる音。

「慌てんぼだなー、さくら」

それを尻目に、ぽつり呟く朔。

しかし……誰も聞いちゃいない。

初夏のある夜、高島家に不思議な同居人（？）が増えたのだった。

旅ウサギ・朔（後書き）

こんにちわ、維月です。

1話と2話：ちゃんと繋がってるかなあ？
心配。

始まったばかりですが、どうぞよろしくです。

朔の小冒険（前書き）

市内の幼稚園で、ごく普通に働く高島さくらは、ある日、仕事帰りにとんでもない拾い物をしてしまう。

その拾い物は、人語を話す、不思議なウサギ・朔^{さく}だった。

朔と暮らし始めたさくら、彼女の凍っていた心を、朔が溶かしていく。

さくらは、4年前になくした琥珀が忘れられずに泣するが……？
人と妖：異種族間の恋を描くラブ・ファンタジー

朔の小冒険

子ウサギ・朔と暮らし始めて、早3ヶ月が過ぎ……。

朔が、子ウサギじゃなくなった。

…… ような気がする。

一回り大きくなったように見えるのは、果たして、あたしの気のせいだろうか？

「さくら、メシくれっ、メシっ」

暮らしにすっかり慣れた朔が、犬のようにエサ皿を銜くわえて走り回る。久々の休日の朝を、思いきり引つかき回すのがコイツ、朔だ。

朝っぱらから、元気いっぱい、あたしの上で飛び跳ねてくれた。まるで、子供ができたみたいだと思い始めた、今日この頃である。

「はいはい。朔、お皿銜えたまま走らない！……ケガしたら危ないでしょう」

言われて、ぴたりと動きを止める朔。

銜えていたアルミ製の皿が落ちて、からんと固い音を立てる。

「分かったよう、大人しくするから、早くメシ〜」

ぺしょっと耳を下げ、後足で立った朔が、さくらの足に両手で掴まった。

「いい子ね、ちょっと待ってて…キャベツ切るから」

床から皿を拾って、さくらは朔を撫でる。

「おう、大盛りでなっ」

「はいはい」

そう言うっておきながら、ちっとも大人しくない朔に、さくらは楽しそうに、くすくすと笑った。

「朔ー、最近大きくなったよねえ？ なんでも、よく食べるもん」
がつがつと、キャベツ＋ラビットフードを持った皿にがつつく朔の頭を、もしかもしかと撫でながらさくらが言う。

「そおか？ あ、これ、ごちそうさんな」

鼻先で皿をさくらに突き出すと、受け取った彼女の手をペロペロと舐めて、朔は『ウサギのお礼』をした。

「はい、ごちそうさまでした。さて、あたしも朝ご飯しようかな」
ぱたぱたと動き回るさくらの脇で、朔がのんびりと毛繕いをして、
耳や顔を洗っている。

ひよこひよこ、と居間を跳ねていた朔は、電話台であるキャビネ
ツトの上に、一枚の写真を見つけた。

98'07.28 琥珀と一緒に

マジックペンの消えかけた文字。朔は、なぜかとても痛々しいもの
を感じた。

写真に写っているのは、行儀よく前足を揃えている、灰色に近い、
銀色のウサギ。

（優しい目 きれいな人だな）

「あれ、朔ちゃん？」

さくらは、写真を見あげている朔を見つけ、動きを止めた。

「ああ、さくら……この人、琥珀って言っただな。きれいな人だな
？」

朔は、そつと何度もさくらの手に顔を擦りつけて甘える。

「朔ちゃん」

さくらは、ふつと表情を和らげた、慰めようとしてくれる彼が、
あんまりにも一生懸命だから。

「おいで、朔ちゃん」

「……さくら」

朔を抱っこすると、さくらはソファに腰掛ける。片手には、琥珀の
写真を持って。

「琥珀はね、4年前までウチにいた人なんだよー、きれいでしょ？」
えへへー、とさくら。

「さくら、泣きそつだ」

朔が、小さな手でさくらの頬を撫でながら言った。

「えー？ あたし、全然平気だよ？ 心配性ね」

「嘘つくない、さくらの目、悲しい目してる」

ペロペロ、と優しく頬を嘗めた朔に、さくらは、大きく目を見開いた。

開けっ放しの窓から、サワサワと風が入り、カーテンを揺らす。

あまりの静けさに、かすかに遠く、カタンカタンと、電車の音までもが聞こえたような気がする。

始めに、口を開いたのはさくらだった。

「朔ちゃん、あたしね？ 今でも琥珀が好きだよ、でも、朔ちゃんと比べてる訳じゃないんだあ？」

「さくら、おいらは……」

段々と涙声になっていき、遂に声が切れ切れになる。

「琥珀の……代わりとかじゃ、ないからね？」

「うん……おいら、ちゃんと分かってるよ」

ぼろぼろと頬を滑る涙を舐めながら、朔はきつく、さくらに身を寄せた。

「いい子。朔ちゃんが、今のあたしにはすっごく大事」

「おいらも」

朔は、動物同士がよくするように、さくらの頬と、自分の頬を擦り合わせながら言う。

「おいら、どこにも行かない。さくらという」

「朔ちゃん……ありがとっ」

さくらは、朔を床に降ろすと、照れくさそうに笑った。

「着替えたら、お散歩行こうか、朔ちゃん」

「ホントかつ、散歩だ散歩ー！」

ダットと、すばしこく走り回る朔に振り向いて、さくらは微笑みかける。そして、そのまま階段を昇っていった。

……数分後。

さくらが二階に行つて、少し退屈していた朔は、戯れにプランターのベンジャミンゴムの葉を嚙っていた。

さくらに見つかつたら叱られるが、この葉はまあ美味しいので、もう一枚千切っておく。

ちぎった葉は、テレビ台の後ろにでも隠しておけば見つからないだろう。

「朔ちゃん、用意できたよ……って」

さくらの動きが、ぴたりと止まる。

足元に散らばる、プランターの葉っぱを見たからだ。

同じく朔も、一時停止。

「おいで、朔ちゃん。いま口もぐもぐしたよねー？」

にこつ、とさくら。

「おいら、ちゃんと待ってたよ？」

慌てて後ずさるが遅く、哀れ……さくらにしっかりと捕まえられる。耳がV字の、『バレちゃった!？』サインを出している。

こういう時の朔は、怪しいのだ。

「ダメでしょ、またベンジャミンちぎって……どうせテレビの裏にも隠してるんでしょ、出さない」

ベンジャミンの葉、押収。バレバレである。

「だって、さくらが遅かつたんだい」

足首に、ぎゅーっとしがみつく朔を抱っこし、さくらは穏やかに微笑んだ。

「ごめんね、朔ちゃん。そっか、ちょっと遅かったね、拗ねないの」

「散歩いこ、散歩」

「うん、朔ちゃんのおやつ持っていくか」

さくらは、朔を抱っこしたまま、冷蔵庫から果物入りのタッパを出して、小脇に抱えた。

タッパの中身は、赤くて艶々とした苺が詰まっている。

「ねー朔ちゃん、今日は遠出して、堤防の向こうまで行ってみようか？」

「さくら、今日は太っ腹」

「今日は、は余計だぞ？　こらー」

さくらは、お仕置きとばかりに、朔の鼻をつまんだ。（潰したとも言つ）

「んぷう」

につこりと笑うさくらに、朔も幸せそうに笑う。

「さーて、散歩に出発う」

「おう！」

ボタン！　と勢いよく玄関のドアが閉まり、きゃあきゃあと、二人の楽しい声が遠ざかっていった。

日だまりになっている居間のテーブルの上には、置き去りにされたままの一枚の写真があった。

無邪気に笑う、遠い日のさくらと琥珀。

もういいんだよ、忘れなさい、とでも言うかのように、そっと網戸から入った風が写真を吹きつけ、床に伏せてしまった。

朔の小冒険（後書き）

今晚話、維月十夜です、ああ、書いていて恥ずかしいことが何点か。
あうっ、朔を動かすのが難しい……（汗）

おまけ……。 (前書き)

朔を連れて散歩に行ったさくら。

ひなたぼっこをしていた朔が、日に当たりすぎて茹だってしまった！
かいがいしくも、朔を冷やそうと世話をするさくら。

おまけに朔は、おかしい事を言いだして……？

おまけ……。

朔は、毛の色が真っ黒なので、どこにいてもすぐに分かる。

「朔、朔ちゃ、探すことないか、すぐいたいた」

さくらは、遊び疲れたのか日だまりで、ひなたぼっこをしている朔を見つけた。

「もー、こんなところで寝ちゃって。あれ？」

と、さくらは異変に気づく。

心なしか、汗ばんでいるような……？

「ひー、ひー、ひい……」

「朔！？ アンタ、何やってんのよっ、こんなに熱もって！」

さくらは、慌てて朔を日光から庇う。

そうなのだ、黒いものは、熱を含みやすいのだ！

「あーっーい、目えまわる……」

「朔ちゃんのおバカっ！ 川にでも浸ってなさいっ」

さくらは、そっと朔を緩やかな水流に漬け、手のひらで水を掬っては、耳を避けてかけてやった。

「さくらー、ごめんよう」

やや暫くして、川の水に冷やされてすっかり元に戻った朔が、申し訳なさそうに言いだした。

「もっ、勝手にいなくなったりしたら、やーよ？」

「ああ。こっちは小回りが利いていいけど、あっちだと……さくらが怒るな、多分」

さくらは、なんのこっちゃ、と首を傾げる。

「おーい、朔ちゃん？ 上せちゃった？ なんの話か分かんないよ」

「うー、なあさくらー……こっちのおいらと、男前なおいら、どっちがいい？」

「朔ちゃん、朔ちゃんでしょー？ ヘンなこと言わないの、帰る

よ

「うー」

ずぶ濡れ朔を抱っこして、急ぎ足で道をつっきるさくら。

「さくら、温けえ」

目を細めて呟いた朔は、そっとさくらの喉元に顔をすり寄せた。
が、特に聞いていないようである。

「急がないと、ドラマ始まっちゃうじゃない」

その後は、朔がむくれて、フォローが大変だったようだ。

おまけ……。 (後書き)

どうも、維月です。

ここまで読んでくださる読者様に感謝です。

朔が言っていた『男前なおいら』

後に分かりますので、乞うご期待。 (なにをだ〜) (汗)

おかしな夢（前書き）

市内の幼稚園で、ごく普通に働いている高島さくらは、帰宅途中に、自宅の玄関先で不思議な拾いものをしてしまう。

人語を話す、不思議なウサギ・朔は『森の民』という、人間よりも古くからいる種族の生き残りで、琥珀とも同族であることが分かる。不思議な生活を送る高島家は、今日も騒動の渦中！

おかしな夢

（あれ、ここ どこだっけ？）

耳元を、ヒュウヒュウと鋭く風が掠めていく。

さくらは、見わたす限りの草原に立っていた。

草原 いや、枯れ薄の穂が、僅かな風に揺れるだけの中に、佇んでいるのだ。

（他に、なにも見つからない……ここには、あたし一人だけなんだわ）

ヒ・ト・リ・ボ・ツ・チ

【お前は、独りだ】

さくらは、度々囁くその声を知っていた。

孤独に潰えて押し込められた、もう一人の自分。

（一人になって、もうどれくらいになるかしら？ 一人なんか寂しくないのに、どうして不安なの？）

さくらの脳裏に、一瞬、園児達の笑顔がよぎる。

園の終わり頃に迎えに来る、親に向けられる子供たちの眩しいほどの笑顔。

どうせ、あたしは一人。

どうして、あたしは一人なんだろう。

（ 一人は、イヤだ）

つうと一筋、さくらの頬を涙が伝い落ちる。

蹲って、座り込んださくらは、声を殺して泣いた。
もう、いやだ。

一人にしないで……。

誰か、あたしを見つけて！

（泣いているの？）

蹲っていたさくらは、肩に温もりを感じて顔を上げる。

（ずっと、ここに一人かと思って）

中音の柔らかな声に、大きな浅黒い手。顔を見ようとしたが、なぜかモヤに被われたように、はつきりしなかった。

（ここにいちやいけない、おいで）

彼の大きな手が、さくらを強く引き寄せる。

（ここって、どこ？ あたし、よく分からなくて）

さくらは、枯れ野ばかりが広がる景色を、きよろきよろと見まわしながら言った。

（ここは彼の岸と此の岸の狭間さ、まったく、フラフラ行くから追いかけてみたら、こんな場所にいるんだもんなあ……さくらはよっぽど寂しかったんだな）

顔が分からないのに、彼が『笑っている』と分かるのはどうしてだろう。

それに、教えてもない自分の名前まで知っているのだ。

（あなた、あたしを知ってるの？）

さくらは、怯えに身を固くしながら問うた。

（知ってるさあ、こっちの形はまだ知らないんだもんな、仕方ないよな）

彼は、なぜか楽しそうに言う。

（ね、ねえっ、こっちとか、知らないとか、よく話が見えないんだけど）

（ま、そうだろうな。じきに夜が明けるし、そしたら分かるさ）

（全っ然、なに言ってるか分から……な）

突然、そこでさくらの意識は途切れた。

いや、それはむしろ『目覚めた』という方が正しいようだ。

「寝苦しいと思ったら、やっぱりコイツか」

かけ布団を勢いよく剥ぐと、さくらに、へばりつくようにして寝ている朔がいた。

「さあくら……もう、寂しくない、ぞ……うにやうにや」

寂しくない、と言えば、あれは夢だったんだろうか？

それにしても、妙に現実味のある夢だった。

「そう言えば、夢の中の人もそんなこと言ってたなあ。それにしても、おかしい夢……あの人、あたしを知ってるみたいだったけど、憶えないしー」

さくらは眉間に皺を寄せて、うむむ、と唸った。

「さくら、一人言怖いぞ？ どした？」

胸の上に、ちょこんと座る朔に『おはよう』を言って、さくらは彼をつまんで、床に降ろしてやった。

「朔ちゃんこそ、ヘンなこと言ってたよ？ あたしが寂しくないとか」

「おう、さくらが迷子になってたから、おいらが迎えに行っちゃったんだ。あのままだったら、どっか行きそうだったしな」

どこか得意げに説明する朔に、さくらは思わず固まってしまった。自分を知っていると云っていた彼。そして、夢の内容を知っている朔。

「ねえ朔、まさか、あたしの夢に出てきたのって、アンタなの？」

さくらは、毛繕いをしている朔の頭を、もしかめと撫で回す。

「そうだよ、おいらの他に誰がいるのさ」

さくらは、どう反応していいかわからず、そっと朔を抱き締めた。

「朔って不思議……喋るし、ヘンな夢には出てくるし。あ、でもその時は人間だったよねえ？ 夢って、なんでもアリなのかなあ。もしかして、あたしの願望とか？」

「残念、さくら……おいらはフツのウサギだよ」

きやあきやあと騒ぐさくらに、朔はゆるくと首を振った。

「嘘おっしやい、朔ちゃん？ 隠さなくてもいいんだよ？」

「さくら？」

朔は、弱々しく呟いてから、さくらの胸元に顔を埋めた。

「おいら、怖いんだ……フツじゃないって知った人間は、みんなおいらを殺そうとする、犬に追われて、ここまで逃げて来れたのが夢みたいだ」

フルフルと小刻みに震える、小さな彼が堪らなく愛しくなつて、さくらは朔を抱える腕に力を込めた。

「大丈夫……あのね、朔ちゃん、隠さないで見せて欲しいな？ 朔ちゃんの本当の姿」

「やだ、絶対気味悪がる！ それに、おいら一番醜いから」

呟いた朔の声が、次第に尻つぼみに小さくなる。

ぴょん、と勢いよくさくらから離れると、朔は思いきり足を鳴らした。

「今更なに言つてんの、喋れるんだから、それくらいで驚く訳ないじゃない。それにね、琥珀もそうだったの……話せて、姿も変えれた。だから、ね？ あたしは怖がらないよ」

緊張して、V字になつていた朔の耳がぺしりと下がり、朔は一つ溜息をついてから話し始めた。

「分かった、話すよ……おいら達は、人間ひとより古くからいる種族で、山肌に畑を耕し、獣を飼い、地味だが平和に暮らしていたんだ。『

森の民』であるおいら達一族を、昔の人間は神として敬い、丁寧に扱っていたが

時が進んで、人間はおいら達を狩るようになつた。それからおいら達は人知れず散り、『森の民』は流浪の民になつた」

「そんな、散るって……朔ちゃん、『森の民』って、みんなウサギの姿なの？ 琥珀も、なにか関係あるのかなあ」

きょとんと首を傾げるさくらを、朔の青い瞳が真っ直ぐに見た。

「『森の民』は半獣だからな、色んなヤツがいたよ。熊とか、鹿とか……琥珀も多分同族だろうけど、外とつ国の者だな」

「外つ国って？」

「外国つてことだ、渡り者だったんだな、きつと」

「朔ちゃん、物知りねえ」

そう言いながら、さくらは朔を抱っこしようとするが、朔はそれを慌てて拒んだ。

またきょとん、とするさくらである。

「あ、いや……おいらの姿、見たいんだろ？　少し離れててくれるか？」

「う、うん。いいけど」

さくらは、ただ茫然と見ていた。

朔が耳慣れない言葉を呟くと同時に、まるで、水が形を変えるようにその形が歪んでいき、その後に見れた青年が膝をつくまで。

その青年は、ぶるぶると首を振ると、慣れた仕種で立ち上がった。色黒な肌に、不思議に澄む、強い意志を秘めた青い瞳は変わらず、通った鼻筋の、整った顔立ち。

目が覚めるほどの、美青年だ。

「そう、これよ！　夢に出たのっ」

さくらは、自分より頭二つ分は背の高い青年・朔を指さして笑った。
「これ、ってなあ……こうしてみたら、さくら、こんなに小さかったんだ？」

人型になり、さくらより大きくなった朔は、ばふばふとさくらの髪を撫でる。

「むっ、小さいなんて失礼な、アンタがでつかすぎなのっ」

人並み、と言っても、さくらの身長は163センチ。おそらくは190はあるだろう朔からすれば、小さいと言われても仕方なかったりする。

「お、怒ったのか！？　ごめん、ごめんさくら」

ぷーっと、膨れた餅のようになってしまったさくらに、オロオロと戸惑う朔。

そして、なにを思ったのかおもむろに……。

がばっと、さくらを抱き締めたのだ。

「むぐ……さ、朔っ！　放しなさいっ、放してようっ」

当然、さくらは真っ赤に上気しながら、朔から脱出しようともがく。
「いやだ……さくら、温かくて、いい匂いだ。おいら、さくら好きだよ」

「さっ、朔！？」

さくらの心臓は、パンクを通り越して、今にも口から飛び出しそう
だ。

さくらの頬が、一気に赤みを増した。
どうしたんだろう、本当に、どうしたんだろう？
おかしい。

相手は、あの子ウサギ・朔だって分かっているのに。
耳の奥で、鼓動がうるさい。胸が痛いのは、なぜ？

「さ、朔う……あたし、恥ずかしいよぉ」

さくらはどうしても、まともに朔を見ることができず、彼の胸に顔
を埋めたまま、小さく言った。

「恥ずかしい、なんでだ？　だってさくら、いつもおいらを抱っこ
するだろ？　同じじゃないのか？」

「ち、違っわよ！　あのね朔、今は人間で、男の人でしょ？」

「よく分からんけど、さくら……こつちのおいら、キライなのか？」

朔は、華奢なさくらをひよいと抱きあげると、肩に留まらせる。
そつと、伺い見た朔の端正な顔は、今にも泣き出しそうだった。

「あ、あの、あのね？　あたしだって、朔ちゃんは好きよ……でも、
急にだったから、ね？　びっくりしちゃったの」

「こつちの姿、好き？　だったら、ずっとこつちの姿で過ごすこと
にするっ」

いや、ツツコミ所が違つとつっこむさくらだが、そんなヒマもなく
抱き締められ、息ができない。

「離したくないよ、よく分かんないけど、おいら……さくらといた
いんだ」

さくら、ついに爆発＋ついで沸騰。

いきなりのハプニングと、告白にさくらは、くにと安心してし
まった。

おかしい夢が、正夢になるなんて……！？

さくらの叫びは、声になる前に意識の底深くに沈んでいった。

おかしな夢（後書き）

どうも、こんばんは（^^）維月です。

朔、もう一つの姿、解禁です。

今回は、さくらとのじゃれ合いを書くのが面白かった。（笑）

こんな話ですが、読んでくださった読者様には感謝です。次回もよろしく願いしますね。

繋がる想い

二人の絆（前書き）

ごく普通に幼稚園で保母として働き、暮らしていた高島さくらは、ある日の仕事帰りに不思議な拾いものをしてしまう。

人語を話す、不思議ウサギ・朔は、次々とさくらの人生を変えていつて…！？

惹かれ合う二人、遂に佳境！

人と妖、異種族の恋愛をつづる、ラブファンタジー

繋がる想い

二人の絆

「ふあ、あ」

薄暗い部屋のソファで、青年がその端正な顔を歪めた。

（天井が近い、視界が狭く見える……？）

「あ、そっか……今は人型だっけ」

やや暫くぼんやりしてから、青年・朔はバリバリと頭を掻く。

「……静かだ」

さも面白くなさそうに呟いて、朔は二階への階段を昇っていった。

時計は、午前10時を少し過ぎた辺りで。

無人の居間に、チクチクと時計の音だけが、せわしく響いている。
無音の空白。

朔は、その静寂が痛かったのだ。

朔は、二階にあるさくらの部屋の前で、座り込んでいた。

さくらが、いない。

仕事だ。

そんなことは分かっている。

朝から夕方遅くまで、帰ってこないことが多い。

夜中まで持ち越すことだってあって、おいらとも……最近一緒にいて
くれない。

大変なのが分かっているから、大切な仕事だって、分かっているから
おいらも敢えて言わないが、さくらのヤツ、絶対ムリし
てる。

寝てるフリして見てたけど、今朝もさくら、顔色が悪かった。

……ぶっ倒れたり、しなけりゃいいけどな。

おいら、心配だよ。

一方さくらは、園の近所にある公園で、一足遅い昼食を取ってい

た。

実習生である後輩に、これから園児達に教える、折り紙を教えていたのだ。

「ちよつと熱っぽいかな……カゼ、悪化しちゃったかも」

ちなみにさくら、いつもカゼをひいても早退することなく、終了時間までやり通していた。

薬を飲んでおけば大丈夫だと、さくらは自分に言い聞かせて一気に薬である錠剤を喉の奥に流し込んだ。

自分は大丈夫、ただのカゼくらい何とかなる。

そう、高をくくっていたさくらは、後に痛い目を見るのだった。

居間のカーテンを開け、適当に食事を済ませた朔は、仕事場にいるさくらを想いながら、ぽかーんと、底の抜けたように高く晴れた、秋空を見ていた。

「さくら……平気かな」

ぽつりと呟くが、朔一人きりなので、誰も応えてはくれない。

「先輩、ここいーですか？」

さくらの向かいに、後輩の知里が、ちゃっかりと座ってから言った。

「うん、どうぞ……つつう」

さくらは、さつきよりも頭痛がひどくなったような気がして、強く眉間を押さえる。

「先輩、大丈夫ですか？ すっごく顔白いんですけど、早退した方がよくないですか？ あたし、伝えますから」

「いいの、大丈夫……あたしは大丈夫よ。ちよつと、眠いだけだから」

さくらは、強く知里の手を握りながら言う。

「でも、先輩っ」

「大丈夫……夫、よ」

行こうとした、知里を止めていた手が、力なくテーブルに落ちた。

「ちょっと先輩！？ 先輩っ、誰か、誰か救急車
っ
！」

昼時ののどかな空気を、救急車のサイレンが掻き乱していく。
さくらを車内に担ぎ込むと、救急車は早急に公園から遠ざかっていった。

居間に、けたましく電話の音が響き渡る。

ソファに転がっていた朔は、危なく落下寸前の所を、片手について
凌いだ。

「やべえ、電話だよ」

さくらに、電話には出るなと言われている。

オロオロとしているウチに、留守録のオレンジ色のランプが点滅し
始め、せっぱ詰まった女の声が、とんでもないことを一頻り叫んで、
電話は切れた。

朔は、そろそろと再生ボタンを押す。

『あのうつ、さくらさんのお家の方っ、いたらすぐ病院に行って！』

先輩：さくらさんが倒れたの！』

朔は、思いきり玄関を飛び出した。

病院 とかいうものが、どこにあるかなんて、自分は知らない。

けれど、幸いに朔は獣神である、さくらの気配を追うのは造作もなかった。

朔は走った。

足を止めることもせず、ただ真っすぐに、さくらの元へ。

足裏の皮膚が擦り剥けて血が滲み、爪が欠けて剥がれたが、そんな
ものは、彼にとってはどうでもいい、些細なことなのだ。

さくらに逢いたい、ただ、それだけ。

走るうちに、見えてきた白い建物に入ると、朔は真っすぐにさくらの
病室に直行した。

いそいそと、階段を段とばして登り、初めから知っていたかのように、
病室に飛び込んだ。

「さくらっ、さくら、大丈夫か！？ 倒れたって、他に、どこも苦しくないかっ？」

「朔ちゃん、どうして、ここに？」

飛び込むや否や、ベッドに齧^{かじ}り付いた朔に、さくらはおっとり、眠そうに言った。

「電話だ、電話がきたんだ。したら、さくらが倒れたって聞いて」
朔の騒ぎぶりに、通りすがりの看護婦が、口元に人差し指を宛てて『静かに』とジェスチャーする。

「ごめんね、朔……心配させちゃったね」

ベッドに横座りをして、さくらは、朔に『おいで』と手招きした。
寄ってきた朔の頭をそつと抱き締め、耳元で何かを小さく囁くと、一気に朔の顔が赤くなった。

「さ、さくらあ」

ばっ、と慌てて離れると、朔は、さくらの横にそそくさと座った。

えへへー、と笑う、満面の笑顔。

しかし、いつものような覇気がない。

「ごめんね？ ホントはごく軽い過労だから、休養すれば問題ない
って言われたんだ。帰ろうかと思ってたら朔が来てくれて……だから
少し甘えちゃった」

ぽすん、と朔の肩に頭を預け、さくらは目を閉じる。

「ありがと、朔。好きよー？ アンタのこと」

「っ！」

思わぬ告白に、朔は死ぬほど嬉しかったが、わざと違う話をして気持ちを押し込んだ。その顔は、やかんのように赤い。

「電話って、おいらやっぱりキライだ。声が近い」

「話、聞いてなかったでしょー？ もう、朔ちゃんてば」

ぷい、と背中を向けたさくらを、朔は思いきり抱き締めるとカーテンを閉めた。

「ちよつと朔ちゃ、んっ……んんっ」

病室の、純白のカーテンに影が揺れる。

朔は、ベッドにさくらを縫いつけると、何度も何度も、さくらの唇を求めていた。

朔、遂に爆発。

ずっと我慢していたのだから、当然と言えば当然だろう。

「やつ、ん……誰かきちゃうよお」

「……っはあ、さくら」

「……っああ」

ねろり、と首筋を朔の熱い舌が這い、さくらはビクビクと震える。

一頻りの愛撫の終わりに、さくらの額にキスをして、朔は柔和に微笑んだ。

「帰ろう?」

さくらは、突如豹変した朔を、茫然と見あげた。

（朔も、男の人なんだわ……やだ、あたし）

「さくら?」

怪訝そうな朔の顔にぶつかり、さくらは一瞬鼓動が跳ね上がる。

「あ、うん……お夕飯、どうしよう、カップ麺でもいい?」

「うー、やだ」

即答する朔に、さくらは苦笑い。

「しょーがないなあ、ワガママ朔ちゃんは」

「帰るぞ……ほら、おぶされ」

朔は少し屈むと、背中を片手で叩いて、さくらを促した。

「大丈夫、ちゃんと歩いていけるよ」

背中を向けたまま言ったさくらに、朔は間をおいて溜息する。

につこりと笑って『帰ろうよ』と言う彼女に、一瞬感じた影は

なんだろうか?

最近、よく感じるようになった影（それ）は、きつく朔を締めあげる。

二人の他、人影のない河川敷沿いの道のあちこちで、虫が集^{すだ}いて

季節は、もう秋だ。

「星がきれいよ、朔ちゃん」

「ああ」

朔は、少し前を歩くさくらの背中を、じっと見ていた。

「昔ね、こんな風に、星の綺麗な所に住んでたことがあったんだ。今は、もう行けないけどね」

立ち止まって、どこか寂しげに言うさくらを、朔はきつく抱きすくめる。

「ダメよ……誰か来たら、見られちゃう」

そう言うが、さくらはもう、嫌がったりしなかった。

そつと身を任せたさくらに微笑んで、朔は耳元で囁く。

「俺がいる、さくら……だから、もう苦しむな」

口調が変わってる

そんなことをぼんやりと考えながら、

溶け合う温もりに、さくらはうつとりと目を細めた。

「どうして、分かるかな？ 朔ちゃんは。やっぱり、すごいよ」

さくらを縛っている 影 は、彼女の想いだ。

それも、とてつもなく強い、悲しみの念。

「寒いな、もう帰ろう」

「とか言って、あたしは降ろしてくれないのねー？」

まるで、子供を抱っこするかのように、腕の中に収まっていたさくらが不満そうに、口を尖らせる。

「あー、ダメだダメ。おいらがいないと、さくらはダメダメだよ……」

…目え離れたら大変」

「なによう、子供じゃないんだからね？ もうっ」

ぶくん、と膨れるさくらの頬にキスをして、朔は『帰って続きだ』と耳元で囁いた。

「きゃ つ、朔ちゃんのエッチ！ 降ろしなさういっ」

「ダメー、ほらほら帰るぞ」

「もうっ」

もう、さくらはなにも言わない。

気づいたからだ。

なにが必要で、なにが^{いら}必要なのか。

朔が好きだ、ということ……気づいたから。
ふれ合う心、繋がる絆。

二人はその夜、互いに離れなかった。

繋がる想い

二人の絆（後書き）

どうも、維月です。

朔が、暴走中…（泣）こんなキャラじゃないのになあ。

これ、裏にまわった方がいいのかな？

うう、穴があつたら、隠れたい……。

D i s t i n c t i o n

故郷へ（前書き）

朔とさくらの出逢いには、意味があった。

意味……それはさくらの『過去』にあった悲しい事故と関わりがあつて！？

人と妖、異種族間の愛をつづった、ラブファンタジー

「ねえ朔……あなたが好きよ。だからね、はじめ　つけようと思う」

勝手なあたしを、許して……。

一晩中、求め合った気怠いけだる体を起こして、さくらは小さく呟いた。傍らで無心に眠る、子供のような朔の頬に優しく口づけてから、手早く身支度を済ませて、部屋を出て行った。

居間の壁に掛けてあるカレンダーの日付は、10月。10月のページの4日に、赤ペンで丸が付いている。琥珀の命日である。

さくらは、故郷にある琥珀の墓参りに、行こうとしていた。

「今日も、雨だね……琥珀、あの日と、同じ」

食事もそこそこに、さくらは朔の朝食の食パンとサラダに、布巾を掛けてマンションを後にした。

一方、さくらの寝室では、眠っていた筈の朔が、いそいそと身支度を始めていた。

朔には、さくらがその日必ず出かけるのが、分かっていたのだ。階段を下り、転げる勢いで居間に入ると、テーブルの上に、さくらが用意した朝食が置いてあるのを見つけた。

しかし、用意された食事をしているヒマはない。

勿体なかったが、さくらを追う方が、大切だからである。

（今回はきちんと）合い鍵でドアを閉め、急ぎ足で後を追った。

朔の、履き古したスニーカーが、泥混じりの水たまりを蹴散らす。

「さくらっ！」

息を切らせて走っていた朔だが、さくらは、マンションからそう離れていないところを、傘も差さずに歩いていた。

朔はそんな彼女を、逃がすまい、ときつくきつく抱き締める。

「……朔ちゃん」

俯いたまま、さくらは呟く。心なしか、少し震えているようだ。

「一人で、行くつもりだったのか？」

ひた、と見つめる朔の瞳には、確かな怒りがあつた。

暫く、両者の間に無音の沈黙が続く。聞こえるのは、細かに降る雨の音だけだ。

俯いたまま、さくらはなにも言わない。いや、言えないのだ。

「ごめ……なさい」

やがて、小さく聞こえた涙声に、朔は大仰に溜息してから、さくらの髪を優しく撫でた。

「なあさくら、言っただろ？ おいら達、これからもずっと一緒だって」

穏やかに囁いた朔に、こくんと頷くさくら。

「嬉しかったんだ、その言葉……だからはじめ、つけようと思う」
今度は、真つすぐに朔の目を見て言うことができた。

その目に、もう涙は一欠片もない。

「そうか。なら、尚更だな……おいらも行くよ、行って、琥珀に頼む」

「え？」

「さくらをくれ、ってな」

にっと笑った朔に、さくらも思いきり笑う。

その笑顔は、どこか清々しく、潔いものだった。

いつの間にか小糠雨は止んでおり、時折、雲間から僅かに白光が差す。

「それで、どこまで行くつもりだったんだ？」

ふいに、思い出したように朔が問うた。

「前に話した『星の綺麗な場所』かな、祖谷^{いよ}っていうの」

刹那、朔は凍った。

祖谷

懐かしい名前だが、そこは『森の民』一族の本拠地

である。

「もう、今時間の空港行きのバスも行っちゃったし、どうしよう」
時間を片手に『しょうがないね』と笑うさくらに、朔は思いきって言うてみることにした。

「それなら心配すんな、ちっと手荒だが、他より早く着ける方法を知ってる。それに、行き先な、おいらもよく知る場所だから」

「え……？」

どういう事が分らない、と眉をひそめるさくらに、朔は苦笑した。
「祖谷は、おいらの故郷でもあるんだ。これなら、話が早いよな？」
一瞬のうちに、さくらの顔が、ぱああと輝く。

「朔ちゃんっ」

さくらは、ぐいっと朔の首を引き寄せると、反動をつけてキスをした。

「覚悟、ついたよ、朔のお陰で……アンタとなら、なにがあっても怖くない」

「俺も、さくらさえいれば怖い物なんてない、行こう？ 俺たち、例えなにがあっても一緒だっ」

朔は、暫く目を剥いたままだったが、すぐに嬌然^{えん}と笑いながら言った。

「でも、どうやって行くのかしら？ 飛行機よりも速いの？」

くにつ、と首を傾げるさくらに、朔はどこか得意げに言った。

「おう、早いぞ…… 筋（みち）を通るからな」

「筋……ね」

一瞬、さくらの背を冷たいものが滑り落ちる。

以前にも、似たようなことを琥珀が言っていたのを、思いだしたのだ。

【筋 を使えば、どんな場所にもすぐ着く】と。

「行くぞ、さくら。乗ってくれ」

朔は、少し屈むと背を叩く。

「ねえ……重くない？ 大丈夫？」

促されるまま負ぶさったさくらは、不安げに朔を見るが、朔はなにが嬉しいのか、にこにことしていた。

「朔ってば」

「ん？ 筋に入ったら少し苦しくなるけど、我慢な」

んしょ、と背負い直しながら朔は笑う。

「苦しくてもいいの、朔がいるもん、だから平気」

「どうして、お前の言葉って……こんなに響くんだろうな？ すげえ力出るんだ」

「そうなの？ 朔ちゃんが嬉しいと、あたしも嬉しいよ」

照れくさそうに言った、朔の肩口に顔を埋めてさくらは微笑んだ。

と急に、すんと体が落ちる感じがして、さくらは慌てて

朔の背中に身を寄せた。

例えるなら、海の底にいる感覚

息が、苦しい。

入ったんだ、筋に。

景色は、テレビなどで見たことのありそうな、照葉樹の森が広がっている。

霧を煙らせた、苔生した森の匂いが全体を支配していた。

彼の背に揺られている内に、さっきまで見えていたものが、今では黒い、小さなシミほどこしか見えなくなっていた。

朔の足が、それ程までに速いと言うことだ。

朔が足を止めた反動で、さくらは大きく咳き込む。

息ができる、筋を抜けたのだろう。

さくらはまるで、酸素不足の金魚のように、口をパクつかせた。

「辛かったよな、さくら……大丈夫か？」

さくらを降ろしてやり、朔はそつと、彼女を草の上に横たえる。

「待ってる、水探してくるからな？」

「待って、朔ちゃん……周りに、なにか見える？」

行こうとした朔のトレーナーの裾を、さくらはぐいっと引っ張った。

「そうだな、すぐ近くに……かずら橋が見える。今は善徳^{ぜんとく}辺りか、

起きても大丈夫なのか？」

朔は、ゆっくりと半身を起こしたさくらを、やんわりと抱き締めながら問うた。

「琥珀のお墓、この近くの。行こう、朔ちゃん」

さくらは、朔ときつく手を繋ぐと、山肌にある畑の畔^{あぜ}を、森へ向かって歩き始めた。

朔も、さくらの手をきつく握り返すと、これから先に待つものを見据えるように、真っすぐ前を見つめたのだった。

D i s t i n c t i o n

故郷へ（後書き）

こんにちは、維月です。

『R a b b i t パニック』新章のお届けに参りました。

D i s t i n c t i o n …… けじめの章ですね、朔と琥珀の間で揺れていたさくらは、決断をします。

こんな話ですが、よろしければ、これからもお願いしますね。（＜

＞）それでは、失礼致します。

追憶（前書き）

琥珀の墓参りに、故郷である西祖谷村を訪れたさくらと朔。そこでさくらは4年前の惨劇を静かに語り出した。

憎しみ合う人と妖、絡み合う憎悪の渦中に、今二人は引き込まれようとしている。

人と妖は、結ばれることができないのか！？

人と妖、怒濤のラブファンタジー。ここに見参！

追憶

あの日を思い出して、まず始めに浮かぶのは
の音だ。

激しい雨

今はもう、ほぼ元通りに復旧しているが、過去にあった事故の傷跡は、未だに消えてはいない。

徳島県、西祖谷村

今から4年前、この地域を大規模な土

砂崩れが襲ったのだ。

高校を卒業して、一時里帰りをしていた、矢先のことだった。

その日は、朝から天気が悪かった……。

「天気悪いわねえ、ここ最近雨ばかりで。地盤が滑りそうよ」

「ええ？　んな縁起の悪いこと、朝から言わないでよねー、ねえ琥珀」

「まー、そうだよなあ。ここ最近は降り過ぎかも、お袋さんの言うことにも一里ある」

「琥珀っ」

あたしは、隣りに座る恋人・銀髪の大男である琥珀を、ギツと睨む。連日の悪天候に、母だけではなく、みんな少しヒステリックになっていた。

「そうよね、琥珀ちゃん、なんかオカシイわよねえ？」

身乗り出して訴える母を、あたしはぴしゃりと一蹴する。

「お母さん、うるさいよ」

「お・だ・ま・り（怒）」

「いでててて……」

むにゅと、ほつぺたを引っ張られてしまい、慌てて手を引つ剥^べがす。

機嫌が悪いときの母は、本当に始末が悪い。

その他の面々は、『触らぬ神に祟りなし』とばかりに知らんぷり。

あたしは生け贄か！ その時あたしは、切に内心で叫んでいた。

「山あの、神さんの崇りじやな……先にも、『開発』とか言うて、どこぞから来た奴らが死んだろう」

漬け物を、もくもくと嚙っていた祖母が言いだした話に、一同は一人を除いて凍りついた。

祖母は信心深い人で、幼い頃には、よくその類の話を聞かされたのだ。

「や、やだなあお祖母ちゃんたら、そんなのマグレだよお」

「そつ、そうよ、だって神さまじゃない」

娘と孫に反論された祖母は、思いきりイヤな顔。

父と琥珀は、対応に困ってオロオロとしている。

まさか、祖母が言ったことが現実になるなんては夢にも思っていなかった。

その時

信じたからどう、と言うことではないが、少しは役立っていたかも知れない。

今は、後悔するばかりだ。

『畑が心配だから、見てくる』と言って出て行った両親と祖母を見送って、あたしと琥珀は畳の上に寝転がっていた。

「ねえ琥珀、やっぱりヘンだよね？ 雨止まないどころか、段々ひどくなってるよ。ホントに地滑り起きそう」

と、ふいに琥珀が起きあがるのを、あたしは横目で見ていた。

「やっぱ俺、ちょっと出てくるわ……確かになにか起きそうな気がする、確かめてくるから、すぐ戻る、お前はここを動くなよ？」

「ちょっと琥珀っ、ホントにすぐ戻ってきてよ！？ 一人でなんていたくないもん」

行こうとした琥珀の逞しい背中に抱きつきながら、あたしはその時、ワガママを言った。

「……分かったよ、愛してる」

「んっ、むっう」

離れ様にキスをされ、その時、あたしは咳き込んで大変だったな。雨の中を走っていく琥珀を見送りながら、彼が早く戻ってくることをだけを考えていた。

その後に、なにか待つのかも知らずに。

「長っ！ もうこれ以上、人間を殺めてなんになります、お止めください！」

琥珀は、薄暗い照葉樹の森を走りながら『森の民』総領に大音声で訴えていた。

しん、と静まりかえった森の中、姿こそ見せないが、無数の同族達の視線が琥珀を貫く。

「ならぬ、ならぬ、人など、我らに害しか与えぬ！ 少し減ればいい」

「人は恐ろしい。我らが受けた数々の恨み、今こそ思い知るがよいさ」

暗がり、で、爛々と光る同族達の青い瞳。

ひしひしと伝わる、恨みや憎しみの念。

「しかし、すべての人間が悪いわけではない！ 雨を止めてくれ、このままでは恐ろしいことになる！」

必死に訴える彼に、同族の対応は冷たいものだった。

「なにを言うか、人など減って当然なのだ！ お前も同族なら分かるだろう、人が我々にした、非道の数々を。人を殺せ！ そして我らに栄光をっ」

「そうだ、殺せ！」

「そんなの間違ってるっ！？ 確かに人は、過去に俺たちを狩った！ でも今は違う、人も俺たちも同じ命、仕切りなんていらんだっ」

「裏切るか琥珀！ 人間の娘に現まへを抜かす、この恥知らずが！」

「お前も、大好きな人間共と同じく死ぬがいいさ、長が動いたぞ」

琥珀は、戦おののきに身を固くした。

森の奥から現れた青毛の大ウサギ

彼こそが全『森の民』

の総領である。

瞑想していた彼が、半眼を開いたのだ。

「ならぬ……我らは古くから人間共と闘ってきた、今更止めることなどできようか」

「なぜ、なぜです長……闘う理由など、もうどこにもないのに」

「お前はまだ若い、去れ」

長は、溜息混じりに言うつと、琥珀の脇をスタスタと歩いていった。

見晴らしのいい崖に立ち、鼻息荒く、眼下に点在する村を見ていた長が、前足で強く土を掻いた。

「お言葉だ、長のお言葉だ！」

「長、今こそ人間共に報復を！」

琥珀が転身して走るが早いか、長の怒号が、大気を震わせるのが早かったか。

「愚かな人間共に禍いあれ、今こそ天誅を！ 滅びよ愚民ども

……」

雄叫びと、地盤が軋み、崩れる轟音とが同化し、激震が西祖谷の各地を襲った。

あつという間だった……。

家が土砂に押し潰れる音がして、周りで、イヤというくらいに聞こえていた悲鳴が、聞こえなくなった。

どのくらい、時間が経ったのか。

それは定かではないけれど、ぼんやりとしていたあたしを呼ぶ声が、琥珀だと気づくのには時間はかからなかった。

「さくら、さくら……俺が分かるか、しっかりしろ」

泥だらけ、傷だらけの琥珀が目に入った瞬間、あたしはすべてのことを理解した。

なにが、起こったのか。

そして あたしが無傷だった理由。

琥珀が、身を呈して土砂から庇ってくれたのだ。

「大、丈夫か？」

「うん、うんっ」

無事を確認して、安心したように横たわった彼は、すでに瀕死だった。

「お前だけでも、守りたかった……親父さんたち、見つからなかった……」

そこまで言って、琥珀は大きく咳き込んで血を吐いた。

「もうなにも話さないで！ 静かにしてよおっ」

しがみついた、あたしの頭を撫でた彼の手の温もり、今でもはっきり憶えてるよ。

「さくら、俺……思うんだ、人も獣も、同じ命……だから、仕切りは知らない……と」

「そうだよ、そう、あたしたち、同じだよっ」

『泣くな』と涙を拭う彼の手を、あたしは強く握りしめた。

「生きて、な？ さく……ら」

涙を拭った手が、そのまま、力なく落ちる。

「琥珀、琥珀っ！ 琥珀う、いやああ　　っ」

10月4日、あたしは、愛するすべての者を失った……。

救助隊に見つけられるまで、あたしはずっと、琥珀の墓の前で蹲っていた。

「さくら、さくら平気か？」

不安げな朔の呼びかけに、さくらは線香の煙が薄くたなびく中で、瞑想して閉じていた瞼を開いた。

「なあに？ 朔ちゃん」

溜まっていた涙が、一気にこぼれ落ちる。

朔は溜息して、さくらの髪をくしゃりと撫でた。

「涙……やっぱり辛いかな？」

さくらは強く涙を拭くと、にっこりと向き直って、朔に抱きつく。
「いつまでも泣いてちゃ、琥珀に失礼だもん……それにね、あたし
約束したんだ。なにがあっても『生きる』って」

朔は、無言でさくらを見つめた、その瞳は限りなく優しい。

「そう言う朔ちゃんは、琥珀になんて？」

「さくらを、助けてくれてありがとう、と、さくらをください……かな」

「やーだ、ホントに言ったんだ？」

臆面もなく言った朔に、さくらはくすくすと笑い出す。

「当たり前だろ？ さくらは俺のモノだ」

墓前に合掌してから、朔はさくらを抱きあげた。

いわゆる『お姫様抱っこ』である。

「朔ちゃん？」

さわさわと、山の斜面に広がる緑が、陽光を受けてなびいていく。

風が渡り、世界に色彩いろが戻り 時は、世界は色を変えながら

廻りゆく。

時は過ぎゆき、流れは分かたれて、道を変えていくけれど、それも
外せない『循環わかん』の一部。

二人を裂いた訣わけれも、二人が出逢ったのも、確かな意味があるのだ。
偶然はなく、すべては必然。

「俺とも、約束しろよな？ なにがあっても『生きる』って」

ぼそぼそと呟くその顔は、拗ねた子供の顔。

さくらは、手を伸ばして朔の前髪をわしゃわしゃと撫でた。

「とつくに、約束したじゃない。一生一緒だって、ね？ 拗ねないの」

「うー（まだ、怒ってるらしい）」

「うへ、早く着いたって言うけど……結構経ってたんだ、もう夕方
だあ」

さくらは、腕時計を見て思いきり溜息した。

時計の針は、5時半。

「帰ろうか？ 少し冷えてきたな」

朔は、そつとさくらを降ろしてやる。

「うっん、宿はもう取ってあるの。ここから近い所よ、行こう」

さくらの後についていった先にあったのは、善徳の外れにある、一軒の旅館だった。

「ここね、去年も泊まったんだ、お風呂も広くて、すごくいいのよ？」

はしゃぐさくらの脇で、朔は不思議そうに首を傾げた。

「……おかしいな」

「わー、久し振りい……朔ちゃんも早く早くっ」

ぶぶんっ、と手を振って、さくらはなにが嬉しいのか、はしゃぎまわっている。

（おかしい……こんな旅館があるの、おいら知らねえぞ？）

それに、なんか気配。

同族か？

「おーい、なにしてるのようっ、先行っちゃうよ？」

旅館の引き戸に手を添えながら、さくらがもう一度、朔を呼ぶ。

「あ、ああ悪い」

「もう、どうしたの？ ぼーっとして」

きゅーっと、腕に抱きつくさくらの頭を撫でて、朔は『呆けてた』と笑った。

「なんだそれ、まあいいけどさ」

中に入っていくさくらに続いて、玄関の扉を閉める。

違和感を感じながらも、楽しそうなさくらの気分を害させる気になれず、朔は迷いつつも口を噤んだ。

追憶（後書き）

『生きる、なにがあっても』

がこの章のテーマですね。

こんな話ですが、よろしくお願いします。

（ペーリ）

小休止（前書き）

琥珀の墓参りに、さくらの故郷である徳島を訪れた2人。
宿を取った先の旅館の女将と、さくらは知り合いで、しかも朔と同族である『森の民』であることが判明。そこはさておき、2人は、
そこでしばしの休息を取ることにした。

小休止

さくらと、この旅館の女将が話をしている間、朔はなにやら落ち着かなかった。

気配だ。

やはり同族の気配がする、近くに、何者かがいるのかも知れない。警戒しながらも、片方はさくらの会話を聞く。

話の内容からして、さくらと女将は知り合いのようだ。

「今年も、またお世話になります。澪君^{みお}も、こんにちは」

さくらが少し屈んで微笑みかけると、女将の足に、しがみついていた少年が振り向いて『いらっしやい』と笑った。

「おりこうさんねえ、澪君は幾つになったのー？」

「5つ！」

もにもにと小さな手を動かして、身振りですう伝える澪に、さくらは悶絶する。

「かわいーいつ、やっぱり子供って好きだなあ」

弾けるように笑う、さくらの意外な表情に、朔は一つ瞬く。

「さくらちゃん、そちらの方は…？」

微笑みながら尋ねる彼女に、さくらは幸せそうに笑った。

「この人は、朔っていつてね…あたしの一番大切な人なんだ。椿さんと同じ『森の民』だよ」

瞬間、朔は固まる。

（『森の民』……そうか！ この女の気配だったのかっ）

「あ、あの」

びくつと、固まった朔に、椿は慌てて付け足した。

「大丈夫、長には伝わりません……安心して？ ここには、結界が張ってありますから」

「ありがと、椿さん」

話からして、危なかったらしいことを悟り、ほう、とさくらが安堵

の息をついた。

「いいのよ、昔のよしみだもの。あなたの家には、よくお世話になったから。お部屋の方に、案内しましょうね」

椿は、廊下を静々と歩いてゆく。

「お夕餉、でき次第にお持ちしますね？ それでは、ごゆるりと
そう言うと、椿はにっこりと笑って襖を閉めた。

「静かね」

ぼつりと呟いたさくらに、朔もどうしていいか分からず、小さく返事を返す。

「ああ」

二人きりになり、どこかくすぐったいような静寂を感じて、さくらはテレビを付けた。

「……さくら」

朔が甘えてくる。

テレビではバラエティ番組が流れていて、芸人の、とりとめもない笑い声が聞こえている。

そんなギャップに、さくらは内心笑った。

「ダメよ、離して？ こんなとこじゃできないわ？」

「やだ……離さねえ」

首筋に口づけられ、彼の熱い息がかかる。

「や、ん……ダメ、朔」

背中からまわった手が、さくらの胸元に触れようとした瞬間。

「ねーねー、お兄ちゃん」

ぐい、と朔のトレーナーが小さく横に引っ張られた。

「ぶっ！」

バランスを崩した朔は、みごとに床へご対面。

「てーめーえゝ、ぬぁにすんだよ、このちびっころっ」

朔は、恨みの籠もったジト目で侵入者を睨む。

「澪君か…どうしたの?」

(もう少しだったのに……はあ)

さくらも溜息混じりに、飛び込んできた侵入者・基い澪を手のひらに拾い上げた。

「隠れんぼ、隠れんぼしてたの、一緒に遊んでー」

悪気はなかったらしく、無邪気にえへー、と笑う澪。

それと正反対に、ぴょん、と膝に飛び降りた茶色い小ウサギに、朔は顰め面。

「しょーもない、いっちょ遊んだげるっ」

きやつきやとはしゃぐ2人を見ながら(主に澪の方)朔のこめかみに、青筋が数本浮く。

(このガキ……あなどれねえっ)

「かくれんぼ、しょー!」

「おわ! お前、いつの間につ」

いつの間にか、自分の膝の上にいた澪に、朔は驚いて尻餅をついてしまった。

「お兄ちゃん、溜息ばかりはダメなんだよ?」

「んだよ?」

澪は、小さな前足で朔の膝を叩きながら得意気に言った。

「幸せが逃げちゃうの。めっ」

(ガ、ガキに『めっ』とか言われた) (っ) (怒)

「あーあーあ、朔…とりあえず、行ってくるね?」

「バイバイお兄ちゃん!」

憎たらしく笑顔で手を振る澪に、朔は更にへこむ。

げしょ…と自己嫌悪に陥っている朔を放っとらかして、さくらは澪と庭に出て行ってしまった。

小休止（後書き）

こんにちは、維月です。

朔とさくら、段々きわどくなつて来ちゃったなー（汗）
どうなんだろう……。

拙作に、よろしければ感想などいただければ幸いです。
こんな作品ですが、よろしくです。

最悪の邂逅

長とさくら（前書き）

現長・奈与とさくらが鉢合わせ！？

先代の父親と同様に、人を憎む奈与は、さくらに殺意を抱く。

実は、朔と奈与は血縁で！？

絡まり合う憎悪の果てに、異空間へ避難した二人。

一体、どこへ行くのか……？

（またただわ、一番早くに起きちゃった……椿さんは起きてるだろうけど、朝ご飯まで時間あるよね。散歩でしようか）

少し離れて寝ている朔と、昨夜そのまま、遊び疲れて寝てしまった溲を起こさないように、さくらは玄関へ向かった。

幸いなことに、途中誰にも会わずに外に出られ、さくらは安堵する。今は、気分的に一人になりたかったからだ。

「懐かしいな、小さい頃よく通った道だ……」

さくらは、半ば草に埋もれた道を進んでいく。

この先には、不思議な色の水を湛えた、泉があるのだ。

「まだあるかしら、あの泉……潰れてなければいいけど」

あの土砂崩れの後、さくらはその時の記憶が、すっぽりと抜けていた。

そう　　いわゆる、一時的な記憶喪失のように。

せり出した草を、片手で払って進み出た瞬間、さくらは思わず足を止めた。

泉の畔に佇む、青い毛並みをした、大きな獣と目が合ったのである。見つめ合う両者、互いに驚きが隠せないようだった。

「で……でかいウサギ」

ピンと張った耳は巨大で、大地を踏む足は逞しく、爪は鋭い。

大型犬より大きな獣を、さくらは生まれて初めて、目にしたのだった。

「に、人間か？」

声が重なり、さくらはぱちくり、と瞠目する。

大ウサギも、物珍しそうにさくらに近寄り、さくらの手の匂いを嗅いだ。

「やだ、くすぐったいつ、カワイイね、お前」

スリスリと纏わりつく、大ウサギの頭を撫でてさくらは笑う。

「珍しい女よの、我を見ても驚きもせぬとは……まことに人間か？」
青毛の大ウサギは、少しさくらと間を取ると、苔生した石の上に座った。

「そういうのと縁があるのよ、あなたみたいに、立派な人は初めてだけ」

「粹な女じゃ、名を申してみよ……」

苔生した石の上に座り、真っ直ぐに自分を見つめる彼からは、どこか支配者を思わせるような、威厳が感じられた。

「人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るものよ？」

そう言つてさくらがウインクすると、大ウサギは度肝を抜かれたのか、目を大きく張った。

「よかるう、我こそは『森の民』現総領・奈与なたくという、そなたは何と申す」

「あたしはさくらよ、奈与さんつて、お祖父さんみたいな話し方をするのね？」

「そういうのは、よく分からぬが……のう、さくらとやら。以前に、どこかで会いはせんかったか？」

「え？」

さくらは、そつと傍に寄つてきた奈与に、ほんの少し後じさる。

「いや、その名に覚えがあつてな……確か、琥珀と一緒にあった女子の名と、同じで」

きろり、と流した横目で見られた刹那、さくらは凍る。

「琥珀を……知っているの？」

「ふうむ、やはりそなた……『あの時』の生き残りじゃな？ あやつが捨て身で救つたという」

がり、と前足で踏みつけた石が、粉々に砕け散る。

「で、でも……あたし、あなたに会つたの、今が始めてでっ」

さくらは、ひどく慌てて後じさつた。

「おめおめと戻つてくるとは、余程命が惜しくないとみえる……我

は、椿のようには甘くないぞ」

はっ、と息をのむさくら。

それと同時に、さつき、なぜ廊下で誰にも会わなかったのかを悟り、きつく奈与を睨み据えた。

「椿さんに、何をしたの?!」

「我に齒向かう者には『死』あるのみ……消した。そして、そなたもここで消えるのだ」

一瞬で組み倒され、肉食獣のような、牙の感触を首筋に感じる。

奈与はグルル、と唸ると、さくらを踏みつける前足に力を込めた。さつき、座っていた大岩を砕いたのと同じように。

柔らかい皮膚が裂けて、傷口に鋭利な爪が食い込んでいく。

ポタポタと流れ落ちる血に、奈与は目を細めて舌を這わせる。

さくらは、殺気を突きつけられ、息をするのもままならなかった。

「どうだ、狩られる者の気分は? 恐ろしかろう、痛かろう」

「やめ、て」

搾りだすように言ったさくらを鼻で笑うと、奈与は襟首を啜えて草むらに投げ捨てた。

「同じ事を、貴様ら人間は我らにしたのだ……そこで、しばし祈るがいい」

奈与が、少年の姿に変わっていく様子を、さくらは愕然と見送っていた。

少年に変わった奈与の手のひらに、稲妻のような光が集まると、それはさくらの足元に生えた、雑草の穂先を粉々に砕く。

「どうした、恐ろしいか? 次は当てる、楽にしてやろうぞ……ぐっ!」

奈与が、再びさくらに手のひらを向けようとした瞬間、彼は低く呻いた。

小石が彼の後ろ頭にヒットしたのである。

「さくらに触んじゃねえ、っのゲスが!」

「朔!」

瞬歩で、樹梢からさくらの傍に降り立つ朔。

躓きながら、自分に掻き付いてきたさくらを、朔は宥めるように頭を撫でた。

「悪かった、傷、痛むか？」

ぶんぶんと、首を横に振るさくらに『よし』と笑って、朔は『森の民』総領である奈与を睨みつけた。

「朔……貴様、戻っていたのか。なぜその女を庇う！」

奈与は忌々しげにさくらを睨みつけながら、吐きつけるように言う。

「てめえこそ、なんでさくらを狙うんだよ？」

「その女は、我が先に見つけた獲物じゃ！ 仕留め損ねた獲物を、今やつと見つけたところを、貴様がしゃしゃり出おって、この愚か者っ」

「獲物だあ？ ふざけんじゃねえぞ、てめえ」

瞬間、キン…と朔の青い瞳が、殺気を宿して色を変えた。

びくっ、と震えた奈与に、朔は二やりとする。

「なっ、なっ」

今までの威勢の良さはどこへやら、尻餅について震えだした奈与に、今度はさくらが動いた。

奈与の頬を、平手で殴ったのだ。

「命を、なんだと思ってるの！？ 玩具じゃないの、失くしたら、もう戻らないのよ？ 非道いよっ、椿さん殺すなんてっ」

朔に泣きつくさくらに、奈与は腕を組んで鼻白む。

「椿が恋しいか？ 貴様も、今すぐあの世に送ってもいいんだぞ？」

「いい加減にしなさいよっ！ カワイイって言った、あたしがバカだったっ、アンタなんか、全然可愛くない、このひねくれ者っ」

殴ろうとしたさくらの手を止めて、朔は奈与を放り投げた。

「てめえみてえなヤツと、血い繋がってるなんてな……考えたくもねえ、このクソガキっ」

「考えるヒマ、なくしてやるっ」

バリツと、雷が^{いかずち}大気を引き裂く。

奈与が手のひらを向け、雷撃を放つのと、朔がさくらを庇ったのは同時だった。

「きゃあああ

っ！！」

「くっ、クソガキい

っ、ぐうっ……さくら、さくらしっ

かりしろ！」

バチバチと、雷撃がさくらを灼く。

「くそっ！」

このままでは、さくらが危ないと直感した朔は、地面に血で移動陣を描く。

印から燐光が噴き出すと、朔は気を失ったさくらを抱え、非常口として開いた筋に飛び込んだ。

見知らぬ世界で…（前書き）

奈与の追撃から逃れる為に飛び込んだ異世界で、朔とさくら…2人は茫然と立ち尽くすことしかできなかった。

異世界の湖に 筋 が開けた時、二人の前に現れた人影があった。それは…！？

見知らぬ世界で…

（くそっ！ 筋の底に足が着かないなんて、雷撃で空間が歪んだなっ）

朔が非常口として飛び込んだ。筋は、ただ広い闇だった。

片方には意識のないさくらを抱え、朔は深闇の中を、出口を探して漂う。

（さくら、息が浅い……これじゃあ危険だ！）

意識を失ったさくらは、夜目にも青白かった。

ひやり、と朔の頬を、凍った闇が撫でていく。

そうしている内に、天井あたりが薄明るく光っているのを見つけ、出口へ向けて、朔は底を蹴って昇っていった。

「ぶはっ！ げほっ、げほ！ かはっ」

大きく水しぶきが上がって、朔が顔を出す。

ヨロヨロと砂浜に倒れ込むと、さくらがその衝撃で噎せ、飲んでいた水を全部吐きだした。

「げほっ！ けほけほっ、うう」

「

「さくら！ さくら、しっかりしろっ」

ぼんやりとする視界に揺れる影に、一瞬、琥珀の影が重なる。

「さ、朔ちゃん……なに、ここ？ あたしたち、どうしたの？」

朔はさくらを抱き締めると、宿めるように、^{まだ}何度も頭を撫でた。

「すまない、奈与から逃れるには 筋に入るしかなかったんだ。

平気か？ どこにもケガ、してない？」

さくらは、ゆるゆると首を横に振る。

「朔こそ、傷……痛くない？ あたしを庇ってくれたのでしょ？」

朔の、赤剥けた手をそっと包んで、さくらはポケットからハンカチを出し、端を細く裂いて、傷口を手当てした。

「ごめんね、痛かったよね……みんな、ごめん」

手当てをしながら涙するさくらを、小さく小突いて朔は笑う。

「気にするな、俺も椿も心配ねえよ……『森の民』はそう簡単に死なないのさ。だから……な？ もう泣くな」

「ホン……ト？ 椿さん、生きてるの？」

朔が微笑みかけると、さくらも安心したように微笑む。

「よかったあ」

朔は、嘘をついた。

椿は 彼女は死んだのだ。

（ごめん、さくら、おいら……嘘ついちゃった）

嘘を、つかなければいけなかったのだ。そうしなければ、さくらは深く傷ついていた。

さくらが旅館を出てすぐに、さくらの外出を、厨房にいる母に伝えに行つた湊が、大声で泣き叫びながら戻ってきたのだ。

『お兄ちゃんつ、お兄ちゃん！ お母さんを、お父さんがあーっ』

『なにがあつたっ』

急いで場に急行すると、そこは一面の血の海。

その中に、肩口を大きく裂かれた椿が横たわっていた。

『お前っ！？』

『私はいい……こうなると、分かっていたから。すみませ、あの人を……奈与を、止められなかった、さくらちゃんが危ない、奈与は……』

……あの子を殺す』

『手当てをつ、すぐ戻るから……』

そこまで言いかけた朔を、椿は浅い息のしたで遮った。

『行っ……て、早く！』

そこまで言つと、椿は自らの本性に戻った。

息を、引きとつたのだ。

椿の命を賭した叱咤に、朔は死にものぐるいで、さくらの気配を追つたのだつた。

「生きよう、どんなことがあっても……」

腕の中で、大人しくしていたさくらが、ふと思いついたように問う。

「帰ろう朔ちゃん、帰れるのよね？」

「筋 が歪んでる……奈与のせいだ。さくら、よく聞いてくれ……俺たち、どうやらここで暮らすしかないみたいだ」

「う……そ」

「すまねえ、さくら……何度も試したんだ」

悔しそうに呟く朔と、ぺしゃんと座り込むさくら。

さくらは溜息をついて脱力すると、ややしばらく間をおいて、すつくと立ち上がった。

「なっ、なによっ、別にこれしきで、へこたれるあたしじゃないもの！ 奈与なんかの好きに、させないんだからっ、ねっ、朔ちゃん」
「す、すごいな」

思わず言ってしまったて、朔は慌てて口を噤んだ。

落ち込んでいると思いきや、強気で地面を踏みしめる。

そんな彼女に、朔は改めて惚れ直し、感服したのだった。

「それにしても、ここどこ？」

さくらは、きよろきよろと辺りを見廻しながら歩き始める。

さくさくと砂地を進んでいくが、見たす限り、どこまでも広野が広がるばかりだ。

湖沼特有の水の匂いが、つんと鼻がつく。

どうやら、朔が飛び込んだ 筋 は、この湖に通じていたようだ。

さつきから、何度も開こうとしてくれていたが、向こう側で閉じられてしまったらしい。

「さくら……もしかしたら、日本出たかもな……迂闊には動けないぞ？」

「ええっ！？ そうね……でもどうしよう？ このままって訳にもいかないじゃない」

朔は、諦めたように座り込むと、大仰に溜息する。

「まずは、ここがどこか知るべきだよな？ 民家でも探そう」

「うんっ、ここがどこであれ、あたし達生きなきゃ」

バツと立ちあがった瞬間、さくらは、自分たちを不思議そうに見あ

げている子供と目があった。

「あ、れ？」

「おかあさん！ 誰かヒトがいるよ っ」

さくらが首を傾げるが早い、子供は喜々として走っていった。しまった。

「げーほげほげっ！ー！」

砂が舞って、咳き込む二人。

「朔ちゃん、いま…言葉通じたよね？」

「ああ」

「ってことは、ここ日本なんだ！ よかったーっ」

きゆう、と抱きつくさくらの勢いに、朔はぺたんと尻餅についてしまった。

「うれしーっ」

ぎゆうぎゆうと抱きつく、さくらの、濡れてはつきりした胸が押しつけられて、朔は思いきり沸騰する。

「おかあさん、こっちこっちー！」

そのうちにさっきの子供が、きゃっきゃとはしゃぎながら、母親とおぼしき女性の腕を牽いて戻ってきた。

朔が、慌てて背中にさくらを庇うのを見て、その赤毛の女性は笑みを深くした。

「この湖を通ってきたのね？ まだ通じてたんだねえ、大丈夫？ ケガとかない？」

さくらは、彼女の服装と自分たちの違いに、内心『まさか』と息を詰めた。

「あ、あの…ここって、日本じゃ、ないの？」

「ホントに日本から来たんだ！ ねえ、向こうは今どうなの？ こちと季節は同じ？」

「えっと、あの…あの」

「ちよっと待ってくれっ、さくらがびっくりしてる！ それに、アంతは誰なんだ？ 向こうって事は、ここは日本じゃないんだな？」

質問攻めに遭い、まごつくさくらを背中に庇って、朔は赤毛の女性をギロリと睨んだ。

「ごめんごめん、懐かしくてツイ…ね。あたしは氷魚^{ひお}、こつちが息子の風季^{ふうき}だよ。あたしも、日本で暮らしてたことがあるんだ。ここがどこかって言ってたけど……とりあえず、場所を変えて話そうよ、びしょ濡れじゃないか」

赤毛の女性・氷魚は『ねっ』と人懐っこく笑って、さくらに手を差しだした。

「あ、はい」

さくらは、今になって自分たちが濡れ鼠な事に気がつき、頬を染める。

朔は相変わらず、本能的（？）に警戒したままだったが。

見知らぬ世界で…（後書き）

こんばんは、どうもご無沙汰しておりました、維月十夜です。

『Rabbitぱにつく』11部のお届けに参りました。

さてさて、本題。

椿と漣の親子…（死んじゃったよ…椿、ごめんねっ）漣の父親は奈与ですよ。

意外。

そして、異界に飛ばされた2人の前に現れたのは『幻夢シリーズ』の氷魚さんです。

こんな話ですが、読んでくださる読者様には感謝です。

これからまだまだ続けていく予定なので、よろしければぜひひ謁見の程を。

長文ですみません、それではこの辺で失礼致します。

救い手（前書き）

徳島から 筋 を通って、なんとか別の空間に避難できたさくらと朔。

しかし、そこは日本とはまったく違う成り立ちの国で、『七つ国』ななつくにという異世界だった！

七つ国に、辿り着いた二人に待ち受けるのは……！？

救い手

氷魚と風季について行って、湖からそう離れていない村はずれに、石造りの一軒家が聳^{そび}えているのが見えてきた。

四つ角に整備された道の両側には、青々とした作物の葉が茂る、畑が広がる。

「こつちよ、入って入って」

氷魚が玄関の扉を開くと、そこには、中世ヨーロッパの民家によく似た内装の、居間が広がっていた。

壁には、たくさんのドライフラワーが逆さに飾られ、深い碧^{あお}を基調とした、見方によって色を変える不思議で、複雑な色彩の天井には、見慣れない文字が円を描いて彫り込まれている。

「きれい……でもなにかしら？ 天井に、文字みたいな、模様みたいなものがある」

「ケルト文字……一種の結界陣だな」

ぼつりと言ったさくらに、朔は低く囁いた。

「お兄さん、これが分かるんだ？ ってことは、人外だね？」

氷魚は、ふむ……と腰に手を当てると、朔をまっ直ぐに見つめる。

「おかあさん、お兄ちゃんね、ウサギさんなの。でね、こつちのおねえちゃんも人間だよ？」

朔は、急に指を差され、しかも種族を当てられてぎょつとした。

「俺の属が分かったって事は、あんたらも……？」

よじよじ、と膝によじ登る風季を抱きあげて、氷魚はこころと笑った。

「分かるよ、それが基本だもん……ちなみにあたし達は人狼さ。って言っても、暮らしの面じゃ、人間と何ら変わらないんだけどね」

「ここに……人間はいないの？」

「ご、ごめん……そうだよ、煽^{おほ}ってどうすんだ、あたしのバカつ、と、とにかく心配なくて良いよ、ここの世界も、そんなに悪いト

「コじゃないから、ね？」

怯えに表情を曇らせたさくらに、氷魚は慌てて謝る。

氷魚は、壁に貼ってある地図を外すと、テーブルの中心に広げた。

「この世界はね、見て……7つの国から成り立ってるの。棠・勾・蘇・栖・崙・東崙・胡。だから、ここは 七ツ国 というんだ……」

「……七ツ国」

呆氣にとられつつも、さくらは小さく反芻する。

「さくら、大丈夫だ」

茫然とするさくらの肩を、朔が強く抱き寄せた。

「今いるここは、棠国の西外れにある弼庄という所よ……お兄さん、よっぽど彼女が大切なんだね。あ、そっぴや名前を聞いてなかったっけ、訊いてもいい？」

「あ、すみません……名乗り遅れまして、あたしはさくらといいます。で、こっぴが」

「朔だ」

さくらと重なるように言った朔に、氷魚はナイスタイミングと笑った。

しかし、ピリピリと警戒する朔は相変わらずだ。

「怖がらないでよ、別になにもしないからさ。お茶どうぞ」

二人の目の前に、それぞれ湯飲みが置かれ、湯気と香りが鼻腔をくすぐる。

「おいし……温かい」

「んまい……」

「それにしても驚いたなあ、初夏とはいえ、水も冷たかったでしょうに……どうして湖なんかに 筋 を？ この世界でも、もう少しマシな場所があるよ」

お茶にがつく二人に、氷魚はひょいと片眉を上げてみせる。

「仕方なかったんだ、逃げるので精一杯で。しかも、攻撃のせいで帰り道が歪んじまって」

その柳眉を顰めた朔に、氷魚は小声で問うた。

「ねえ、逃げてるって……追われてるの？」

ことん、と湯飲みを置いて、朔は俯く。

「まあ、そういうことになるが……迷惑、かけるつもりはない。茶、馳走になったな。行こうさくら」

「ごちそうさま、ありがとう氷魚さん」

「ちよつ、ちよつと待って！ 他に、宛がある訳じゃないんでしょ？」

早足で玄関に向かう朔とさくらを、氷魚は慌てて止めた。

「ない。けど……俺たちに関わったら、死ぬかも知れないんだ」

「そんな危険な事っ、二人だけじゃさせられないよ！ 迷惑がなんだい、そんなのちーとも構やしない。だから、ね？ よかつたら二人とも、ここに住まない？ 大勢の方が楽しいでしょ？」

「で、でもっ」

「その先は言いつこナシ！ さてと、事情を聞こうかな」

あわあわと困惑するさくらに、氷魚はびしつと指を向ける。

逃がさないよ、といわんばかりに食い下がる氷魚に、遂に根負けした朔は、ひよくつと首を竦めて見せた。

「分かった、話そう……俺は、そのボウズの言つとおりウサギだ。けど、ただのウサギじゃあない。『森の民』という一族なんだ」

「その『森の民』から逃げてるのね。なにか、追われるようなことでもあったの？」

「それは……あたしから話すわね？ 朔ちゃん、いいでしょ？」

「ああ」

こくりと頷いた朔の膝に、風季がよじ登ろうとしては、失敗を繰り返している。

どうやら、座高が高すぎて届かないようだ。

「4年前、あたしは琥珀というウサギと暮らしてたの……彼も、朔と同じ『森の民』の一人で、人間と変わらない暮らししてた。でもその多くは、人間を憎んでいるのが殆どで。そして4年前のある日、事故が起こったのよ、あたしの実家があった村を、土砂崩れが

襲った。あたしが…その時唯一の生存者」

「その土砂崩れを起こした先代の長と、現総領が執念深くもさくらを見つけて、『殺害計画』を実行したって訳だ」

「ちよつと、何なのそいつ……さくらさん、なにも悪くないじゃないっ」

拳を握って地団駄を踏む氷魚に、風季がまわりついて甘える。

「おかあさん、とうさん帰ってきたよー」

それと同時にボタン、と勢いよく扉が開いたかと思うと、脇に一つずつ袋を抱えた青年が、歩調荒く入ってきた。

「ひーおー……てめえっ！ 今度はお前が行けよなっ、重かったんだぞ、小麦の袋2つも」

「遅かったじゃないの、それに…お客さん来てるんだから、少し静かにしてちょうだい」

「他に言うことがあるだろうがっ、ったく」

どかつ、と長椅子に座った瑪瑙の膝に風季がよじ登って、小さな口元に、人差し指を当ててジェスチャーする。

「とうさん、お客さんビックリしちゃうでしょ、しーよ、しー」

「客？」

瑪瑙は、向かいの長椅子に座る朔とさくらを見てから、ちらりと氷魚の顔を見た。

「この二人は、さくらさんと『森の民』の朔ちゃん。小一時間前くらいに、昔アンタが開いた 筋 から出てきたの」

「ああ！？ あの湖の 筋 なら、とつくに閉じたはずだぞ？ 別のヤツじゃないのか？」

「ホントよっ！ だって、あれ以外に 筋 通ってる場所なんて、この近くにはないものっ」

「わ、悪かったよ……別に責めてるんじゃないし。ってなあぜ俺の首を絞める」

ぐぎぎぎぎ…と首を締めあげられ、当事者の瑪瑙に、朔とさくらに

も冷や汗が浮く。

「分かればよろしい」

「いてて……それに、あんた朔だっけか？ 『森の民』だって？
それ本当か？」

「知ってるの？ 瑪瑙ってば」

首を傾げる氷魚、どうやら知らなかったようである。

「言ったが、なんだ？」

朔は、膝の上で組んだ手を、きつく握りしめた。

その震える拳を、さくらがそっと包む。

「ああ……『森の民』ってのは、この世界にかつて現存した、古代種族の名だ。どこかに移住したって聞いてたが、まさか、あんたらの世界にいたとはな」

「ええ、それで……あたし達、逃げてきたんです。その『森の民』から」

俯き気味に言ったださくらに、瑪瑙は思わず身を乗り出した。

「追われてるのかっ？」

「あつ、いえ、あの……ご迷惑はかけませんっ、また追っ手が来たら大変だし、それに、お子さんもいるわけですし」

さくらは、朔の服の裾を引っ張って、長椅子から立ちあがる。

「色々と面倒事があるからな、長居はすまい」

「そつ、そんな二人ともっ！」

玄関へ向かおうとする自分たちの前に、通せんぼをする氷魚に、さくらは、やんわりとその片腕に触れて微笑んだ。

「ありがと、氷魚さん……その気持ちだけで充分よ。これからなにがあるか分からないけど、暫く二人でやってみようと思うの。それでも分からないことがあったら、また来てもいいかしら？」

「もっちろん！ なにかあったら、いつでも来てっ」

ぶぶん、と強く握り合わせた手を振る氷魚に、さくらは気圧され気味に笑う。

「あ、ありがとっ」

と、黙って話を聞いていた瑪瑙が、勢いよく立ちあがった。

「ついてきてくれ、とりあえず、これからの寢床がいるだろ？ 客分を無碍にする心根は、生憎持ち合わせてないんでね」
につ、と笑う瑪瑙の背中を、氷魚が『あんたつてばっ』と強く小突く。

「ってーな、氷魚…お前は留守番してろよ？ 風季と風音放つといたらエライことになる」

外野で、きゃわきゃわと騒いでいた風季の他にもう一人、頭数が増えていことに気づいたさくらは、ぱちくりと瞠目してしまった。

「えっ、氷魚さん…もしかして」

「そうなの、こいつら双子なのよね……やんちゃ盛りで煩いっただけ」

行くぞ、と一瞥する瑪瑙についていく二人を、氷魚は心配そうに見送ったのだった。

畑の脇を、スタスタと進んでいく瑪瑙。

あとをついていきながら、足を止め、しきりに周りの景色に魅入っている。

「わあ、すごい山脈…あたしのトコより高いのねえ」

「霞のかかり方が……徳島とは格が違うな」

「おいおい、置いてっちまうぞー？」

風景に感動していた自分たちの数歩先で、瑪瑙が振り向き様に呼んでいる。

それに気づいたさくらは、まだ呆けている朔を引きずって、再び歩を進めた。

「すっ、すみません……ほら朔ちゃん、行くよっ」

「さっ、さくらあ」

（女って、男より…ある意味逞しいよな）

二人を見ていながら、瑪瑙はしみじみと内心で呟いた。

「ここだ、氷魚の母さんが住んでた場所なんだけどな、よかつたら使ってくれ」

『古くてごめんな?』と笑う瑪瑙に、朔とさくらは思いきり首を横に振った。

「そんなつ、すごいですつ……こんな立派な家、貰っちゃっていいんですかつ?」

さくらに賛同して、コクコクと頷く朔を見て、瑪瑙は大仰に溜息する。

「いいから連れてきただろ? それとな、細かいこと気にしすぎだぞ? 気にすんな、遠慮なんかいらねえよ」

「あ、ありがとう」

「おうよ」

瑪瑙達三人の前には、立派な石造りの家
いや、洋館が佇んでいた。

「すまねえな、色々……そうだ、あんたの名前は?」

「俺ア瑪瑙めのうっていう、朔だったか? なにかあれば呼べよ、力になるぜ」

につ、と笑い合う二人に、さくらもつられて笑う。

「おっと、案内役はここまでだな……こっからは、お二人さんで上手くやってくれ」

帰っていった瑪瑙の姿が見えなくなってから、さくらはそつと朔の腕に抱きついた。

「親切な人でよかったね、朔ちゃん」

抱きついたままの、さくらの背中がフルルツと震える。

「寒いのか? とりあえず中に入ろうな」

朔は、さくらを伴って、洋館の扉を引っ張った。

からん、と、軽やかな鈴の音と共に開いた先には、日本でもよく見られる、いわゆる豪邸を思わせる空間が広がっていた。

「……どっかで見た感じだよな」

ぽつり呟いた朔に、さくらも小首を傾げる。

「わっ？ あったか……い」

玄関で靴を脱いで、フローリングの廊下を通って室内に入った瞬間、ふうわりとした暖気が二人を包んだ。

次いで、吊り鐘型のランプに、一斉に明かりが灯る。

「す、ごい……どうなってるの？」

啞然として呟いたさくらの横で、朔はキョロキョロと、珍しそうに天井や周りの壁を見回しながら、独り言のように囁いた。

「魔力で満ちてるんだ、あの文字が彫り込まれて」

「魔力……？ あ、この模様って、氷魚さんの家にあったのと同じ？」

白壁の天井には、様々な形をしたルーン文字が彫り込まれ、まるで天球を廻る正座の如くに、天井や壁を巡っていた。

文字は、廻りゆく度に光り、その様は儚い螢火が舞うようでもある。

と、さくらが深い溜息を吐いた。

それが、感嘆からくるものではないことは、赤く潤んだ彼女の瞳からして明白だ。

「ねえ、朔ちゃん……どうなるんだろ？ あたしたち」

さくらは、榻に座る朔の胸板に、きつく身を寄せた。

「……」

朔は、なにも言わずに、ただ、さくらを抱き締める。

「これじゃ、行方不明じゃない……イヤよ、朔ちゃん、帰りたいよう」
ガクガクと震え、迷子の子供のように泣きじゃくるさくら。

「……生きるんだ。今、ここで」

そう言って、ぽふ……と髪を撫でる朔の表情は、どこまでも優しくかった。

「……ごめん……ごめんね、責めてるんじゃないの。ただ、考えたら急に怖いな……って」

「それが当たり前だ。けどな、さくら……同じトコで迷ってないで、今できることをしよう？」

くすん、と鼻を嚙ってから、さくらはじつと、朔の青い瞳を見つめた。

「『いま、できること』か。そう、そうよね？ あたしったら……」

朔だって、不安じゃないはずがない。

朔だって同じなのに、不安は同じなのに。

自分が一人、辛い訳じゃないのだ。

「生きよ……ね？ 朔ちゃん、ずっと一緒に」

朔は、さくらの肩を抱いたまま、半身を捻って窓の外を見る。

暮れてから、大分時間が経っているのだろう。

こちらに来てから、初めて見あげた夜空。

なにが同じで、なにが違うのか。

同じのようで、同じではない。

見あげた夜空には、深く沈んだ群青が、果てなく続いていた。

救い手（後書き）

維月です、『Rabbitぱにつく』新章のお届けに上がりました。
さて、本題。『七つ国』に辿り着いた2人ですが…

パニくってますね（笑）

ちよつと可哀相だったかなー…なんて、今ごろ思ってたりにして。

ここまで読んでくださる読者様には感謝です〜（＾o＾）

これからも、もしよろしければ、ご愛顧くださいませ。

それでは、失礼致します。

When that's love もし、それが愛ならば？

（前書き）

さくらと朔が、あくせくしている一方で、奈与も、ある想いを抱えて葛藤していた。

なんと、さくらに想いを寄せていた奈与。

しかしまた、それが新たな波乱を呼ぶことになるうとは誰も予期していなかった。

When tha's love もし、それが愛ならば？

奈与は、一人湖畔に佇んでいた。不思議な色の水を湛える、あの、いつかの泉である。

尤も、いま水は、鏡のように色を変えているが。

「なぜ、気になるのだ？ たかが、人間の小娘一匹に……」

ぼつりと、しかしはつきりと言った彼は、水鏡に映し出されるさくらの姿だけを、食い入るように見つめていた。

「朔め、あいつ……オレの獲物を横取りおつて、許さぬっ」

水鏡に映るのは、互いに寄り添い、睦み合う二人の姿。

奈与はまだ幼さの残る美貌を歪め、水鏡の中にいる、さくらの唇に手を触れてから、そつと唇を合わせた。

（オレは兎族・森の民の長だつ、手に入らぬ物などないのだ！ さくら……必ずや、手に入れてみせるっ）

触れた（水鏡にだが）唇を押さえつつ、頬を染める奈与は、少年らしく初々しい。

あの唇に、直に触れてみたい……と思うのは、罪だろうか？

人を恨むのをやめた先代

今の兎族で、人を恨む者な

ど自分を除けば無に等しい。

『なぜ、なぜです長……闘う理由など、どこにもないのに』

奈与の中に、一頻り琥珀の声が蘇った。

4年前、兎族でありながら、人に与した男である。

（のう、琥珀よ……そなたも、こんな気持ちだったのか？）

どうやら、お前が正しかったようだ。

「そなたが欲しいのだ……さくら、オレのものになれ」

水鏡に夢中で口づける様子は、一見、水を飲んでいるようにも見え
る。

しかし傍観者には、そう解釈されなかったようだ。

「なにをしてる……水鏡なんぞに発情して」

「ぶはつ、うわっ……父上！？ いや、先代っ」

からかいを含んだ中音に、奈与はバランスを崩し、水しぶきを上げて泉に落下。

「てんらん 覬覧の術か、まだ解かれていないな……どれ、奈与、そこをどきなさい」

奈与の父・先代長は、青い髪を、腰辺りまで伸ばしている若い男だった。

面影が、奈与と瓜二つだ。

兔族 いや、全『森の民』は、ある一定の年を取ると、それ以上の変化はない。大体が、二十代の真ん中あたりの外見なのである。

先代長は、軽々と奈与の背を抓むと、草の上に転がした。

先代長は、水鏡の中のさくらを見た刹那、その身を凍り付かせた。

彼は、動揺を押し殺して、なんとか声を出すことに成功した。

「ほう？ これはまた……美しい女子おなこだなあ。奈与、彼女が欲しいのか？」

「バツ、バカをいえっ！ オレが、人間の女を欲しがるわけがないっ」

ニヤニヤと笑う、ご隠居もとい、先代長。

奈与の口調が変わっているが、これが彼の地であり、公私をちゃんと使い分けている。

「発情してたクセに、嘘はいかんぞ」

「してないっ！ この変態がっ」

がうがうと、齒がみしている奈与の額を押さえながら、先代は小さく呟いた。

「椿を消したようだな、それと息子も。どうしてだ」

それに、奈与はぴたりと動きを止める。

「オレに、刃を向けたんだ、友を守るためだとか言って」

先代の深い溜息に、奈与は憤りを露わにして怒鳴った。

「その友が、さくらでも……か？」

奈与は一頻り目を張ったが、すぐに目をそらして低く唸る。

「オレが欲しかったのは、椿^{あいつ}じゃない…さくらだ。ずっと昔、さくらの幼い頃から慕っていたのに」

「奈与、お前はまだ若い……すべてが、自らの思い通りにならないことがたくさんあるのを知るべきだ。例えば、身分や、人同士の絆」
「父上は、オレが間違ってるというのか?!　すべて父上の、言うとおりにしてきたのにつ」

「だからこそ言っている。私は間違っていた、殺戮からはなにも生まれないし、不毛だ。だからもう二度と、我々も人間も、争わないと決めたんだ」

「……父上は、変わったな」

奈与は、悲しげな瞳を先代に向けると、小さく溜息した。

「変わるさ、どんな者も…生きている限りな。お前も変われ」

先代は、懷から緑青に輝く宝珠を取り出すと、奈与の目の前に突きつけた。

「それは……」

緑青に輝く、大小の宝珠　　椿と、澪の魂魄だ。

「椿と澪には、私から新たな体を与えておこつ。お前は、もう少し成長すべきだ」

「父上」

背を向けた先代に、奈与は凍りそうなほど、冷淡に言った。

「オレは、さくらを手に入れる。邪魔をするなら、例えあんたでも…容赦はしない」

「それならば、仕方あるまい……その時は、その時だ」

重い沈黙を破っていった先代の瞳には、過去の、もう一人の自分が映っていた。

若く、愚かだった自分が。

（もう、なにも失うわけにはいかない……その時は止むを得ん、あれを、殺そう）

先代は、静かに踵を返すと、来た道に戻っていった。

「父上には分からない、分からないんだっ」

去っていく父の背中に、奈与はきつく唇の端を噛みしめる。

滲んだ血を吐き捨て、そのまま水鏡の中に、身を投じたのだった。

さくらの願い（前書き）

七ツ国での暮らしにも大分慣れた頃、2人は市場の帰り道で、50年前にこちらに流されてきたという女性・セリナと出会う。セリナとの出会いで、さくらはある野望（希望？ 願望？）を持つて！？

さくらの願い

朔とさくらが、七ツ国で暮らし始めて、早一ヶ月が経った。

初めの何日かは迷ったものの、今ではすっかり慣れてしまい、遠出をして、商人がこぞって軒を連ねる衙呂山^{まち}まで行くようになっていた。

「わあ、相変わらず混んでるわねえ……向こうで言う、市場みたいなモンなのね、きつと」

「おいおい、どっち行くんだよ、野菜類はあっちだろ？」

まったく反対側にある玉石商（屋台の宝石屋）を見に行こうとするさくらを捕まえて、朔は思いきり渋い顔。

「あん、ちよつとだけ見せてよう……朔ちゃんてばあ」

「ここに来るたび同じこと言ってるぞ、今度こそダメー」

「きやつ」

小柄なさくらを、ひょいと抱きあげると、朔はずんずんと人混みの中を進んでいく。

勿論、人混みを掻き分けて進む二人を、振りかえる者が多い。あまつさえ、くすくすと笑う者さえいるのだ。

「やだ　　っ、朔ちゃん降ろして……一人で歩けるからっ」

「おい、大人しくしてろって」

じたばたともかくさくらを押さえ込んでいたが、八百屋の前で、さくらは（無理やり）朔の腕から脱出して、ペロリと舌を出して見せた。

「もう、朔ちゃんのバカ……笑われちゃって、恥ずかしいじゃない」「買うモン買って、早く帰るぞ……怒鳴るなー」

（恥ずかしいと思うなら、もうしなけりゃいいのにつ）

内心ばやきつつも、おかんむりなさくらの脇で、朔はてきぱきと野菜を選んでいく。

玉菜^{キャベツ}、トマト、リンゴにキュウリ。朔の好物ばかりである。

しかしあからさまに、一つだけ避けているものがあつた。

「はい朔ちゃん、ウサギはやっぱり、これ食べなきゃね」

差し出されたのは……人参だった！（どーんっ）

朔、一歩退く。

「朔ちゃん？」

「……人参キライ」

やや暫く黙った後、朔は汗みずくで、ぽつりと言った。

「なに子供みたいなこと言ってるの！ 好き嫌いしないで、なんでも食べるのよっ、すいませーん、コレくださいーい」

さくらは、ポケットから一枚の札を取り出す。

その札は、朱墨で表書きされており、裏にも、同じ朱墨で印が押してある。

先日氷魚がやってきて、この札を渡してくれたのだ。

「あいよ、嬢ちゃん……今日もご苦労さんだねえ。おや、ダンナはどうした？」

八百屋のおかみさんが、野菜を詰めた袋をよししながら尋ねてくる。

「朔ちゃんたら、さっきから拗ねちゃってるのよ……人参買ったから怒ってるの」

さくらが隣を指さすと、むくれ顔の朔が、俯きがちに腕組みをしていた。

「ウサギなのにねえ、人参食べないのかい……珍しい」

「好みてあるだろう、普通」

面白そうなおかみさんに、朔はあくまでも無然として言う。

「そろそろ帰ろ、朔ちゃん」

「うー」（声が低い、まだ怒っているらしい）

「ありがと、おかみさん」

「あいよー、またおいでっ」

なんとか陰悪ムードを裂こうと、さくらは足早に、朔を連れて市場を離れたのだった。

「ごめんてば、朔ちゃん」

プイ、とそっぽを向く朔に、さくらはオロオロ。

（なんか、ホントに子供みたい）

「ちよつと聞いて、きゃっ！」

「きゃあっ！」

「さくら！？」

同時にした二つの悲鳴に、朔は慌てて振り向いた。

さくらは、座り込んでいる女性に謝りながら、散乱した荷物を拾い集めている。

女性は、妊婦だった。

「大丈夫ですか！？ ホントにごめんなさい、お腹…痛くないですか？」

「こつちこそ、よそ見しててごめんなさい…あたしは大丈夫よ」

差し出したさくらの手に掴まって、女性は「よいしょ」と起きあがった。

「荷物持ちますね、家まで手伝いますから」

「ごめんね、迷惑かけるわ」

「いえいえ、ね？ 朔ちゃん」

「あ…ああ」

さくらは、逃げようとした朔の耳朵を、きつく引つ張って笑う。

女性の家は市場から近所にあり、玄関先では、彼女の夫が仁王立ちをして、妻の戻りを待っていた。

「セリナ！ 心配したんだぞっ、珍しく一人で行くなんて言うから、気が気じゃなくて……」

彼女の夫は、黒い短髪を振り乱しながら言う。それ程、心配だったのだろう。

「大丈夫、この人達が助けてくれたからね。それに、これしきで死ぬんじゃ、あたし達の子じゃないもの」

女性・セリナは、にっこりと笑いながら、ポン、とまるやかな腹部

を軽く弾く。

「お二方、妻を助けてくれて、ありがとうございます。立ち話もなんです、上がっていただくさい」

目元を和らげて、彼は「どうぞ」と玄関口を空けた。

話をするうちに、セリナは人間だと言うことが分かり、いまから五百年前に、嵐の海に転落して流され、この七ツ国で暮らすまでを、さくらは聞きたがった。

「若狭の漁師の娘でね、あ…若狭って『人魚伝説』で有名な場所ね？ 忘れもしない……あの日は、これまでにないくらいいの、大嵐だったからね。あれは……夏の穏やかな日。昼前までは海は凪いでいてね、父さんが漁に出てくのを、浜に見送りに出たときだ、凪いで、風もなかったのにね、津波が起きたんだ」

「津波!？」

さくらが驚いて聞き返すと、セリナは大きく頷く。

「そう、津波だったって、ただの津波じゃあない、その中に…蛇みたいな水妖がいたんだ。浜で父さんが助けを求めてた、だから走ったんだけどねえ……けど遅かった」

「遅かった？」

「あたしは、崖が崩れて、水妖のいる水の中へ真っ逆さまってわけ」

「五百年前？ 戦国時代か？」

朔は、呟いてから首を傾げた。

（セリナが、五百年前にこの七ツ国に来たのなら、なぜ若いままなんだろうか？）

それが顔に出ていたようで、セリナは気を悪くした風もなく朔に応える。

「あ、いや悪い」

心の内が筒抜けだったのに、朔はばつが悪そうに首を竦めた。

「いいのよ。それだったら、もう老人を通り越して、骸骨になってもおかしくないでしょう？ この世界の時間は、流れ方が違うみた

い。だからあたしも若いままで、この人と出逢ったの」

「すべての空間が、同じ時間の流れとは限らない、ってことなんだな」

出された茶を啜りながら、朔は小さく頷いたのだった。

「さくらさんも、人間なのでしょ？　ここには、どうやって？」

セリナは、幸せそうに腹を撫でながら、はんなりとした微笑みを向ける。

「逃避行だ」

と朔。

「まあ」

セリナは、好奇心に目を輝かせながら身を乗り出した。

（なんか違う気が……ま、いいか）

えへん、と胸を張る朔に、さくらはそつと溜息する。

「お二人は夫婦なの？　お子さんは、まだ？」

「ぶっ！」

「えっ！」

セリナのトンデモ発言に、朔とさくらは一気に沸騰してしまった。

「あ、いや……その」（朔）

「いえ、あの……まだ、です」（さくら）

「ご夫婦なのね、ちゃんと顔に書いてあるわよー」

くすくすと笑うセリナに、さくらもつられて笑う。

「お茶をありがとう、あたし達、そろそろお暇いそましますね」

「あら、もう少しいても平気よ？」

名残惜しげに言うセリナに、さくらはふうわりと、笑って見せた。

帰り道、さくらはセリナの言葉を思い出していた。

「夫婦……か」

「どした、さくら……疲れた？」

急に歩みを止めたさくらを、朔が覗き込む。

「ねえ朔……」

首を横に振ってから、さくらはじつと朔を見あげた。

「ん？」

さくらは、朔の青い目を覗き込んで『ああ、やっぱりきれいだ』と思う。

「赤ちゃん……欲しいな」

朔の手から、ぼさ…と買物袋が落ちた。

「……さく、ら？」

かかか、と赤くなり、爆ぜんばかりに目を見開く朔。

「あの二人見てたら、羨ましくなっちゃった。ね、作る？」

簡単に言ってよこすさくらに、朔の顔の赤みはさらに増してゆく。

朔だって、さくらとの子が欲しくないわけがないが。『

欲しがりません、（奈与に）勝つまでは！』である。

「聞いてないでしょー、また人の話」

（いや、もう充分だって……理性がつ）

朔の中で、決心が崩れた。

「じゃ、じゃあ……今夜だけ、な？」

立て前では何度もそう言ったが、それが実現するはずもなく……。

二人は、熱い夜を過ごしたそうな。（こいつら…（怒））

一方…水鏡の前では、奈与が地団駄を踏んでいたとか、いないとか。

さくらの願い（後書き）

こんにちは、ご無沙汰しておりました。

引越しやらなにやらで、更新が遅れてしまい申し訳ありません。朔とさくら、これからもっと、試練が待っています、頑張れ〜（つて、他人事）あわわ。

こんな話しても、読んでくださる読者に感謝です。

それでは、また次回にお会いしましょう。

それでは、失礼します。

兎族の島・梁呂（リャンリュイ）（前書き）

奈与の追撃もなく穏やかなある日の昼下がりに、さくらは畑の罨に引
つ掛かっている子兎・紫生しおを助けてあげた。

実はこの紫生、二つに分かれた兎族の片割れの一族だった！

お間抜けキャラ（でも忍者）な紫生も加わって、ますます盛り上が
っていく（？）さくら一行。

さてさてどうなる、怒濤の第2部スタート！

兎族の島・梁呂（リャンリュイ）

「ひ

ん」

ただっ広い畑に、なんとも悲しげな泣き声が響き渡る。

このままだったら、必ず死ぬのは間違いないだろう。

この炎天下だ。

熱にやられるか、畑の持ち主に毛皮　しかも生皮を剥がれるか。

つぶらな瞳から、ぽろつと涙がこぼれ落ちた。

畑のど真ん中に竹竿が天を仰いでおり、その先には、罨に掛かった

哀れな茶色い獣がぶら下がっていたのだ。

明らかな罨に、なぜ気づかなかったのか？

耐え難い空腹に、罨があっても近づくしかなかったのである。

「きゅう…う、きゅ、うう」

茶色い兎は、逆さにぶら下がったまま泣き出してしまった。

怖い。

怖い。

怖い。

死にたくない、こんなところで。

助けて誰か！

「あら？　朔ちゃん、ちょっと来てーっ、なんか引つかかっているの
」

「んん？」

さくらは、仕掛けに引つかかっている獣を地面に降ろし、足首を縛る縄を切ってやった。

「見て！　茶色いウサちゃんっ」

ぐったりしている子ウサギを朔に突きだしてみせると、さくらは上機嫌に愛撫を始める。

「元気ないねえ、お腹減ってる？」

子兎は、しきりに頷くとぼろぼろと泣き始めた。

さくらはぎよつとする。

「かたじけない」

「あなた、やっぱり話せるのね？」

「はい」

子兎は、さくらの膝から飛び降りると、土下座をするように頭を下げた。

思わず顔を見合わせる朔とさくらである。

「盗みを働いたのに、救ってくださるとは……なんとお優しい方、

『姫様』と呼ばせていただいてもよろしいでしょうか？　これ以後は、姫様にお仕え致します！」

「あ、あのね……とにかく落ちついて。あたしはさくらっていうの、こっちは朔、あなたと同じウサギよ」

「その艶やかな黒髪……あなたはかなり高貴な身分の方ですね。どうか、私どもの国におでくださいませ」

土下座したまま、子兎はなぜか朔に敬意を払う。

（なんだろ、ウサギの黒髪って珍しいのかな？）

「固いなあ、これじゃ奈与といい勝負だ。それと、お前さんの名前……まだ聞いてなかったけど」

「けむたそうに言って、朔はいつの間にかに黒いウサギの姿になっていた。」

「あ、失礼を……私は名を紫生しおひと申します。胡リャンリユイの東海にある梁呂リョウロという島の忍です。私事を済ませに衙に下ったものの路銀も底をついてしまい、今のありさまに」

「なあ、お前らの一族って、兎族か？　『森の民』って知ってるか？」

「私どもの一族がそうですが、若様と姫様も同族で？！」
「はっ、と勢いよくしがみついた紫生に、さくらは少なからず慌てた。
「う、ううん……あたしは人間なのよ」

「いえ、いいえ……姫様も人間であれ、私には唯一の君主には変わりございませぬ。この際、姫様も我らと同族です」

「え、えつとお」

苦笑いするさくらに、朔は思いきったように言った。

「ま、いいんじゃないかねえか？ 仲間は多けりや多い方がいい」

「朔ちゃんたら……紫生君は、とりあえずなにかお腹に入れなきゃね。酷いやつれ様よ？」

「そっぴや、お前さつきから人型してないよな……空腹過ぎて力が出ないのか？」

「お恥ずかしゅうございます」

げんなり、と床に漬れた紫生の前に、さくらは皿を置く。

「たくさんあるから、どんどん食べてね」

皿に乗っている物体を見た朔は、すぎ っと後じさり、壁にしがみついた。

皿にのっている物体 基い人参に、朔は一気に青くなった。

「なななっ、まだあつたのかよっ！ しかもそれ、土臭い」

「うん、だつて……その畑で採れたてだから」

「なに ！？ 人参なんか埋めんなっ」

さくら、どうやら朔に内緒で人参畑を作っていたらしい。

かりかりと人参を嚙っている紫生を、さくらはにっこりと笑いながら撫でてやる。

「あのね、朔ちゃんたら人参キライなのよ？ ウサギなのにねえ」
「ったく」

ぼふっ、と煙が上がると同時に、朔は人の姿に戻った。

「そんなに怒らなくてもいいじゃないの……あら、もういいの？」

「おいしゅうございました、姫様。ありがとうございます」

そう言うってから、紫生はその形を大きく歪ませた。

その様は、水が揺らぐかの如く。

「姫様」

紫生は、ゆつくりと顔を上げる。

茶色い短髪に、つぶらな翡翠の瞳。

そこには、みかけ12才ほどの年格好をした少年が跪いていた。

「あら、ら」

あまりの驚きにさくらは、紫生を見てから、ぱちくりと一つ瞠目をした。

「で、どうやって行くんだった？ その梁呂つてのは」

どこか偉そうな朔の脇をさくらが小突くが、紫生は気にした風もなく、にこやかに応える。

「胡の海岸に船、小舟ですが用意がありますので、それで梁呂までこいでいくんですよ」

（胡国までつて、どうするんだろ……歩き、はかなりキツイんじゃないかなあ？）

不安が顔に出ていたのか、朔がそつとさくらの肩を抱いた。

「大丈夫だ、だから……な？」

「うん、そだね」

すべて言わなくても伝わる。二人を繋ぐものはこんなにも強いのだ。紫生はその様子を和やかに見守りながら、島にいる家族を想ったのだった。

「それで、やっぱり 筋 を使うのね」

移動手段を知って少しげんなりしたさくらに、しおうは『しばしのご辛抱を』と、さくらと自分の手を強く握り合わせる。

それを見ていた朔は、（さくらに言わせれば子供っぽく）始終拗ねて、床を転がりまくっていた。

いわゆる『ヤキモチ』であるが、本人はそう自覚していない。

「ほら、朔ちゃんてば……行くよ？」

紫生が 筋 を開きながら、二人を肩越しに振りかえる。

「いま行くっ」（怒）

づかつかと歩調荒くついてくる朔に、さくらは大仰に溜息した。

「なに怒ってるんだか。こっちおいでっ」

「ん っ！？」

引き寄せられると同時に、朔は爆ぜんばかりに大きく目を張った。

唇に柔らかな衝撃。

キスである。

「もう、ヤキモチ焼きさんなんだから。いい子にして?」

「……!?!」

真つ赤に沸騰している朔を引きずって、さくらは紫生の後に続いて筋 に入っ ていった。

「紫生君、梁呂の兔族の村って……どんな所?」

さくらは朔に手を牽かれながら、前を歩く紫生に問うた。

（あれ、筋 の中にいるのに苦しくない? 耐性でもついたのかしら?）

「言うなれば島全体が『隠れ里』ですね。ご心配なさらずに、我らはもう一つの兔族と違って、人を嫌っている者はいませんから」

「そうなんだ……その、もう一つのつていうのは? なあに?」

小首を傾げたさくらに、紫生はなぜか赤くなる。

「いまから千年前に、兔族は二つに分かれたんです……なんで、分かれたまでかは私にも分かりかねるんですが、長老なら話してくれるかも知れませんね」

「初めて聞いたぞ、そんな話。向こうの連中は、それを根に持つてるって訳かよ」

歩くうちに薄暗さが消え、足が細かな砂の感じを捉える。

潮風が、三人の髪を撫でつけていった。

「着きましたね、船を持つてきます……暫しここでお待ちを」

「う、うん……分かったわ」

一々、さくらの手を握りながら話す紫生に、朔はいらいら。

「なんて顔してるの……朔ちゃんたら、こーれ」

き っと、歯を剥く朔を、さくらは撫でてやった。

「どうかなさいましたか? 姫……ささ、船の用意ができましたよ」

「あ、ありがとう」

「若様も、お早く」

穏やかな風の海原に、船を漕ぐ音がゆつくりと響く。

「水きれいねえ」

日射しに、水面が揺れて輝くのがなんとも美しくて、さくらは、水に手をひたして、軽く漕いでみた。

小魚が数匹、さくらの指の間をすり抜けながら、遊んでいく。

どこまでも果てない滄海の彼方を見つめて、朔はぼつりと言った。

「始まりの地……か」

「え？」

「さくら、これから戦が始まる」

強い意志を秘めた、青い瞳にまつすぐ見つめられて、さくらは短く息をのむ。

「戦……？」

「奈与はお前を狙ってくるだろう、さくらを守るため、俺は闘う」

と、船が大きく揺れると同時に、紫生が『うわっ』と悲鳴を上げて、片足で踏鞴たたらをふんだ。

朔は、さくらを抱き寄せて庇いながら、船に起きた異変に気がついた。

ひたひた、と足元を濡らす海水。

船底が割れて、浸水しているのだ！

「おい！ この船、壊れてたのかよっ」

「た、確かに底穴は塞いだのにいゝっ」

その間にも、船は沈んでいこうとしている。

「とにかく！ 出るぞっ」

抱え上げられ、さくらはその身を凍りつかせた。

「まつ、まさか……飛び込むのとか、ナシよね？ そんなのいやよっ」

朔が足を踏み出した。

いま、ここは海の上。しかも沖のと真ん中である、当たり前なことに地面がある筈もない。

あるとすれば、それは海の底ではないだろうか？

「やめてっ、飛び込まないで

！」

くつくつと、笑いが聞こえる。

抱かれたまま顔を上げてみると、朔が、悪戯の成功した子供のよう
に、嬉しそうに笑っていた。

一気にさくらの口が、への字に曲がる。

「信じられない！ バカ朔ちゃんっ」

「平気だよ、ほら…歩いてみる」

特に悪びれた風もなく笑う朔を、さくらは恨みがましい目で見送る。
ほて、と降ろされたさくらは、足裏に固い感触を捉えて一瞬立ち竦
んだ。

「大丈夫ですよ、姫様…私の術で、海を固めましたからね」

「固めた？ え、ええ〜!？」

口で驚いてはいても、さくらはすっかり、海の上の散歩を楽しんで
いるようだ。

「ありや聞いてないな。さくら、待てよお」

紫生はほのぼのと二人を見送っていたが、そして、いつの間にか置
き去りになっていた。

……事にそれから暫くして気がついた。

「あっ、ひどい！ これって置き去りだよ……若様、姫様あ

っ」(慌)

兎族の島・梁呂（リャンリュイ）（後書き）

こんばんわ、ご無沙汰しておりました維月です。

めきめきと（？）寒さを増す今日この頃ですが、体をこわして、2ヶ月ほど寝込んでしまいました。

みなさまも、恙なきようお過ごしくださいませ。

さて、本題。

ついに兎族の謎が明らかに！

千年前の悲劇とは……奈与、なつちに関係した話です。

我が子の中では、とりわけ凶暴な人ですが、まあそこがなんとも。

（みなさまは、どうでしょうか？）

次回、乞うご期待です。

それでは、この辺で失礼致します。

さくら、ピンチ！（前書き）

助けた子兎…紫生に連れられてやってきた島、
兎族の隠れ里の島で
ある梁呂。

手厚い歓迎を受けるさくらだが……。
夜の砂浜で、さくらに危険が迫る！？

さくら、ピンチ！

島に着いて、耳に真つ先に飛び込んできたのは、甲高い女衆の声だった。

「まあ見て！ 黒髪よ黒髪っ、なんて神々しいのかしらっ」

「この子も可愛いわよ？」

「だっっ、んだよお前らっ……こら、ひつつくな」

「えっ、えーと、あの？」

見る間に包囲され、押しくらまんじゅう状態に……。

一気に押し寄せる女性陣に、紫生は半ば押し潰されながら、さくらの前に出て彼女を庇った。

「こらっ、姫様に触るな！ 道を開けろっ」

しん　と、女性陣のざわめきが一瞬で治まったのに、さくらはぱちんと一つ瞠目をする。

（すごっ……紫生君って、結構偉い人なのかな？）

「おや紫生、おまえ、戻っていたのかい」

女衆の中から、紫生と同じ忍び装束だが、それをもっと上等にしたものを着た女性が現れた。

きりりとした、なかなかの美女……くノ一だ。

いつの間にか、周りにこった返していた者すべて（朔とさくら、紫生を除いてだ）が身を伏せ、伏礼していた。

「ばあちゃん……あ、いや長老」

（はあ！？）

ばあちゃん？

この周りで、年を取ったように見える者はいない。

一体、誰を指して言っているのか分からず、朔とさくらは、互いの顔を見合わせてしまった。

目の前にいる女性がそうなんだろうか？

ばあちゃんといわれるには、とても似つかわしくなく……若い。

「こちらのお二方が、私を救ってくださったのでここに招いたのですが……いいですよね？」

「それはいいが、その前になんと言った？ ん？」

女性は肯定の意を示したようだが、いまは別の意味で鼻白んだようだ。

きろりと横目で睨まれて、紫生はそろそろと後じさり始める。

「『ばあちゃん』って言ったよねえ」

「ご、ごめんよつ、母ちゃん勘弁っ」

瞬間、彼女の覇気に気圧された紫生が、茶色い子兔になった。

「お若い方、遠路をよく来なさった。この悪たれが世話になったのう、あたしはこの島の長老で、三阿という」

「あたしは、さくらって言います……こっちは朔」

三阿は、うんうんと頷いてから、二人だけではなく周りにも陽気に笑って見せた。

「今日は宴じゃ！ みな、楽しもうぞっ」

わああ……と一気に歓声が上がる。

その様に少々引きつりながらも、さくらは朔と顔を見合わせてから、どちらからともなく笑い出した。

けれどそれも束の間、二人はあつという間に三阿の城館に招かれ、奥座敷で着付けられる羽目となったのだった。

「おー……色が白いから、なんでもよう似合う。次はこれなんかどうだ？」

（うっ……わあ、映画村みたい）

いま、さくらが着ているのは小袖と緋袴、それに朱の打ち掛け。いわゆる姫装束だ。

「あ、あの、三阿さん」

「うん、なんじゃ？」

「あれ……」

さくらが指さした方角には、着替えの際に閉め出したはずの紫生が

（茶色い子兎のまま）、格子戸の隙間から小さな頭を覗かせている。
弓阿の頬に青筋が浮き、勢いよく障子が開け放たれた。

「このエロガキがあつ！ 紫生っ」

小憎たらしくも、紫生は一目散に退散。

「はあ……たく、すまんのう。あのバカ、次にやったら許さんでな。
で、さっきの続き、と」

ごそごそと、再び箆笥を漁り始めた弓阿に、さくらは小さく溜息した。

（朔ちゃん、どんな服着るのかなあ？ 格好いいもん、なんでも似合うよね）

一方、弓阿から逃げてきた紫生は、まだ治まらない動悸を咳き込みながら抑え、部屋で待っていた朔の着付けをようやく始めた。

「は 恐ろしかった」

くてん、と畳の上に潰れる紫生に、朔は袴の紐を縛ってから横に座った。

「なあ、さくらは、さくらはどうだった？」

「お美しゅうございましたとも……それはもう」

ほけ……と遠い目をする紫生に、朔はがつくりと肩を落とす。

（ダメだコイツじゃ……自分の目で確かめるしかないかな）

朔は、てきばきと身繕いを済ませて、廊下に出た。

「ダメですよ若様、いまは我慢です」

トコトコと付いてきた紫生が、慌てて朔の腕を引き戻す。

「なんだ？」

「いまは鬼ババが……」

「だゝれが鬼ババじゃい！ このエロガキが」

「ふぎゅ！」

ごつ、と殴られ、紫生は敢えなく撃沈。

「朔ちゃん」

「さ、さくら」

鉄拳を振りかざす弓阿の後ろには、さくらがいた。

緋袴に、桜色の打ち掛けが、眩しいくらいによく似合って。

元々色素の薄い髪をゆるく結い上げて、それがより、艶やかさを際立たせている。

美しかった。

「朔ちゃん、どう、かな？　ヘンじゃない？」

頬を染めて俯きがちになったさくらに、朔は、ぶふんと頭を振る。

「よかった。朔ちゃんは、なんだか大正時代の書生さんみたい。よく似合ってるわ」

につこりと笑いかけたさくらに、朔もつられて笑う。

どうやらその雰囲気を感じいた弓阿が、からかい気味に言う。

「ん？　なんじゃお主ら、もしかや夫婦か？」

瞬間、ぼふんと爆発した二人に、弓阿は『まだまだ青いのう』と二やくのだった。

「今夜は宴じゃ、さくら…存分に楽しもうぞ」

「ありがとう」

「鬼ババが、ウサギ被ってる」

と、（余計なことに）そこに紫生の茶々が入る。

「まだ言うか、このエロガキ！　その口が悪いのかえ！？」

「きや　　っ」

紫生を追って行ってしまった弓阿を見送って、さくらと朔は深い溜息をつく。

「仲いいのが悪いのか、分かんない二人ね」

「同感」

夜も半ばになり、皆が酔いつぶれた頃にさくらは、一人抜け出していった。

酒で熱くなった頬を、涼やかな夜風が撫でていき、それがなんとも心地よい。

潮の香りが混ざる夜風が、襟足の解れ髪を僅かに揺らした。

「いい風……月がきれい」

さくらは月光の降り注ぐ砂浜で、打ち掛けの裾を翻して廻々（くるくる）と踊る。

深い海の碧が月光を通して躍り、舞い踊る彼女を、より艶やかに見せた。

「はぁ……ホントにきれい、どこまで続いているのかしらね、この海は」

「さて、な……月も海も、お前の前では霞んでしまうぞ。な……さくら」

一人呟いたはずが、返ってきた返事。さくらは鋭く息を詰めた。

「奈与っ……」

逃げようにも、きつく背中を抱き締められ、身動きが取れない。

「逢いたかったぞ……さくら。お前がここに来るのを、待っていた」

一気に、黒い雲が月を隠した。俄に風が起こっては、ざわめきを増させていく。

「離してっ、離しなさいよっ、あんたなんか！」

もがくさくらの耳元で、奈与は喉の奥で嗤った。くくく、という嘲笑じみた笑いが、さくらの波だった神経をさらに逆なでにする。

「オレが……なんだと？　いくら強がっても、朔は来ない。幻術をかけておいたからな」

鼻息が首筋を撫って、なんとも居心地が悪い。

さくらは一瞬だけ　守られるだけ　の不甲斐なさを呪ってから、密かに身構えた。

女だから、力がない……か弱い。

守られる存在であり、一人ではなににもできない、役立たず。

それが世間一般の　女のイメージ　である。しかしさくらは、それが心底気に食わなかった。

図々しくも唇を求めてきた奈与を受け入れるフリをして、がりつと鋭く唇に噛みついてやる。

「うっっ！」

奈与の唇から一筋、つうと血が伝う。

「女だと思つて、ナメんじゃないわよ」

さくらは奈与の胸板を突きとばして脱出すると、凍った瞳で睨んだ。

「一筋縄ではいかんか。さすが、俺の惚れた女だ」

血を拭ってからニヤリとした奈与は、さくらの前髪を掴んで引き寄せると、力強く唇を奪った。

瞬間、かくん…とさくらが膝をつく。

その身がのけぞつて、砂浜の上にくずおれた。

「気の強い女も嫌いではないが…いま暫し、黙っててもらおうか」

さくらは突然の異変に、とり乱していた。

自らの意志に反して、体は砂の上に仰向けに転がっているのだから、無理はない。

これではあの変態奈与に『はいどうぞ』と言っているように見えるだろうに。

（バカっ！ ヘンな手つきで触らないでよっ、変態バカウサギ！）

封じられた内心では、目一杯口汚く罵るが、体はまるで、魂の抜けた人形のように動かない。

（体が動いたら、コイツ…っ、絶対^{むし}筆^{むし}つてやる！ ハゲてしまえっ）

「人間なんか、キライなのにな…けど、お前だけは特別だ」

奈与は、さくらを抱きかかえながら頬にキスをした。

「受け入れては…くれないか？」

（なに、こいつ！）

目が、合った。

彼の目は、いまかつて見たことがないくらいに、悲しげな色を滲ませていた。

「解^{かい}」

奈与が一言呟くと、ふわり…とさくらを戒めていたものが消え失せる。

「奈…与？」

奈与を筆つてやる、と息巻いていたさくら。しかしなぜか、気持ちが縮んでいた。

それが釈然とせず、言ってしまったから、さくらはフルフルと首を振った。

「奴らにかけた術は解いた、じきに朔も来るだろう……」

「分かんない男ね、^{ひと}アンタつて。どうして、あたしを助けたりするの？」

「これだけは覚えておいてくれ、オレは…さくらが好きだよ」
さくらは、カツと赤くなる。

こんな、率直に好きだなんて！　どうかしてるとしか思えない。
だが、さくらはある疑問にぶつかった。

（あれ、この子…よく見たら、左右目の色が違う？）

それに、すぐく透き通った感じがする。

この冷たい……凍える感じ。

さくらは、その目を知っていた。かつての自分と同じ……

『孤独』を知っている目。

「…どうして？」

「それは、分からん……また来るから」

走り去っていった奈与を、さくらは複雑な顔で見送っていた。

（あの目……奈与つて、ただ表現がヘタなだけで、別に悪い子、というわけでもないみたい。あの子、寂しいんだわ）

さくら、ピンチ！（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbitぱにつく』新章のお届けです。

あー…奈与が変態くさいっ！ ちなみにダンナさま（朔）は優雅にお眠中。こらこらこら…（慌）

弓阿と紫生の掛け合いが描いていて面白かった。

ちなみに仲いいです、この二人。（親子だから当たり前か）

こんな話ですが、読んでくださる読者様。ありがとうございます。それでは、また次回お会いしましょう。

ウサギ地獄？（前書き）

酒盛りの翌日のこと、さくらは『朔以外の雄の匂いがする』と三阿に問いつめられて焦る。朔はむくれるし、三阿には遊ばれ…さくらはてんやわんや。

奈与に会ったことがバレて、そこからまた話が動きだす。三阿が語る、『千年前の悲劇』とは！？

ウサギ地獄？

「きや つ！？」

早朝のしじまを破つて、弓阿の城館中に布を裂くようなさくらの悲鳴が響き渡った。

宴会場である座敷には、一面に色様々な毛玉が転がっていたのだ。一見には『不気味』である。

ウサギ、ウサギ……どこを見ても、ごっちゃりとウサギだらけ。

「ちよつと！ 朔、朔つてばっ、おーきーてーっ」

周りの中で唯一人型をしている朔を抱き起こすと、さくらは残酷にも、前後に激しく揺すった。

その口からは、半分魂が出かけている。

「っ、う……さくら？ 昨夜、どこ行つてたんだよお」

朔は額を押さえながら起き上がり、キョロキョロと周りに広がる惨状を見回した。

「どこつて、どこにも行つてないわよ。アンタが酔いつぶれたから……つまなくて。それにしても、みんな大丈夫かな……ヒドイぞう二日酔い」

「ふあー……よく寝たわい。こう見えてもな、我が一族は酒豪揃いなんじゃ。大事ない、すぐ元に戻ろう」

「あ、弓阿さん！ おはようございます、ほら朔ちゃんも」

さくらが城館の主である弓阿に会釈するのに合わせて、朔も慌てて小さく会釈する。

「早うさん。んー？ さくら、おぬし……気のせいかな？ おぬしから雄おとこの匂いがするぞ。朔ではないようだが」

「あつ、昨夜の酒盛りの時に付いたとか……たくさんいましたもんふんふん、と匂いを嗅ぐ弓阿に、さくらは焦る。いきなり冷や水を浴びせられた気分だ。

「ああ！？」

瞬間、うとうととしていた朔の眠気は思い切り弾け飛び、慌ててさくらににじり寄って抱きつく。

「さくら、まさかだよな？」

「若いな、それに……この匂い、覚えがある」

（う、浮気だつて！？ そんなつ、そんなあ つ）

朔は弓阿のため押しに一瞬潰れつつも、涙目でキツと紫生の方を睨む。

しかし紫生は『鬼ババがあゝ』などと眉間に皺を寄せて、うなされているようだ。

よって、犯行は無理。

「誰が鬼ババじゃ、くぬつ！」

弓阿が紫生にリンチをしている脇で、朔はさくらにかぶりつく。

「嘘だ、ぜえったいに嘘だ ！」

「やだ、朔ちゃんつ」

すりすり匂いつけに忙しい朔の脇で、弓阿が突然に柏手を打った。

「奈与じゃ、間違いない。さくら……彼奴と会ったんだな？」

「ええ。昨夜、浜辺で彼に会ったんですよ」

「なつ」

シヨック再び。むくれる朔を、弓阿が小突い（殴った）た。

「お前は少し黙つとれ」

さくらは、その先を言わなかった。なににもなかったかのように平静を装う。

……が、しかしそれも、隠し事が苦手なさくらにとっては逆効果になつてしまうのだ。

朔の一言で脆くも崩れ去つてしまう。

（キスされた挙げ句、告白されたなんて言えないわよ。思い出すだけでも、あの時はどうにかなつてたんだわ！）

「まーさか、アイツとキスしたとか……ないよな？」

「したんじゃない！ されたのよっ！ それも無理やりねっ」

（ダメじゃん……これじゃ、全然いい訳にしか聞こえないしっ……）

チラと伺い見てみるが、朔は依然むくれたまま。

延長戦突入かと思われたその時。

ジト目の朔は大仰に溜息すると、きつくさくらを抱き締めた。

「とにかく、どこも無事なんだな？ あんなクソガキに誰がやるかよ。さくらは俺だけのだ」

「朔……」

人目もはばからず濃厚なキスをしてから、朔はさくらの耳元に、小声で囁いた。すると、ぼんつ、とさくらの顔が赤くなり、朦々と湯気が上がる。（なにを言ったのかは、ご想像にお任せします）

「さ、さくら…… 大事ないか？」

夫婦喧嘩が終了したのを見計らって、弓阿が恐々と声をかけた。

「は、い……」

「これを話さねばならん日が来るとはな。聞いておくれ、兎族と…… 今となつては、亡んだ人族の話…… 千年前の悲劇を」悲しげに弓阿の表情が翳つたのを見て、さくらは小さく問いかける。

「千年前……？ なにがあつたの？」

こくり、とさくらの喉が上下した。

「あれは……」

ゆっくりと一つずつ噛みしめるように、弓阿は語り始めた。

千年前の、悲劇の全貌を。

ウサギ地獄？（後書き）

どうも、こんばんわ。維月十夜です。

この寒波の中、皆様はいかががお過ごしでしょうか？

この寒波の中、自宅が水害に遭ってしまい引越に追われる毎日。

『ああ、無情』とはこの事ですよね。

さて、本題。なんだか今回の話はあっけなかつたですよ。

導入部なので、仕方ないかな…とほ。

次回は奈与の出生の謎に迫ります！乞うご期待。（って、どこの番組ですか！？ 笑）

Old story (前書き)

千年前の悲劇 なんとその発端がさくらの前世であり、刹霞の妻であった少女・さくらだった。

新たな真実に、さくらたちは……！？

異種族ラブファンタジー、いよいよ佳境へ！

Old story

「あれは……今より千年前、七つ国のうち胡国・そしてこの、梁呂にも人間はいたのじゃ。その頃、まだ分かれていなかった兎族は、人間と友好を築きながら共生しておった」

「なのに、それが崩れた」

相槌を打ったさくらにこくと頷きながら、弓阿は話を続ける。

「だが、そこで大きな、とてつもない事件が起こった。のう、刹霞……そこにおるのだろ？ 出てきや」

静かに障子の戸が引かれて、青い狩衣を纏った男が、顔を出した。

「奈与！？」

同時に叫ぶ、朔とさくら。

そう、この男・刹霞こそ、奈与の父であり、千年前の悲劇の引き金となった人物であった。

「あとは俺が引き継ぐとしよう、よいか？ 弓阿よ」

「……よからう」

刹霞は、さくらをまっ直ぐに見詰め、どこか懐かしそうに目元を和ませた。

「本当に、そっくりなんだな」

「なにが、です？」

警戒でピリピリしている朔の背中に隠れながら、さくらはおずおずと尋ねる。

奈与に、似すぎていて怖いのだ。

刹霞はなににも応えずに、特に悪びれた風もなく静かに口を開いた。

「今より、千年前の話だ」

千年前、兎族と人族は互いに友好を築きつつ、穏やかに共生していた。

交易は盛んに行われ、この時には、どこにも戦乱の影など見受けら

れなかった。

そう、二人の男女が出逢うまでは。

『さくらや、薬草を採ってきておくれ』

小屋の入り口に掛かる暖簾を上げて、老齡の女が顔を出した。

『母さま！ ダメよ寝ていなくてはつ。薬草なら採ってきてあげるから、大人しく寝ていて頂戴ね？』

さくらと呼ばれた少女は、患っている母を床にとこ戻すと、棚から手籠を取り出す。

『すまないねえ、嫁入り前のお前に、夜道を行かせるなんて』

『母さま……』

嘆き、涙する母に、少女・さくらはにこりとする。

彼女は、二月後に婚礼を控えているが、それに乗り気ではなかったのだ。

尤も、今それを口に出すことはしなかったが。

『あたしは平気よ、母さまのためだもの。行ってくるね』

「彼女の母親は、肺に死病を患っておった。甲斐甲斐しい世話も虚しく、それから間もなくして母親は死んだ」

「それと、千年前の悲劇とやらと、どう関係あるんだよ」

むう、と眉間に皺を寄せる朔に、刹霞は『まあ聞け』と頭を掻く。
「始まりは、これからだ」

肺病で死んだ母親のお陰で、村人は誰一人、彼女の許嫁を除いては近付こうとはせず。

しかし彼女は強い娘で、決して人前で涙を見せなかった。

『母さま……あたし、もういやです』

そんな彼女でも夜に小屋で一人になった時には、どうしようもなくやりきれなくなるのだった。

『どうして、どうして……』

ふと、膝を抱えて座り込もうとした彼女の耳が、笛の音を捉えた。
『だれ……？』

彼女は訝りもせず、音のする方へと、フラフラと歩いていく。
そして、彼女は出逢ったのだ。

見慣れない身なりだが、恐ろしいほどの美貌の男に。

『笛の音、あなたなの？』

さくらは、しばらく間をおいて男に話しかける。

『そうだ。なぜ……泣いている？』

さくらは、見知らぬ彼の美貌に見惚れて、一瞬時を忘れそうになった。

『なぜ、泣いていると聞いたのだ』

ハッ、と一瞬怯えた素振りをした彼女に、男は目元を和ませて囁く。

『恐れなくてよい、なにも取って喰うわけではないからな。お前、名は？』

尋ねられて我に返ったのか、さくらは男を指さしてから、毅然と言
い放った。

『人に名を聞くときは、まず自分から名乗りなさいな！』

今更になって警戒し始めた少女に、男は面食らったような顔をして
から、豪快に笑った。

『面白いヤツだなお前、気に入ったぞ。俺は兔族の次期長になる、
刹霞という』

『あたしは、さくらです』

『そうか、さくら……して、どうして泣いていたんだ？ 差し支え
がなければ、聞いてもいいか？』

類い希な美貌で微笑まれて、さくらはまるで、朝焼けのように赤く
なってしまった。

さくらは話した。母が肺の病で死んでから、村人に差別を受けるよ
うになった事、そして、好きでもない男の元へ嫁ぐ事を。

『刹霞さま、あたし……もう誰も信じられなくなりそうで、怖い』

『そうか、母御が肺病を……そなたも、辛かったな。苦しかったろうに』

ぼろぼろと涙が月明かりに反射し、少女の清楚な美しさを際立たせる。

『刹霞さま……優しいのね、見ず知らずの人間のあたしに』

『見ず知らずではないぞ？ 俺はずっと、お前を知っていたよ』
『え？』

涙で潤んだ瞳をしばたかせる彼女に、刹霞は柔らかに微笑んだ。

『いつも見ていた。バレはしないかと、ハラハラしながらな。一生懸命に、母親を世話していたのも』

『じゃあ、夜毎に聞こえていた笛の音は』

さくらは、ごしごしと涙を拭って、刹霞を見あげた。

『俺は、見てただけで、なにもしてやれなかった。だからせめて……心安らげようと思った。迷惑、だったか？』

眉尻を下げて困った顔をした刹霞に、さくらはフルフルと華奢な首を振って『ありがとう』と笑みを咲かせた。

「美しかった……」

ほわん、と夢見るように言った刹霞に、朔がすかさずツツコミを入れる。

「てゆうか、それストーカーだろ！」（怒）

「コラコラ、朔ちゃんたら……大人しくして」

（でもなあ……なんかヘンな感じ。同じ名前なんだもん）

逐一反応がうるさい朔を抱きすくめてやりながら、さくらは密かに溜息。

「すみません、話……続けてください」

「く、苦し……さくら」

うむ、と頷いて、刹霞は再び口を開いた。

それから、さくらと刹霞は夜毎に逢うようになり、程なくして深

い仲へとなつていった。

『刹霞さま……？』

さくらは小走りに林の中を彷徨い、やがてすぐに愛しい男の姿を見つける。

『ああ、ここだ……さくら』

『逢いたかった……ああ刹霞さま』

さくらは、林の最奥にある桜の古木に寄りかかっていた刹霞を見つけ、思いきり腕の中へと飛び込んだ。刹霞も、飛び込んできたさくらをしつかりと抱き返す。

『大丈夫なのか？ もう尾行けられたりしないか？』

『ええ平気。もう婚約は切りましたから……それに、あたしには刹霞さまだけ』

さくらが許嫁との結婚をなくし、それからというもの、相手の男がしつこく付きまといなかなか離れなかったのだ。

しかもその男は、引き返すフリをして、二人の情事を盗み見ては嫉妬していた。

『あつ……ん、刹霞、さまあ』

『……うつ』

熱い舌が首筋を這い、さくらはビクリと背を震わせる。

男の手に、力が入る。木の樹皮に食い込んでいた爪が、ミシリと皮を抉った。

逆恨みは怨嗟へ。男は、自らの妻になる筈だった女を奪った、兎族の男への怨嗟を募らせていった。

『やめて！ 離して頂戴っ』

『また、あの化生けしやうの所へ行くのか！？ 行かせない、行かせるものか！』

仕事から戻った彼女を待っていたのは、勝手に上がり込んでいた元許嫁だった。

『オレの物だ、他へやったりはしないっ！』

男は、さくらを殴り飛ばすと、背中を踏みつけて憎悪に歪んだ顔で嗤う。

『あんななんか……あんななんか、あの人の足元にも及ばない!!』
さくらは打たれた背中を庇いつつ、元許嫁を睨みすえた。

『なんだ……その目。なんとでも言え、オレはお前さえいればいい』
『クズよクズ！ 触らないでよっ』

さくらは、元許嫁を突きとばすと、挫いた足を引きずって小屋から逃げ出した。

だが男も黙ってはいない。ねじり上げるほど強く彼女の腕を掴むと、無理やり自分の方へと向き直らせる。

『化生がなぜ美しいか知っているか!? 人を惑わせ、喰らうためだっ、大方、あの男もそう言う肚だ』

ばちん、と夜の張りつめた大気が裂けた。さくらが、男の頬を平手で打ち据えたからだ。

その時彼女を突き動かしたのは、底知れぬ憎悪だった。

『最低の人間ね、汚らわしい……二度とあたしの前に現れないでっ』
『くっ くく、くくく……』

男は、喉の底で低く嗤って、ゆらりと闇に溶ける。

そしてその通りに、二度とさくらの前に現れなかった。

逢瀬を重ねるうち、やがて

さくらは刹霞の子を身籠

もり、二人は結ばれた。

『刹霞さま、あの……あの、ね?』

さくらの小屋の中、刹霞は炉端で寝そべっている。

『どうした、やけに嬉しそうだな』

からかうような夫の声に、彼女はしきりに小さく頷いた。

『なんだ、隠してないで言ってみろ』

刹霞はのろろと起き上がり、新妻の背中を愛おしげに抱き締めて微笑う。

『ややが……ややが、できたの』

『な！？ なにつ』

「と言うことは、奥さんは人間？　じゃあ、奈与はハーフなんだ」
「そういうことになる。【あわいの者】といってな、人よりは長命だが、兎族よりは劣る存在だ」

乗り出したさくらに、刹霞は静かに、淡々と話す。

（そっか、だからあの子……そっくりなあたしをお母さんと思って！？）

さくらは唐突に、なぜ奈与が、自分に懐いたのかを理解した。

「奈与が生まれてまもなく、人族と兎族の間に亀裂が生じた。彼女を奪った俺を恨んだ元許嫁の男が、兎族の村を焼いたのが始まりで長い激戦の末に兎族が勝利し、七つ国の人族はすべて死に絶えた」

「奈与は、あの子は？」

さくらの問いかけに刹霞は、ふと悲しげに遠くを見つめるようにする。

その目が泣いているようで、さくらは胸元で握りしめた手を、色が変わるほどにきつく握りしめた。

「無傷だった、俺も…アイツも。なぜだか分かるか？　妻が、さくらが庇ってくれたからだ」

「そ、んな……」

赤々と燃える戦火は天地を焦がし、あたりは勝ち鬨の声で満ちた。
『刹霞さま、この子を連れて早く逃げて！　ここはあたしが食い止めますっ』

『ああつ、すまん……すぐ戻る！』

熱気に煽られる中、さくらは我が子を夫に託し、兎族の村の火消しに立ち回っていた。

『母さま、置いてっちゃいやだ！　父さま、母さまを置いていかないでっ』

刹霞に抱きあげられた幼い奈与が、母に向けて、懸命に小さなもみじ手を伸ばして訴える。

『奈与、母さますます戻るから……父さまの言うこと、ちゃんと聞くよ?』

『イヤだイヤだ! 母さま行かないで!』

もみじ手を振り回して奈与は地団駄を踏むが、母は困った顔をするばかりだ。

『ほら、いい子だから……ね?』

【さ、早く行って……】

そこまで言いかけて、さくらは叫んだ。

危ない　と。

空気を裂く火薬の破裂音。

血が、勢いよく飛沫いた。

紅く^{あか}赫く、花びらのように。
^{いしゆみやじり}

弩の鏃が、さくらを貫いたのだ。

『夫と息子を庇ったか……化生なんか庇うなんざ、気が知れねえなあ。つくづくバカな女だよ、お前は』

『っ母さま!? 母さましっかりしてっ』

『るせえガキ!』

『うつっ!』

元許嫁は奈与を蹴飛ばすと、脇腹を押さえて蹲るさくらの髪を、鷲掴みにして掴みあげた。

『よくも俺を捨てやがったなあ、このアバズレ! この際だ、夫と息子の前で殺してやろうか』

さくらは昂然と元許嫁を睨むと、隙について思いきり手に噛みつく。
『ぎゃ!?!』

男は、手を押さえて蹲る。

『殺させるものですか! 汚らしい手で、二人に触るなっ』
瞬間、銃声が轟き　男はぐらりと揺れて地面に転げた。

撃ったのは刹霞で、元許嫁が、人族の最後の一人だったようだ。

人族の鬨の声は、もう聞こえてこない。

閑地には、黒焦げた人間のなれの果てが多く転がっている。

『母さまっ、母さま、しっかりして!』

奈与は、幼顔を涙で濡らして母の傍に寄り添い、何度も頬寄せる。

『奈……与』

傷だらけの白い手が、息子の頬を伝う涙を、弱々しく拭った。

『気を確かに持て! いま傷を塞いでやるっ』

『……だめ、いいの、よ……』

刹霞に抱えられたのが分かり、さくらは、そろそろと手を彼の頬に這わせた。

その手が、細かに震えている。

『だめだっ! このままでは死ぬぞっ』

『ごめんな、さい……あたしの、せいね? 同じ命なのに、たくさん死んだわ』

傷を塞ごうとした刹霞の手を握りしめて、さくらは弱々しく微笑んだ。

『同じよ、みんな……あなたも、同じ命……なの』

『俺は許さないっ、お前を傷つけた人間を、いや、人間すべてを呪う!』

『そんな悲しいこと……言わない、で?』

『さくら……』

『刹霞、さま……あたしも、人間よ? お願……い、嫌わないで』

『誰がお前を嫌おうか! さくら』

『あたしは……人と、して……あなたに、出逢って、あなたより先に』

力なく、さくらの手が地面を叩いた。

『さく、ら? さくら っ!』

「そして、俺は奈与を連れて梁呂……七つ国を出、兎族は二つに分かれた、とう訳だ」

噎び泣くさくらを抱き締めながら、朔も小刻みに震えていた。

「兎族にそんな過去があったなんて……」

「あの子の気持ち…… 大事な人を、傍で看取る痛み、あたしにはよく分かる」

ぎり、と握りしめる手に力を込めるさくら。

「俺は悟った…… 4年前、琥珀アイツが言った言葉が正しかったのだ。我らも、人間も…… もうなにも失ってはならぬとな」

刹霞は溜息混じりに言つと、悲しげに深く項垂れた。

「奈与が【あわいの者】だったなんて。全く気づかなかった…… けど、それとこれは話が違う。俺はさくらを守りたい」

「刹霞さん」

「…… なんだね？」

さくらにまつ直ぐに見つめられて、刹霞は、居心地悪そうに膝をもじもじさせた。

「あたし、昨夜奈与に会ったんです。なんて言うか…… ひどく、寂しそうな目をしていたわ」

（…… 襲われたけどね）

「なんの巡り合わせなのか…… 声も、姿形も一緒とはな」
悲痛に表情を歪める刹霞に、弓阿が溜息する。

「そうさのう、昨夜…… さくらの星宿 星廻りを見たんじゃが、まさしく彼女の生まれ変わりと出あった。これで話は繋がったな」
一同が息を詰めたのが、さくらにはしっかりと分かった。

Old story (後書き)

こんばんわ、ご無沙汰しておりました維月十夜です。
なかなか、パソコンに向かう機会ができずに鬱々した日々を送って
おりました(笑)

面影（前書き）

『千年前の悲劇』その発端である奈与が原因で、再び2つの兎族間に波紋が広がっている。

刹霞は、その乱を止めるべくして朔とさくらの後を追ったのだ。乱を止める手段はただ一つ、奈与を殺すことだ。

だが、刹霞は悩んでいた。本当にその他に方法はないか、と。

面影

「なにも失う訳にいかないのに……あの子は死んでもいいの!？」
悩み抜いた末に、さくらは刹霞に訴えた。

2つの兎族間で、再び波紋が拡がりつつある。奈与がその発端であり、刹霞はその乱を止めるべくして、朔とさくらの後を追ったのだという。

「あいつをあんな風にしたのは、俺の責なのだ……だからせめて、俺の手で屠ろうと思う」

「でも……そんなのって、ないと思う。キレイ事かも知れないけど、誰かが誰かの命を奪う権利なんてないよっ」

ぱしん、と勢いよく障子戸が鳴る。

すつくと立ちあがると、さくらは憤然と部屋を出て行ってしまった。
「さくら……」

ぽつりと取り残された朔は、刹霞と、さくらが出て行ってしまった方を見比べてオロオロする。

彼自身もどう動いていいか分からずに、困っているのだ。

「朔殿……すまない、彼女を怒らせるつもりはなかったんだ。二人には、いやな思いばかりさせる」

心底すまなそうな刹霞に、朔はゆるゆると首を振る。

「いや、俺もあなたと同じ事を考えてた……他人の事は言えない」

「あいつを殺したくない……だが、やむを得ん。彼女に会って、変わりはしないかと……切に願うとるよ」

朝方の海辺を、さくらはザクザクと歩調荒く進む。

「どういふつもりかしらっ、自分の息子なのに!」

さくらは、きーっ! と髪を束ねていたりボンを、力任せにほどいて放り投げた。

朝風の中に、色の薄いさくらの髪が、光を通してサラサラと舞う。

「あれじゃあ、あの子が可哀相じゃな……い」

さくらはそこまで言って、言葉を途切らせた。

驚きに、その目は大きく見開いている。

砂の上に丸まっている、奈与を見つけたのだ。

（なにしてるのかしら、生きてるのかな？）

巨大な体躯を投げ出している脇に、さくらはそつと屈む。

どうしてだろう。

以前はあんなに、奈与が恐ろしかったのに……今はどうしてか、彼に触れてあげたいと思っている。

艶々とした毛並みは朝焼けを映して、紫陽花色に透けて目を惹いた。
（不思議な色……きれい。触っても、怒らないかしら？ 寝てるみたいだし）

そつと手を伸ばしかけたその時。

「なにを、している？」

静かな声に問われて、さくらはウサギのように跳び上がってしまった。

「お、起きてたのね……」

「まあな……それくらい分かる、さくらの気配がしたからな。どうした、朔は一緒ではないのか？」

大型犬よりまだ大きな体をぶるん、と震わせてから、奈与は前足を突っ張り豪快な欠伸をする。

「うん。ちよつと成り行きで置いて来ちゃった」

「……そうか……」

朝の穏やかな時間を、潮騒が旋律を奏でる。さくらも座ったまま、縦に伸びをした。

「ねえ」

「なんだ？」

「撫でてもいい？」

目を細めて毛繕いをしている、彼の頭にさくらはそつと触れてみる。

「……好きにしろ」

「うん……あつたかい。あつたかいのね、あなた……お日さまの匂いがする」

さくらは奈与の頭を包み込むように抱いて、懐かしそうに目を細めた。

「なあ、さくらの母上は……どんな人だったんだ？」

奈与は、愛嬌たつぷりにさくらの膝に前足を置くと、身を乗り出した。

さくらは目を瞑る。

今でも瞼の裏に浮かぶのは、まるで仙境のような里で暮らしていた、人口こそ少ないが賑やかな人たちの笑顔。

そして、頼りない父の代わりに厳しかった母。

「厳しい人だったわ……でもそれだけじゃなくて、ちゃんと皆を気遣える、優しい人でもあったの」

「それを、俺たちが壊した……さぞ憎いだろう、理不尽だと悔やんだろう」

奈与は少し距離を取ると、真っ直ぐにさくらを見つめる。

「恨んでないって言えば嘘になるけど、許せる事じゃないけど……あなたも、色々あったのね？」

そつと、けれどしっかりと抱き締められた奈与は、震えながらその先を紡ぎ出す。

「なぜ、そんな穏やかな顔ができる？俺を恨んでいるのに」

「似てるから」

即答したさくらに、奈与は、ぱちんと一つ瞠目をした。

「え？なにが……」

「目よ……あなたの目、すごく寂しいって言ってる。孤独の目、あたしも、よく分かる」

「俺の母は人間だった。いつもオレと、父上の傍で笑っていて……ただただ、幸せだったのを覚えている」

「ええ……お父さん、刹霞さんから話は聞いてるわ。あなた、口が

悪くて粗暴だけど、根っからの悪って感じじゃなかったもんね？」
「母上と、そっくりだな。名前も顔も……けど、やっぱりなにかが違う。そこが、好きなの……かも知れない」

さくらの喉元に鼻面を寄せながら、奈与は涙声で言った。そして、さくらは悟る。

この子の心は、割れている。

喪失したものの存在が大きすぎた。

この気持ち、なんて言うだろうか？

本当の母親じゃないのに、放つとけない。
傍にいてあげたい。

未来を変えてあげたい。

「泣かないで？　ね？　泣かないの。ねえ奈与……あたしが、お母さんになってあげる。よく、今まで我慢したね？」

声を上げて泣きじゃくる奈与をそっと包みながら、さくらは彼の滑らかな青毛を撫で続けた。

「さくらが、オレの母さんに？　ホント？」

一頻り泣いたあと、奈与は鼻を噉ってからさくらに問うた。

ひた、と真っ直ぐに、澄んだ色違いの双眸に見つめられて、さくらは思いきり微笑み返す。

「そうよ。今からあたしが、奈与のお母さん」

幻のように兎の形が透けて、人間の姿に戻った奈与は、改めてさくらに抱きついた。

「朔、朔はおるか！？」

突如、客間の障子が勢いよく引かれた。

「んあ？」

青畳に寝そべっていた朔は、不機嫌モード全開でふり返った。
昼寝中だったのだ。

「朔っ、大変じゃ!」

語気荒く部屋に飛び込んできた弓阿に、朔は幾許か後ずさる。

「来い! さくらが、さくらがあ」

弓阿は、今しがた見てきた状況を朔の耳元で小声で伝えた。
あまりのショックに、朔は総毛立つ。

「は、はああ!?!」

屋敷が揺れた。(たわんだ、とも言つ)

面影（後書き）

どうも、維月です。

書いているうちに、奈与が段々幼稚化してしまいました。
なっち、ごめんなさい（汗）

それぞれの想い（前書き）

朔とさくらに亀裂が！？

そして、千年前の悲劇が終わる！

それぞれの想い

「さくら、さくら！」

細かな砂の上を、華奢な素足がまろぶ。

子犬のように懐っこく纏わりつく少年を抱き締めて、さくらはやっぱりと微笑んだ。

「どこまで行ってたの？」

腕いっぱいにも果物を抱えた奈与は『お土産』と元気よく笑って、さくらに甘え付く。

奈与は子供だ。

体の大きいだけの、子供。

いまの彼は、『あの』奈与とは思えないほど安らいだ、優しい顔をしている。

剝霞によると、それが彼本来の性状だと言っていた。

「こんなにたくさん、頑張ったのね……一緒に食べようか」
「ホントか！」

嬉しそうに笑う横顔を見ながら、さくらは密かに杞憂する。

（短時間で、どこまで育て直せるかな……）

そんな二人を、キロメートル数軒離れた樹の天辺から見る影があった。
朔と弓阿だ。

「どういう事じゃ？ あ奴、奈与なのか？ 随分と面変わりして……」

「うゝん……あいつに違いはないけども、どうかしちまったのかな？ つんつんと、脳天をつついてみせる朔を窘めて、弓阿は小さく咳払いする。」

「こおれ朔！ それにしても……さくら、幸せそうに見えぬか？」

不機嫌に慚然とする朔を揺らすことを、三阿は言つてよこす。

「はん！ 幸せそうだった？」

「母子おやこみたいだ、微笑ましいの」

にこにことする三阿の横で、朔は二人をチラと盗み見た。

一つの果実を、分け合つて食べる様子はとても幸せそうで。

（なんだよ…… あんな顔、最近俺だつて見たことないのに！ なん
で奈与だけに）

朔は胸が痛んだ。

胸が痛いのか、それとも別の場所なのか…… 本当のところは分からないが、なにかが蝕まれていくようだった。

帰らないさくらを、見つけたらすぐ連れて帰るつもりだった…… けど。

やめた。

体が、勝手に動いた。

「帰ろう」

三阿は『ふざけが過ぎた』という顔をしてから、そつと朔の後に続いた。

「よ……よいのか？ さくらは……」

しどろもどろの三阿に、朔は沈黙。

朔は、なにも言わない。

いや、なにを言えばいいのか分からなかった。

「さくら、大好きだよ」

「嬉しい……」

（なんだろう…… お母さんって、こんな気持ちなのかな？）

甘える奈与を抱き締めたまま座り、さくらは彼の細い髪を、何度も梳いてやる。

幸せそうに目を細める奈与、さくらはその表情にどこか悲しげな笑みを浮かべた。

暮れゆく夕陽が、二人を橙色に染めあげていく。

その中で、海辺で拾った流木がパチパチと爆ぜて、不思議な青緑の焰を上げた。

さくらが作った橡とちの实の団子を食べながら、奈与はぽつりと云う。

「このまま、ずっといられるといいのに」

やがて訪れる別れを、見越しているのだ。

この時間が、あまり長くないということを。

「傍にいて、さくら……一人にしないで」

（この子は一人、寂しい幼年時代を過ごしたのね……でも、あたしには琥珀がいた）

奈与の端正な目尻から、涙が幾筋もこぼれ落ちては散っていく。

「うん、泣かないのよ、傍にいるわ？　ずっと一緒」

「でも、さくらには朔が……」

「なにも言わないで……いい子、もうお休み？」

「怖い、怖いよ……」

膝枕に伏した奈与を宥めながら、さくらは子守歌を歌い始めた。

ゆっくりと、透明な声で包むように。

「大丈夫、目を閉じて」

幼い頃、琥珀が自分にくれたのを遠く、思い出しながら。

陽が、暮れていく。

寄り添う影が、重なってゆく。

夕闇は、しっとりと母子を呑み込んでいった。

「おい刹霞！　俺アもう我慢できねえぞっ」

「わ、若様あ……落ちついてくださいっ」

袖にしがみつく紫生に齒噛みして、朔は刹霞に詰め寄る。

「そうじゃ朔！　奈与さえ更生できれば乱は止まる、我慢しておくれっ」

袖を振りかざして仲裁に入った三阿に、朔は溜めこんでいた激情を露わにした。

「これでもう3日戻ってこない！　どうして、さくらがこんな事し

なくちゃいけないんだっ」

ばし、と朔の頬が鳴った。

弓阿がその頬を、打ちすえたからだ。

「泣き言を云うでない！ さくら……あの子とて、辛くない訳なからうが！ だから……そう云うのはおよし」

彼女の激に、一同は目的を見失っていた自らを恥じた。

「ねえ…お父さんの所に行こうか？」

さくらは、身繕いしている奈与の背中に云った。

「父上の？」

こくんと頷いて、さくらは続ける。

「まだ、人間が憎い？ 人間は、滅びた方がいい？」
「なぜ？」

「あなたが止まれば、間違った方向に進もうとしている魔族…ううん、この世界全部が助かるの」

幼い子供に言い含めるように、さくらはゆっくりと奈与に云った。

「オレは、さくらが好き。だから、人間も…同じ」

「いい子、奈与……いい子ね」

自分より頭2つ大きな奈与を抱き締めながら、さくらは泣く。

「泣かないで？ 泣かれたら、困ってしまうよ」

悲しい涙じゃない。

これは嬉しい涙。

オロオロする奈与に謝って、さくらは涙の痕をこしこしと拭った。

「ごめんね、ごめん……本当に嬉しくって」

「笑って？ さくら」

柔和に微笑んだ奈与に、さくらは『よし』と拍手を打つ。

「行こう、お父さんの所に」

「うん、オレが行けば…さくらも、みんなが助かるなら」

3日ぶりに戻ったさくらが、すっかり面変わりして柔和になった奈与を連れているのを見て、城中・城下の者も一様に驚きを隠せなかった。

「さ、さくら……それに!？」

朔、奈与とニアミス……そして、朔が一方的に火花を散らしている。「た、ただいま……朔ちゃん。大丈夫？」

「さくら!! さくら、さくら……」
「たたく、心配させやがって。命が幾つあっても足りねえよ」

「……!!」

強く抱擁をする二人に、奈与は瞬時に硬直してしまった。

その表情が、見る間に曇っていく。

例えるなら、叱られて耳と尻尾を垂らした子犬のようだ、
「というのがよく当てはまるかも知れない。」

「朔ちゃん、ちよつとごめん」

さくらは、所在なさに目線を泳がせている奈与に駆け寄ると、やんわりと抱き締めてやった。

それに朔は勿論のこと、弓阿、刹霞までもが茫然と目を張った。

「怖くないのよ、安心して? あたしが傍にいるからね」

「さくら……うん」

スリスリと甘える奈与に、朔はやっぱりお冠。

「くおの! エロガキめえええ」

あまりの嫉妬に、拳をふるわせる朔。

「待て朔、早合点するでない……見てみい、あの奈与が。あれでは稚い子兔いとけなのようではないか」

弓阿は心底驚いたのか、手近にいた子兔姿の紫生を、思いきりブチと筆っている。

「わっくん、イジメだあ」

「なんつーか、うん……お前も散々だな。人のことは言えねえけど」
朔が腐る紫生を宥めているうちに、さくらと奈与は、和気藹々とし

ていた。

だが……それを見た朔は一瞬にして表情を凍らせた。

ブチッ　ブチブチッ

朔も紫生を窺る。（八つ当たり）

「若様までえ！　ヒドすぎですうゝゝっ」

朔は半ベソをかいている紫生を連れ、怒り心頭で館の四足門を出ようとしていた。

「わ　　っ、まだ死にたくないよぉーっ」

「行くぞ紫生、大人しくしろ！」

「あ、ちよつと待ってよ！　朔ちゃん……怒らないで、話を聞いて欲しいの」

「話！？　コイツと、よろしくやってたってヤツかつ、もう知ってるよ！」

止めるさくらの手をはたき飛ばし、怒鳴る朔。

さくらは一瞬だけ深く傷ついた顔をして、そつと、ゆっくりと肩に触れた手を離れた。

「違っの、あたしがこの子を連れて戻ったのは……皆に大事な話があるからよ。聞いて、皆……勿論朔ちゃんも、ね？」

語尾が、掠れて震えた。

兔族の悲劇が、終わるのだ。

この子　　当事者・奈与の一言で。

「さ、奈与……皆に伝えるのよ」

さくらが強張った顔をなんとか解して促すと、奈与はしっかりと頷き、場に集まっている者すべてを見わたして、よく通る声で言った。「やっと分かった……彼女に会って分かった。人間でも、すべてが悪い訳じゃないのが。だからオレはやめようと思う。彼女を守りたいから、もうなにも恨まない……父上、いまからでも遅くはないだろうつか？　間違った方向へ進みかけている『もう一つの兔族』を止

めたいんです」

刹霞はやや暫く沈黙した後、すつくと階の上段から立ちあがった。その顔には、決意が滲み出ている。

「よく言った奈与、それでこそ我が息子だ。共に行ってくれるか」

「はい」

応える声は澀みなく。

研ぎ澄まされた眼差しには、一点の曇りもない。

「さくら殿には誠に迷惑をかけた、すまない。憎まれ役を押しつけて、夫婦の絆さえ危うくさせるところだった」

「いいえ、あたしにしかできない役だったんです……仕方ないですよ」

悲しげな笑みを浮かべるさくらに、朔は渋面を作ってそっぽを向いた。

「いますぐ、行ってしまうの？」

さくらは刹霞と奈与の傍に小走りにまろぶと、奈与の手を握る。

「うん……大丈夫だよ、母さん。すぐ帰ってくるからね」

眉尻を下げて柔和に微笑んだ息子を、さくらは強く抱き締めた。

「必ず戻ってきてね、無事を祈ってるわ？」

「うん」

「さ、行って……刹霞さんも、ご武運を」

「さくら殿にはなんと礼をすればよいか……こんなにも、兎族の方向性を変えてくれた。いいや、もう礼だけでは足りぬな」

刹霞は懷を探ると、螺鈿細工の小柄こづかをさくらに差し出してきた。

「え？ 刹霞さん……」

「まもりがたな護刀だ、俺の念を灼きつけておいた。滅多なことでは折れぬし、そなたの守りとして働こう」

刹霞はにこりすると、青天を仰ぐかのようにして手を伸ばす。

「」

また、耳慣れない言葉だった。

おそらく刹霞は、兎族の言葉で術式をしているのだろう。

ひどく、耳鳴りが鼓膜を揺さぶる。

灼け串で、頭の中をかき回されるような感覚がした。

天地が歪み、太陽は黒く染まる。

そうやって空間に穴を開けるのか。

青天にぽっかりと空いた筋^{みち}を見て、さくらは息をのむ。

それは、どこかブラック・ホールを思わせた。

青い稲妻に変じた二人は、まるで吸いこまれるかのように、筋に消えていったのだった。

それぞれの想い（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbitパニック』新章のお届けに上がりました。

今回は、困ったさんな奈与のせいで、さくらと朔がやばい状況にあります。

まさか、そのまま離婚だったりして……（<―>）

蠢動する闇（前書き）

兎族・千年前の悲劇の原因が自分であることを知ったさくらは、朔、
弓阿と共に戦うことを決意する！

だがその頃、梁呂には もう一つの兎族 の軍勢が潜んでいた！？
異界ラブコメ（え…？） 好評連載中！

蠢動する闇

兔族・西祖谷本部。

一向に戻らぬ、現総領と元総領に痺れを切らせた一部の兔族は、仮朝：いや偽王を立てていた。

偽王 剎霞が、祖谷全域を治めていた頃は、忠実な部下

として側近を務めた男。

彼の弟、蘭溪らんけいだった。

「俺は兄上とは違う。人間の女なんぞを娶ったりして……出来こそいいが、半端者を息子に持っている。我らの行く末、それでいいと思うか？」

「しかし、奈与様は比類なき力をお持ちです。総領には充分すぎるかと」

まごついて応える部下に、蘭溪は片眉を上げて驚いた顔をして見せてから、ニヤリと嘲笑の形に口を歪めた。

「『あわいの者』などに総領は務まらん……目障りな奴よ、いまに始末してくれる」

「蘭溪様っ！ なんと愚かしいことを、あなたは篡奪をなさるおつもりか！ 爺やは悲しゅうございますぞっ」

目尻をつり上げて怒る老爺に、蘭溪はチラともせず、怠そうにまるで欠伸でもするかのように言った。

「そうか……それでは盛大に悲しんでもらおう。彼の世でな！」

ゴッ………！

渴いた白磁の床に、血が飛沫く。

それに合わせて、転々（ころころ）と老爺の首が転がった。

その様は、まるで声なき悲鳴をあげているよう。

女官らが廻りで布を裂く悲鳴を上げて、一人、また一人と裏へと逃

げていく。

血を浴びた蘭溪は、口許に受けた返り血をヌリと舐め取ると、帯びていた刀を抜き、事切れた老爺の背中に刃を突き立てた。

「この際だ。刹霞も、あの半端者もまとめて始末する……」

あまりの驚異に顔を見合わせていた他の血縁者達は、一様に青褪めた。

「し、しかし……蘭溪殿、それでは」

それでは、篡奪だと。

言おうとしたが、それは叶わず。

「それでは……なんだ？」

ギツと怨嗟の籠もった瞳で睨み据えられ、集団は一気に身を竦ませる。

「いや…なんにも」

「ならばよい。兵を挙げる……皆の者、我に続け、兔族の新時代を共に切り開こうぞ！」

「ははあ　　っ！」

集団の中心に立つ蘭溪に、一同は伏礼した。

「なあ、さくら……いいだろう？」

「ダメ、ダメよ朔ちゃん……やあん」

奈与が去ってから、ころりと（本当に）態度を変えた朔。

朔は、一面に咲き誇る花園の中で、さくらを襲っていた。

「戻ってこないかと思った……辛かったんだぞ？　分かるか？」

「やつ……分かってるってば、苦しいよ」

まるで油污れのように、しつこくこびりついてくる朔を振り払いながら、さくらは羞恥に顔を染めた。

執拗に唇を求めてくる朔のせいで、さくらは切れぎれにしか応えられない。

「あたし達、夫婦よ？　ちゃんと分かってるわ」

「でも寂しかった…その分、ちゃんと埋め合わせろよな？」

「あ、ちよつと朔ちゃ……ん」

営みに忙しい二人は、妨害者に気づいていなかった。

（おやまあ……こんな所におったのか。どうりで屋敷で見かけなんだ）

弓阿、だつた。

「つと、静かに」

ビクリ、と朔が動きを止める。

「どう……したの？」

急に起きあがつた朔に、さくらは小首を傾げた。

「てめえ……なに見てんだよつ、いつからそこにいた！」

大樹を蹴飛ばすと、ほて……と弓阿が落ちてきた。

「若いのは盛んでよいのう、なに……妾^{わたし}も、ちと散歩してただけじや」

「出歯亀は代々変わらねえのか」（怒）

拳を握りしめて怒る朔に、弓阿はおもむろに声音を変え、固い声で言った。

「二人とも……至急我が屋敷の広間に来て欲しいのじゃ」

「はあ!？」

「弓阿さん？」

乱れた結髪を解いてから、さくらは弓阿に近寄った。

獣脂の灯りが、四角く夜の闇を切り取っている。

二人が謁見の間に通されると、集団の中に、ちらほらと既に知った顔が並んでいるのが見えた。

紫生の報告によると、梁呂の兎族以外の者 2つに分かれ

たうちの片方の者が、多数梁呂に潜伏しているとの事だつた。

「どういう事!？ 奈与や剎霞さんと行き違いに？」

突如の報告に、さくらは、思わず身を乗り出してしまう。

「そういうことらしい。あ奴らがおらぬ間に、動きがあったのか……」

（弓阿さん……）

爪を噛み、心底悔しそうに言う弓阿の心中を察して、さくらは口を噤んだ。

「紫生、その者らの姿形、しかと見たか？」

「はい、胴丸に腹巻き。武装はしておりますが、ごく軽装の者が多くでした。それと、刀と鉾を持つ者も何名か」

「そうか……こちらもうかうかしておれぬ。紫生、緊急配備じゃ！皆にそう伝え」

「ははっ！」

返事と共に、紫生の姿が煙のように掻き消えた。

「わー！」

さくらは刺激が強かったのか、『本物の忍者だあ』と目を丸くしてはしゃいでしまう。

「んん、忍が珍しかったか？ さくらの国にはおらんのかえ？」

「うん、昔はいたみたいだけど、今はTVとかでしか見ないかな？」

（あと、映画村とか？） 片寄ったイメージ。

「てれ……び、とな？ なんじゃ……食い物か？」

弓阿は目を輝かせて、さくらに先をねだる。

「あ、ううん、テレビっていうのは簡単に言くと、色々な情報を一度に知ることができる、人間には欠かせないもののなの」

「ほう、人間とは変わった物が好物なんじゃの」

TVを完全に食べ物だと思っている弓阿に、さくらは苦笑い。

「イヤ、だから食べ物じゃないって」

「おい二人とも、話ずれてるって」

更に嵌っていく二人に、朔はすかさずつつこむ。

（案外、ミーハーなんだなあ……このおばば）

「とりあえず、緊急事態なのは確かね」

廻りの空気を、思いきり壊していることにやっと気づいたさくらは、

小さく咳払いして弓阿に微笑む。

「う、うむ……よいか皆の者、遂にこの時が来た。千年の歪み、今こそ打ち砕こうぞ！」

さくらと共に頷き合つと、玉座で、弓阿が城館中に響く大音声で云った。

歓声が上がる。

刀鎗を携えた者、すべてが城主である弓阿の前に膝を折った。

「さくらは、すごいな」

溜息交じりに言う朔に、さくらはきよんとする。

「すごい、なにが？」

「さくらが始まりなんだ、今も昔も。2つに分かれた国が、今一つになるうとしてる……それを促したのが、お前」

「朔ちゃん？」

朔は勇気づけるように、さくらの腕を軽く叩いて笑った。

「俺、なんか鼻が高いよ。さくらは凄い」

「うん、あたしが始まりなら、あたしが、責任持たなくちゃね？」
拳を握りしめて、さくらは真っ直ぐに朔を見る。

「おう、それは頼もしい限りじゃな。しかしさくら、そう力むな。
早々気疲れてしまうぞ？ 無理をするでない」

玉座の弓阿が、目を細めてくつくつと笑った。さくらは彼女の言葉に、深い労りが含まれているのに気が付いた。

「ありがとう……でも、あたしも戦う。人間のあたしじゃ、なにができるか　ううん、足手まといになるかも知れないけど、それでも、あたしも戦おうと思うの。自分にできることをしたい」

「人間だから　じゃない、心配してるんだぞ？　目え離すとすぐ無茶するし」

思慮深くさえある朔の言葉に、さくらは少なからずムツと息を詰めた。

「わ、分かったわよ……ムリは、しないから」

「よし」

無邪気に破願した朔に、さくらは内心に引っかかりを感じながらも、儂く口許を綻ばせた。

さくらは、遠く思いを馳せる。

本国　　日本に戻った、奈与と刹霞はどうしただろうか？
もう十日は経つというのに、彼らに関する知らせは一切なかった。

どうか、無事でいて。

はたはたと揺れる橙の焰が、さくらの表情に深く陰影を刻みつける。
それは恰も、彼女の心情の表れのようなだった。

蠢動する闇（後書き）

どうも、維月です。

今回は、少々見せ場多めです。
（汗）

篡奪者（前書き）

久しく留守にしていた祖谷本部。

しかし、そこに広がるのは同士討ちがあつたことを物語る、未だ渴かぬ血の海だった！

そして、同胞の血で壁に刻まれた『篡奪状』だった。

篡奪者

長らく留守にしていた徳島・祖谷本部は、一面の血の海と化していた。

そこかしこに骸が転がり、白い漆喰の壁を血が汚している。

惨状を呈する城内は、同士討ちがあったことを物語っていた。

暗褐色に変色した白壁。

すっかり渴いているところからして、既に数日が経過しているだろう。

「蘭溪っ……おのれ！」

刹霞は、ぎり、と手の色が変色して白くなるほどに、強く拳を握りしめる。

【兄上、もう貴様の時代は終わりだ。次に会う時は総領おさから引きずり降ろしてくれよう】

壁に、同胞の血で刻まれた篡奪状。

宣戦布告だった。

「まさか、オレ達と行き違いに？ 父上っ、戻りましょう、早く！」

「分かっている……だが今は犠牲者を葬ってやらねば。野晒しでは哀れだろ」

死骸と化した、こちら側に残した部下達を見渡して、刹霞はそつと別れを惜しむように呟いた。

（お前たち……すまなかった、本当にすまなかった！）

俯いた刹霞の頬を、悔し涙が伝い落ちて弾けた。

どんなに苦しかったろう。

痛かったろう。

『すまない』以外の言葉が見つからない。

部下達の骸を埋葬し終わった後、ぱつりと、奈与がおもむろに呟いた。

「叔父上は……なぜオレ達を裏切ったのか？」

叔父と、父の仲は良いように見えた。

一族中でも人当たりが良く、実子のいなかった彼は、自分を本当の息子のように可愛がってくれた。

それが……なぜ篡奪を企む？

自分は、叔父が好きだった。

なのに。

「あ奴は……兎族の在り方自体が気に食わなかったんだ。篡奪どころではない、すべてを破壊する気だろう」

「戻りましょう父上！ 向こうに残した母さんが心配なんです！」

「……さくら殿のことか？ 母と呼ぶには若すぎるだろうに」

「でも……心配なんです、ある意味」

そう言われて、奈与は羞恥に顔を染める。

「ほう？ 『妻に欲しい』とか言っていたこともあったようだが、そう言う感情じゃあなかったんだな」

片眉をあげてからかう父に、奈与は精一杯の反撃を返す。

だが、効果はなし。

「なーんだ？ 朔にヤキモチ灼いてるのかお前」

「分かっているなら聞かないでください！」（怒）

「って、マジに怒るなよ……ジョークだよ」

鼻白む奈与に、刹霞はひよくつと肩を竦めてみせた。

「……彼女が初めてなんです。なんの見返りもなしに、真っ直ぐに接してくれた人は」

「ん。よく成長したな……もう俺から教えられることはなにもない。安心して総領を譲れるよ。守りたい者がいるのなら、尽くすがよい」

刹霞は、息子を頻り強く抱き締めてから、その背を押して笑った。
「はい！」

二人は素早く兎型に溶けると、七つ国へと空間をかけていった。

纂奪者（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbitパニック』新章のお届けに上がりました。

さて、本編。

祖谷本部に戻った刹霞と奈与……そこには想像を絶した惨状が広がっていました。

悔し涙を流す刹霞さん。

なっちはさくら（お母さん）が心配です。

さてさてどうなる兎族の行く末……？

まだまだ続いてゆきます、先が気になった方は本編へGO！（笑）

穿たれた楔（前書き）

順調かのように見えた、朔とさくら。
しかし、無情にも運命は二人を裂いた！
蘭溪の魔の手が、さくらに迫る！！
そして……。

穿たれた楔

「ほう、人間の女がおるではないか……か弱そうな奴だ、ヘドが出る」

海を眺望する事ができる断崖にいるさくらを、一羽の射干玉ぬばたまの鳥が見ていた。

いや、見ているのは鳥ではなく蘭溪だった。

本人の目からではなく、遠く離れた場所から鴉の眼を介して見ているのだ。

部下達に潜伏使令を出し、蘭溪は単独で動いているうちにさくらを見つけたのだった。

「ふ、余興がてら……楽しませてもらおうか？」

そう呟いた矢先に、ぱたり、と鴉が墜ちる。

元の死骸に戻ったのだ。

「見つけたぞ………兎族の弱点を」

青い双眸をニイ、と歪ませて、彼は音もなく、するりと地脈に体を滑り込ませた。

しかし蘭溪が去った後、単に彼が気づいていないだけなのか、彼が触れた地面は焼けただれ、夥しい腐臭をあげる。

彼の体は、つもり積もった怨嗟が蝕み始めていたのだ。

破滅へのカウントダウン……。

壊疽が、始まっていた。

「ヘンね、朔ちゃん？ さっきまで隣にいたのにな……おい朔う！」

外に出るは危険 と押しとどめる周囲を拝み倒して、海が見たいと駄々をこねた自分を朔が、ここまで連れてきてくれたのだ。

朔がない。

朔がない。

可笑的い……。

だがすぐに、さくらは異変に気が付いた。
なにが、可笑的いのかにも。

妙に悪寒がして、震えが止まらない。
最近、色々と言っているさい目付役の朔が、
つかず離れず傍にいるの
に。

その朔がないなんて、可笑的い。

『朔、朔う！ どこにいるのっ、返事して！』

彼女は、すっかり術中に嵌りこんでしまっていた。
廻りは物音一つしない。

景色には、どこにも変わりなどないのに。
叫ぶさくらの声は、無情にも、ことごとく虚無に喰われて消えてゆ
く。

『イヤよっ、イヤ！ 誰か返事してよ！ 一人はイヤああ……』

一人はイヤだ。

怖い。

孤独に対しての恐れは沸くのに。どうしてか無気力になり、
なにも考えたくなくなる。まるで、思考する能力を奪われたよう。
なにかが、そうさせるのだ。

「さくら、さくら！ しっかりしろよっ、俺はここにいるだろ！」

「イヤ……イヤああ」

さくらの傍を、朔は一度たりとも離れてはいなかった。

朔は、どこか虚ろにとり乱すさくらの肩を揺さぶって呼びかけるが、彼女はまるで見えていないかのように無反応で、しきりに震えている。

「その女には聞こえない」

朔は虚ろなさくらを抱いたまま、声がした方向をきつく睨む。

「きつ、貴様……敵軍の将かつ　彼女になにをした！」

朔の睨んだ先には、冷笑する、鎧姿の男が佇んでいた。

「ああ……彼女なら夢を見ているよ。最高の悪夢を、ね」

底からこみ上げた激情が、朔の瞳を、髪を異色に染めあげる。

「こ……のやるつ、胸くそ悪いツラしやがって！」

欠伸をするように言った彼に、朔は堪らず飛びかかった。

だが、身軽に躲して嗤う蘭溪には無意味でしかない。

「……あまり、調子に乗るなよ？」

「なっ」

彼の間合いに入りかけて、紙一重で避けたはずだった。

だが、軽々と瞬歩で朔の間合いに入った蘭溪は、耳元で冷たく囁いた。

そして　。

「口を慎め青二才がつ！」

「がつ……かはあっ！」

しなやかな健脚が、朔を蹴り飛ばす。

蹴り上げられ、朔はもんどり打って地面を転がった。

「他人の楽しみを邪魔するでない。暫く、黙って見ておるがいい」
蘭溪は、朔に向けて縛執呪ばくしゅうじゆを切った。

「やめろ、やめてくれ！！……さくらから離れろっ！」

重い鉛のような呪縛が朔を戒め、彼に一切の動きを許さなかった。

『あなた、誰？　あたしを迎えに来てくれたの？』

虚ろな目で見あげるさくらに、蘭溪はニヤリとほくそ笑む。

『そう、俺は君を迎えに来たんだ。おいで、家族が待っているよ』

『あなた……だ、れなの？』

さくらの眉間に、明らかな抵抗が浮かぶ。

術に嵌りながらも尚、どこまでも呪を振り切ろうと抵抗するさくらが気に食わなかった。

蘭溪は、さくらを抱きすくめながらその笑みを深くする。

嗤いながら、彼女に一撃を加えた。

残酷な楔の、一撃を。

『それは、知らなくていいよ。お前はこれで死ぬんだから』

さくらの体が宙を舞う。

打ち掛けの袖が、天女の羽衣のようににはためいたが、彼女は宙を舞わずに、重力に従って落下を始めた。

「やめてくれ っ!？」

朔は渾身の力を込めて、結界として張られていた、襲撃者の術式を破壊した。

「つまらん。実につまらぬ……だから人間が好かんのだ。今日は引きあげるか」

崖下を覗き込んで座りこむ朔の脇で、蘭溪は消えていったのだった。逆巻く海流同士が、大渦をなしている海域だ。

さくらが助からないのは明白だった。

「さくら……さくらあ !!!」

狂ったように、悲痛な慟哭をする朔を駆けつけた亅阿がを見つけ、爆ぜんばかりにその目を張った。

「朔、朔！ しっかりせいっ、あの子、さくらはどうしたんじゃ!？」

「うああ……うああああ っ!」

声にならない悲鳴をあげ続ける朔を抱え上げ、弓阿はそれ以上にも言わずに、城館へと引き返した。

(朔……一体どうしたんじゃ！ それに、さくらの気配が消えた！)

ずず、と緊迫した空気を薬湯を啜る音が濁す。

朔だ。

「どうだ……落ちついたかい？ 話してくれぬか、さくらはどうしたんじゃ。あの子の気配が消えたんだ…皆知りたがっている」

蓬色の薬湯を啜っていた朔は、ややしばらく間をおいて辿々しく、抑揚のない口調ですべてを語った。

「……さくらが、死んだ」

弓阿を含め、その場にいた一同は驚きに、愕然と朔を見た。

「まさか……そんな、気配が消えたのは、なんてことっ」

「蘭溪だ、あ奴の仕業に決まっている」

突然割って入った声に、弓阿は泣きはらした目でふり返る。

「刹霞、戻っていたのか……さくらが、さくらが」

ゆっくりと、弓阿は格子戸に凭れる刹霞を振り向くと、震える声をなんとか抑えて小さく呟いた。

「徳島に残した、俺の部下共は皆殺されていた。あ奴め、遂に墮ちる処までおちたな。篡奪状を置いていきおった」

「なに！？」

目を剥いたのは、弓阿だけではなかった。

今まで抜け殻の如く萎れていた朔も、僅かにだが身じろぐ。

「楔を打ち込みおって……だが皆の者、慌てるな。闘うべき相手が分かっただろう。奴を、蘭溪を必ず倒すのだ！」

ハラハラと、朔と弓阿を見交わす紫生。

「弓阿、そなたも…もちろん闘ってくれるな？」

「当たり前だろうが。この弓阿、兄上のためにここに在るのだから」
微笑みあう、弓阿と刹霞。

「ああ、猛獣の檻が壊された……」

はう……と溜息する紫生に、
三阿はなぜか怒らなかった。

穿たれた楔（後書き）

どうも、維月です。

蘭溪が……さくらに集中攻撃。

蘭溪のバカ……（怒）

失くしたキオク 残った想い（前書き）

蘭溪の襲撃を受けたさくら。

朔の目の前で、彼女は『死んだ』

遠い浜辺に打ち上げられた彼女を救ったのは……！？
すべての記憶を失った彼女に、再び 試練 が迫る。
異界ラブストーリー、新展開！

失くしたキオク 残った想い

ひたひたと、寄せては押し戻ってゆく波。

大波、小波をくり返しながら、時を紡ぐのだ。

波が寄せて、浜に漂流物を置いていく。

波が今度は、一際大きな物体を押し上げて去っていった。

海獣の死骸が、浜に揚がることがある。

海辺を餌場にする、妖魔の類には願ってもないことだ。

いま一頭の黒狼が唸りながら、流れ着いた贈り物の廻りをぐるりと旋回している。

そつと、鼻面を押し当てたりしながら決めかねているうちに、同族の狼たちが遠巻きに集まり始め、『よこせ』と言わんばかりに牙を剥いて、口々に威嚇を始めた。

「よこせ、ここは俺達の縄張り（テリトリー）、そいつを置いていけ！」

すると、黒狼は胸を張って前足を一步踏み出し、一声大きく吼える。

「俺から横取るたぁいい度胸だ……てめえら、よっぼど死にてえみたいだな！」

彼の咆哮は響く。

手当たり次第に、邪魔者を蹴散らしていく。

「ダメだ、奴は『鬼神』だぞ、やっぱりやめた方がいい」

「けど、どうする」

「どうするどうする……」

狼達は獲物の事などとうに忘れて、尖った顔を揃えて首を横に振る。

「ぐだぐだとやかましい奴らだ！ とつとと失せやがれっ」

煮え切らない同族らに嫌気した彼は、思いきり歯噛みして大声で吼

えた。

尻尾を巻いて退散していく狼たちは口々に、『やっぱり相手が悪い』と悲鳴を上げ、情けないほどあっけなく逃げ帰っていったのだった。
「二度と来るんじゃないやねえぞっ」

黒狼は尾をピンと立て、未練がましく潜んでいた残党に吼える。

あわあわと、忙しく逃げって行つた狼に背中を向けて、彼は歩きながら人型に姿を変える。

狼と人間、両方の姿をとることができる……人狼なのだ。

黒く硬い髪なので、つんつんと毛先が跳ねている。驚くほど長身の男だ。

青い瞳が、波打ち際に横たわるさくらを捉えた。

「追っ払つたものの……こいつ、やっぱり助けにやらねえのか。下等な奴ら以外は人型だし、んなモンは有り触れてる。まずは、何属か知るべきだよな」

長つたらしい独り言を終えると、彼は、むんずとさくらを背中に担いで砂浜を後にした。

さくらは、ぼんやりと温もりに身を任せていた。

（誰、とても温かい手。誰なの？）

そつと撫でつける手に、懐かしさを感じるのは、なぜだろうか。考えればその度に、喉の奥がキュツと締まって、苦しくなる。

さくらはうつすらと、涙で潤んだ目を開いた。

「う……」

涙をゆつくりと拭って、のろのろと体を起こす。

潮騒の音が微かに響く室内は、必要最低限の家具しかなく、殺風景だ。

一体、自分はどうしたのか。

分からない。

ここは、どこ？

言おうとしたが、渴いた喉は掠れた呻きしか紡がなかった。ただ、言葉のとおり口が動いただけ。

「気がついたみてえだな…起きてても平気なのか？」

後ろから声をかけられて、さくらはぎくりと肩を跳ねさせる。

そつと振り向くと、牀台の枕元に寄せられた椅子に、黒髪の青年が座ってこちらを見ていた。

気づいていたなら、もっと早くに話しかけてくれればよかったのに。漠然とそう思ったが、口に出す気にはなれなかった。

虚ろなのだ。

なにもかもが、曖昧。

かろうじて、自分の名前だけが思い出せただけ。

さくらは、すべてを失っていた。

名前はさておき、今までの記憶
つっていた。

すべてを失くしてしま

こくと頷いたさくらを、青年は興味深そうに、まじまじと見つめる。

「ふーん、お前…名は？ ウサギの嬢ちゃん」

「……さくら。それに、あたしウサギじゃないわ。人間よ？」

「人間って種族はここにやあいねえな、それに言葉…兎族のдар」

さくらは眉間を寄せて、怪訝な顔で青年を見やる。

「兎族って、なに？ みんな…人間じゃないの？」

「へええ、お前…マジで人間？ それにしちやウサギ臭いが」

青年は顔を間近まで寄せると、すんすんと匂いを嗅ぐ仕種をした。

「やだやだ、なにすんのよっ……それに、あなたは誰？」

なんとか枕で頭をガードして、さくらは小さく竦みあがる。

「本っ当にどの妖魔の匂いもしねえなあ。人間なんか、現存しねえ

って聞いてるけど。俺は黒鋼くろがね、ただの一匹狼さ」
さくらを、珍しげに見つめる青い瞳。

どこかで、見覚えのあるその色。

思い出しかけた光景は、さくらの脳裏に一瞬だけ明滅して消えた。
悲しいほどの懐かしさ
自分を呼んでくれる、優しい声は
誰だろうか。

けれど、それを思う度に伴う痛みがある。

『忘れる』と言っているのだろうか？

さくらの擦れて汚れた頬を、雫が幾筋も伝い落ちては散ってゆく。
それを見守っていた黒鋼はばつの悪い顔をしてから、そっと戸惑い
がちに、壊れ物を扱う手つきで彼女の頭を撫でた。

「どうしてここまで来たかは、今は聞かねえ。安心しろよ……だから、泣くな」

「……うん」

「お前、なにも覚えてないのか？」

「うん……分らない、思い出せなくて」

海岸に打ちあげられた流木に腰掛けて、黒鋼はさくらの顔を覗き込む。

穏やかな潮騒が、風に乗せて微かな波音を運んでくる。

ここは、細かな白砂しじゅうが広がる海岸の端だ。

「ま、思い出せねえなら仕方ないだろ。人生のやり直しと思って、生きればいい」

「優しいのね、黒鋼さんは」

にこり。

初めて笑ったさくらにぎよっと驚いた顔をして、黒鋼はすぐに、軽

く毒づいてそっぽを向いた。

「べっ、別に優しかねえっ、ただ……放っとけなかったただけだ」
「だから優しいの」

さくらは、どこか悲愴な笑顔を滄海へ投げて、小さく呟いた。

「そうかよ」

しばらく、両者間に無音の空白が生まれる。

と、静かに凪ぐ滄海を眺めていた黒鋼が、ふいに立ちあがった。

「おい」

ぼけ…と見あげるさくらに、彼はニツと笑みを深くする。

その表情には、どこか子供のような無邪気さが表れていた。

「ついてこい、俺が拾ったんだ……ちゃんと面倒見てやるよ。だから元気出せ」

「きやつ」

ひよい、と子猫のように掬い上げられて、さくらはパチパチと何度も瞠目する。

「ほんと？」

「そうだ。うつわ、軽いなお前！ちゃんと喰わねえと、これからでかくなねえぞ？ 帰ったら、まずはメシだな」

問答無用で、のしのしとさくらを自宅へ連行する黒鋼。

その後ろ姿が、少し誘拐じみている。

「とか言つて、結局作るのはあたしなのね。何が使えるかしら？」

戻ったはいいが、黒鋼の家の台所で、さくらはキョロキョロと材料を探していた。

何もない割にムダに広い台所で、小柄なさくらは異様に目立って見える。

「お前、ホント小っさいのな」

「やつ、や、や」

背後に現れた黒鋼が巨大すぎて、さくらは後ずさって少し距離を取

った。

「ちび」

面白そうに茶々を入れる黒鋼に、さくらはぷりぷりと怒りまくる。

「むう、小つさいなんて失礼な。黒鋼さんこそ、毎日なに食べて生きているの？ 殆どなにもないじゃない」

「あ、とりあえず肉さえありゃあいいさ」

「ダメよそれじゃあ…絶対どこか悪くするわよ？」

とりあえず手元にあるのは、牛酪バターに小麦の粉と少しばかりの野菜、それに干し肉だった。

「ガキのくせに、一丁前に言うな。なにか作れるのか？」

無愛想に言う黒鋼に力チンときたさくらは、精一杯に怒鳴った。

「あたし子供じゃないもの！ 小さくて悪かったわねっ、黒鋼さんが大きすぎなのよっ」

「あーあーあー、怒るなっ…腹に響く。悪かったよ」

「もう……大人しくしてて頂戴」

ぐったりと項垂れて見せて、さくらは再び台所に向かう。

「お鍋に水を張って、火…これって、竈よね？ やっ、火が点かな…熱っ、熱っ！」

小麦と牛酪を炒めてから、水となじませて野菜・干し肉と一緒に煮る。

煮立ってきたら、塩加減を見て完成。

「結構ホネだわね……」

呟いたと同時に、匂いに誘われて入ってきた黒鋼が、不思議そうな顔でフンフンと鼻を鳴らした。

「いー匂いだな、もうできたのか？」

「うん、なんとかね。美味しいか分かんないけど」

「お前も喰うんだぞ、味見したのかよ」

困った顔をして、鼻に皺を寄せる黒鋼。

「したわよ、口に合うか分からない、って言ったの」

「はいはい、分かったって……早く喰おうぜ?」

黒鋼は早くも席について、さくらがシチューをよそってくれるのを待っている。

「あたしもお腹空いちゃった、食べましょ」

言うや否や、ガツガツと食い付きのいい黒鋼に、さくらはあんぐり。

(すごい……なんだか、獣みたいだなあ)

「旨いな、これ……なんていうんだ?」

「口にあってよかった。これはシチューっていうの」

シチューにがつく黒鋼と、知っているのに、名前の分からない男ひとの面影が。

面影が、重なる。

似ているはずがないのに……なのに。
。なのに

匙を置いたさくらの頬を、つう、と涙が伝い落ちた。

「どっ、どうした! 泣くなよ、おい」

「分かんない、分かんないの……急に、苦しくて」

椅子から立つと、黒鋼は涙するさくらの傍に屈み、目線を合わせた。

「大丈夫か? どうした」

「顔が、浮かぶの……」

震える声で言ったださくらの頭を撫でてやり、黒鋼は密かに溜息する。

「忘れるとは言わない。なるべく、考えないようにな」

忘れるなんて、ムリ。

考えない日もない。

誰か分からないのに、こんなに愛おしいのは…恋しいのはなぜ?

頭が割れそうで、誰か助けて!

「いいのかな? ホントに」

さくらは、潤む瞳で黒鋼の碧眼を、真っ直ぐに見つめた。

「辛い思いをするぐらいなら、忘れてしまえ。少しずつな」

この想いを捨ててしまったら、本当に楽になれるだろうか。

本当に それでいい？

今のさくらには、何一つ、為す術がなかった。

彼女はただ、じっと黙ったまま黒鋼の腕に、抱かれることしかできなかった。

黒鋼は無愛想な男だが、見ず知らずの自分を救ってくれたのだから、別段似悪い人間ではないようだ。

さくらは緊張に身を固くしながらも、伝わってくる温もりと心音に、うつとりと眼を細めた。

（不思議……今日出逢ったばかりなのに。どうしてかしら、信頼しているみたい）

いっそ、この人に縋ってしまいたい。

心が、震える。

「ごっ、ごめんなさい……夕飯、冷めちゃったわね」

ゆっくりと離れたさくらの背を押して、黒鋼は席に着く。

「なにも考えるなよ……いまを、生きる」

食事を再開した黒鋼は、目元を和らげてさくらに笑いかけた。

夕食の後片付けが終わり、さくらはさくらは牀台に力なく倒れる。

「とても……とても疲れた」

さくらは牀台に横たわって、小さく掠れた声で呟いた。

瞼が重くて、このまま眠ってしまえば、二度と目覚めることができない気がする。

あたしは、どうしてここにいるんだろう？

帰りたい。

俄に弱々しい郷愁がわいたが、帰る場所さえ分からないのに、どこに帰ろうというのだろうか。

（瞼が重い…… もうあたし、死んでしまうのかしら。それとも、もうとつくに？ 体が鉛みたいに鈍くなって、闇の底に沈んでいくみたいよ）

「怖い、の……なんだか。とても、とても」

「なに『今にも死にそう』な声出してんだよ、もうお眠か？」

黒鋼の大きな手が、さくらの頭を撫でて、揉みくちやにする。

「あたし 夜が…… 闇が怖い。目を閉じたら、もう戻っ

て来れなくなる気がして」

目を丸くして、黒鋼は幾許か驚いたようだ。

「怖い……のよ」

「ここにいてやるから、寝ろ。手放したりしねえから、安心しな」

さくらの縋るような目に、黒鋼はその碧眼を細める。

「ほんと、ね？」

「ああ」

眠るさくらの傍に座った黒鋼は、そつと彼女の頬を撫でて外へ出て行った。

その瞳は、どこか切なげだった。

眠るさくらの真上、天井の梁。

そこに蠢く影があった。

蜘蛛だ。

銀系の巣の真ん中に、無数の目を、赤く爛々と光らせる大蜘蛛がいた。

【まだ……生きていたのか おのれ】

色濃い怨嗟を含んだ声で一頻り呟いてから、大蜘蛛は突如、焰をあげて跡形もなく燃え尽きた。

桜殞（さくらのもがり）（前書き）

蘭溪の襲撃を受けたさくらは……遠い浜辺に打ち上げられていた！！
朔ら、兎族が悲しみに暮れる中、一切の記憶を失ったさくらは人狼
族の青年・黒鋼くろがねに保護され新たな暮らしを送っていた。

すべての記憶を失ったさくら。

そして、新たに生まれる恋愛模様。

果たして、朔とさくらは再会できるのか！？

桜殯（さくらのもがり）

「そうか、朔……さくらが殺されるのを見たか」

「さくらが突き落とされる瞬間^{とき}、蘭溪は笑っていた。そして、俺はあいつを死なせてしまった」

ひとひら、ひとひら。

桜の花が舞い散る中、朔と刹霞は祭壇の前に佇んでいた。

殯^{もがり}の為に設けた四阿^{あずまや}の祭壇には、白い帷子を纏った少女が横たわっている。

さくらだ。

しかし、それは彼女自身ではない。

見つからなかった遺体の代わりに、弓阿が桜花を練って作った花人形だった。

白く清らかな頬に体温はなく、命を宿さぬ者として棺に収まっている。

四阿の廻りに集まった者が

老若男女問わずに、外聞も

なく彼女の死を悼んでいた。

棺に火が灯され、挽歌が満ちてゆく。

燃えあがる浄火を見つめる朔の横に来ていた奈与は、手の色に変色するほど、きつく朔の腕を握りしめた。

「なぜ、助けなかった……朔！ オレは、オレは信じないっ、さくらは絶対死んでなどいないと、必ず探し出すんだ！」

「俺は……無力だ」

「お前も手伝うんだよっ！！ 貴様がやらねば誰がやるんだっ」

座り込んで、虚ろに言う朔の襟首を掴みあげて激昂する奈与を、刹霞が羽交い締めにする。

「やめろ、朔とて……さぞや無念だったはずだ。今は仲違いしている場合ではないぞ」

「だが……父上」

「さくらは死んではおらぬ、必ず生きて連れ戻すんだ。蘭溪がここにおるか分らん今は、迂闊に動いてはならん。暗殺部に探らせておるで、じき場所も知れよう」

辛さは、皆同じなのだ。
愛する者を失う、痛み。

刹霞は悲愴に満ちた眼差しを、遠く、窓の外の海に向けた。

「んはっ、寝過ぎしちゃった！ あ、あいつはっ」

がば！ と勢いよく起きあがった黒鋼は、空っぽの牀台を見て、寝癖で乱れた頭をかきむしった。

「あんのバカ！ 外行つたのか、外っ」

だが、焦って小屋から転がり出た黒鋼は、目の前の光景に思いきりずっこけた。

さくらが、近所の子供たちと戯れていたのである。

「お、おまつ… お前」

「あ、黒鋼さん…おはよう」

寝起きのままぽかんと佇む黒鋼に、さくらはくすくすと笑う。

「髪、ぐちゃぐちゃよ？ 心配…してくれたのね」

「だっ、誰が心配なんかするか！ ただ、見に來ただけだっ」

プイツとそっぽを向く黒鋼に、それでもさくらは笑いかける。

「ありがと、黒鋼さん」

「おう…」

言ってしまったから『しまった』という顔をした彼を、子供たちが口々にからかった。

「この姉ちゃん、黒鋼の嫁さん？ ねえねえ」

「ばっ、ばばバカ言っくんじゃねえっ」

「あーっ、お嫁さんなんだ！ みんなに言っちゃおうっ」

「兄ちゃん、やるなっ」

「ちげーよバカ！ 勝手なこと言いやがってガキ共がっ」

真っ赤になって怒る黒鋼とはしゃぐ子供たちを見ながら、さくらは

気づかれないよう、小さく溜息した。

【お前は、俺の自慢の嫁さんだ！】

ふと浮かんできた言葉に、さくらは一頻りの痛みを覚え、強く眉間を押さえる。

「…………痛っ」

「おい、どうしたさくらっ！」

よろけたさくらの肩を抱いて、黒鋼は不安そうに眉根を寄せた。

「大丈夫、大丈夫……声がしただけ」

「ひゅっ」

「あつつくてヤケドしちゃう！ みんなに話してこようっ」と

「るせえソコ！」（怒）

きやあきやあと、はしゃいで逃げていく子供たちの背中に毒づいて、黒鋼はそつとさくらの背を片手で支える。

「外にや出るな、なにがあるか分らん。帰るぞ」

「う、うん……」

子供たちが流した噂は、またたく間に廻りに広がった。

曰く、近所の住人は、興味津々といった感じで始終まわりついてくる。

勝手に、さくらは『黒鋼の嫁』ということにされてしまった。

「なあなあ、あんた黒鋼に攫われてきたのかい？」

「美人だねえ、嬢ちゃん」

「新婚さんなんだろ？ いいねえ」

「う？ う？」

まわりつかれたさくらは、あっという間に押しくらまんじゅう。

「ったく！ まわりの喧しいこった、普段なんぞ見向きもしやがらねえくせしてよっ」

黒鋼の逞しい腕が、さくらの背中を抓んで、人の海から引きあげる。

「やーん……」

「だーから、いわんこっちゃねえ」

じたばたと暴れるさくらを床に降ろすと、黒鋼は思いきりイヤな顔。
「ごめん…なさい、あたしのせいなの」

しゅん、と頂垂れたさくらに、黒鋼は斜に構えてから間近まで顔を寄せた。

「あ？」

「子供たちに『黒鋼の奥さんみたい』って言われて、なんにも言えなかったから」

【さくら】

また 呼ぶ声がして、さくらは強く眉間を押さえる。

「余計なこと、気にすんじゃねえよ」

台所に据えている卓に直に座り、黒鋼はなにげなく中を仰ぎながら言った。

「……うん」

ねえ。

誰か教えて？

自分と呼ぶ声が、頭から離れないの。

忘れられないの、苦しい。

どうすればいいの？

「ん〜？」

「えっ、なに？」

気がつくと触れそうなほど近くに、黒鋼が顔を寄せてきていた。
さくらは、面食らって幾らか後じさる。

「また考えてたろ、シワ寄ってんぞ、眉間」

「だ、だって……聞こえるんだもの、仕方ないわよっ」

凶星を指され照れ隠しに背を向けた彼女を、黒鋼は面白そうな顔で見つめ、唐突に抱き締めた。

「やーっ！ ややや、やだ、やだってばっ」

「なんつーか、お前……見てて飽きないな。カワイイ」

ニヤ、と黒鋼は狼スマイル。

逞しい腕に抱き締められて、さくらは動きもままならず、か細い悲鳴をあげる。

「なんか、マジで気に入っちゃったな……お前のこと」

「ええ！？」

不遜なほど嬉しそうに言う黒鋼に、さくらは赤面してしまう。

彼がいま狼姿だったなら、絶対に尻尾を振っていきそうだ。

「俺アな、今までずっと、他の奴らから畏怖されてた。どんな奴でも、一緒にいるうちに、逃げてっちゃう。なんでか知らねえが、逃げなかったのはお前が初めてだ」

『見てごらんよ、あれは 鬼神 だよ……近づくんじゃないよ』

『あの目、あの青い目……ああおぞましい。太古の怪物の血を引いてるんだって！』

『近寄るんじゃない、あ奴は化け物だから！』

どうしても、どうしても受け入れてはもらえず。

自らにはなんの責もないのに、嫉^{そね}み、憎む村人達。

果てない孤独。

果てない悲しみ。

「それは
」

それは、さくらにも分からないことだった。

逃げようと思えば、そうすることができたのに。

逃げなかったのだ。

「それは……黒鋼さんが綺麗だから」

彼の眼差しに憎しみはなく、あるのは、どこまでも深い孤独と寂しさ。

透き通った、氷のように固い『生きる』意志。

「綺麗……なにがだ？」

彼の薄い唇が、笑みの形に開かれる。

笑っているのに、目だけが笑っていなかった。

「あなたの目よ。目は心を映してるから
あなたは綺麗なの」

頬に両手を添えて微笑むさくらに、黒鋼は思いきり赤面し、慌てて身を翻した。

「なんでもねえ……今のは、忘れてくれ」

ドカドカと勢いよく、小屋を出て行ってしまった黒鋼を、きよとんと見送るさくら。

「どう、応えればいいのか？」

ぽつりと呟く。

しかし誰が応えてくれようはずもなく、声は虚しく静寂に食べられてしまう。

あとは、潮騒が謡う音しか聞こえてこなかった。

「好きって、言われちゃった」

黒鋼の、上気して嬉しそうな顔を思い出して、さくらは思いきり赤くなってしまった。

「気に入った……か」

（どうしたんだろ、頭……もう痛くない？ 痛みが…消えた）

好きと言われて、返事はしていないものの、どこか受け入れている自分がいる。

好きになってみようかな、と一人呟いてから、さくらは出て行った

黒鋼を捜しに行ったのだった。

桜殯（さくらのもがり）（後書き）

どうも、維月です。

さくらが記憶喪失の間、朔はずっとむくれていますね。
朔…哀れだなあ。

さくらは、黒鋼という青年に拾われます。
そこで、また新たな……？

寄り添う心（前書き）

蘭溪の襲撃を受けて行方不明中のさくら。

介抱してくれた人狼族の青年・黒鋼に愛された彼女は……

朔ではなく、黒鋼の傍を選んだ！

異界ラブファンタジー好評連載中！

寄り添う心

「ん……」

夜半、さくらは小屋の戸が閉まる音で目醒めた。

（黒鋼さん……？）

さくらはがば、と勢いよく牀台から起き上がる。

「黒鋼さん！」

牀台から飛び降り、急いで小屋からまろび出たが、そこに彼の姿はなかった。

ひゅうひゅうと、冷たい夜風がすり抜けていくだけ。

恰もそれは、置いて行かれて寂しい、今のさくらの心のよう。

（どこに行ったのかな、散歩かしら？ 眠れなかったの？）

青白く、月光がストライプを描く森の中を、ぺたぺたと足音が響いた。

「黒鋼さん……どこにいるの？ 黒鋼さ ん！」

か細いさくらの声は、悉く夜闇に吸いこまれて消えてゆく。

一人が怖かった。

言いしれぬ不安を生む夜の闇は、もっと嫌いだった。

いつの間にか、さくらは走り出していた。

「黒鋼さんっ、どこ、どこっ？ 怖いのよっ…… きゃ！」

転んで擦りむけた足を引きずって森を彷徨い、さくらは声を限りに叫ぶ。

いや それはもう悲鳴だった。

「置いていかないで！ 怖い、怖いっ」

擦りむけた傷が、寒さに痺れたように痛んだ。

傷も痛むが、それよりももっと、胸が痛い。

さくらはついには座り込み、泣き出してしまった。

《はふ……ハッ、ハッ、ヴ ルルル》

ふと、獣の唸る声を聞いたさくらは、ヒツと短く息を詰める。

体が動かない。

声がもの凄く近くに……！

逃げなきゃ。

逃げなきゃ。

夜の森がいかにも危険に満ちているか、彼女は失念していたのである。いくらか後じさったが、それ以上のことはできなかった。

「やだ、やだ……食べられちゃうつ、来ないでよ！」

足元の小石を拾い上げたさくらは、獣に向けてそれを投げつける。

小さく弧を描いて飛んだ小石は 獣の鼻面に、いい音をた

てて命中した。

「いでっ！」

ひととき唸りが高くなる。

身構えるさくら。

「ぬぁにしゃがる、ばかやろう」

「……え」

木々の作る影から現れたのは、一頭の黒狼。

黒狼は躊躇なくさくらの側まで来ると、彼女の向かいに座り、実に人間臭くニヤリと笑ったのだ。

さくらは、その青い双眸に、彼が何者かすぐに理解した。

「バカだな……俺なんか追ってきて、ケガなんかしてんじゃねえよ」

「だって、だって……怖かったんだもんっ」

さくらは狼の黒鋼にきつく抱きつき、思いきり泣きじゃくった。
だが……。

「きゃあ!」

いきなり『べろりん』と頬を舐められて、さくらは慌てて涎を拭い落とす。

「お前、さっきからピーピー喧しかったよな。泣くなよ」

「だって…一人が不安で。黒鋼さんは急に出てくるし」

「探してたんだろうが」

「唸ったでしょ、食べられちゃうかと思ったの!」

特に気にした風もなくかかか、と後肢で首筋を掻く黒鋼に、さくらは思いきり膨れ面。

「喰わねーよ、てか、喰っていいの?」

がう、とさくらの腕を黒鋼は甘噛みする。

「やあだ、もう」

さつと顔を赤らめたさくらは、それを誤魔化すように慌ててそっぽを向いた。

触れられた場所が

熱い。

熱を持って、まるで疼くよう。

「俺が狼だって分かったろ、それでも…怖くねえんだな?」

彼はさくらから離れると、人型に姿を歪ませた。

月光につやつやと輝く彼は、どこか神々しくもある。

「うん……」

それに見惚れていたさくらは、傷の痛みも忘れてすっと立ちあがる。

そして中天の月を見て、ふうわりと微笑んだ。

「月、きれいな」

今度は、彼が赤面する番だ。

満面の笑みを咲かせるさくらを見て、黒鋼はひときわ高い動悸を感じ、目を見開いた。

「帰ろう、黒鋼さん」

「お？ おう」

とことごと、少し先を歩いて振り向いたさくらに、黒鋼は暫し見惚れたまま立ち尽くす。

（この娘は、こんなにも美しかっただろうか？）

弱みにつけ込むやり方を好まないの黒鋼の信条だが、こればかりはこの想いだけは、彼自身にもどうすることもできなかった。

「危なっかしい奴だな、見てらんねえ」

吐き捨てるように行って、後から追いついた黒金は、勢いよくさくらを抱きあげた。

いつものような、子猫を抱くようなやり方ではなく、今度はできるだけの愛しさを込めて。

「やあん、降ろして、降ろしてっばっ」

それでも、さくらはじたばたと暴れる。

今の体勢が、余程恥ずかしいのだろう、彼女の顔は赤い。

「るせえ、大人しくしろ……ケガしてんだろうがよ」

「大丈夫っ、ちよつと擦りむいただけだからっ」

もごもごと暴れるさくらを押さえながら、黒鋼は勝ち誇ったようにフンと鼻を鳴らす。

やはり、獣の性が騒ぐようだ。

「黒鋼さあん……苦しっ」

締めあげられた、子猫のように訴えるさくらの頬をペロリと舐めて、黒鋼は幸せそうに目を細めた。

「お前がいつてんなら……このままいてもいいぜ。俺も、その方が嬉しいからな」

「うん？」

やっぱり、ぼけ……と見あげるさくらに、黒鋼は苦笑い。

(コイツ、意味、分かってんのかあ……？ 一生に関わることなの
による)

「決まり、だな。よしっ、俺ンとこにいる。な？」

「黒鋼さん…… うっー!!」

【つたく、さくらは俺がいなきやダメダメだなあ】

声が、重なる。

映像^{ビジュアル}までが浮かんで
んで、混乱を避けた。

しかし、今度はなんとか痛みを呑み込
彼の言うとおりに忘れてしまおうと、さくらはその日を境に二度と
朔を思い出さないようにした。

「いるね、じゃあずっと…… 黒鋼さんの傍に」

ふわふわと漂うだけの花びらは、やっと一時の安楽を得る。

しかし、その安楽もいつ消えるやも知れぬ泡沫のようなものだ。
それを、さくらは知らない。

禁断の恋（前書き）

行方不明中のさくらが流された島は、兎族の梁呂から北東の方角にある胡国・茜嶺^{せんりょう}という漁村だった。

そこで、繰り広げられるさくらと黒鋼の激しい恋。

奔放な二人の愛は今日も深まるばかり。

さて、これからどうなる？

異界ラブファンタジー、好評連載中！

禁断の恋

朝に目を覚ますと、必ずさくらが傍にいるか確認するのが、黒鋼の最近の日課になっている。

存在を確かめるように、さくらの頬に触れる黒鋼の表情は穏和で、普段の無愛想が嘘のようだ。

「んう……んう？」

可愛い寝言もいいが、このまま寝かせておくわけにもいかないので、早速起こしに掛かる。

今日は、食糧を定期的に取りに行く日なのだ。

さくらが流れ着いたのは、梁呂から北東の方角にある胡国・茜嶺せんりょうという漁村だった。

茜嶺に棲む種族は人狼族。ここ茜嶺だけではなく、各国の種族は大半が人狼が占めているのである。

茜嶺は漁業の盛んな村だが、村人達の多く殆どは畑作をしながら日々を暮らしている。

黒鋼は、そのどれからも例に漏れており、すべて自給自足（ある意味）、正真正銘の一匹狼だ。

「起きろさくら、出かけるぞ」

「どこ行くの？」

寝ぼけ眼を擦るさくらの頭の上に、作業服のような物が被さる。

「食いもん探しにな。行くだろ？ 待つてやるから、着替えてこい」

「あ、うん」

黒鋼がさくらに投げたのは、黒い野良着だ。

それは、土木業者の作業服に、よく似ている。

（わっ、がばがばだ……上着だけでも、スカートみたい）
とりあえず隣室で着替えたさくらだが、サイズが合わない。

そのうえ……。

上着だけでも長いのだ、ズボンなどは到底ムリだ。

「これじゃ、なんだかスカートみたいだけど……仕方ないわよね。どこかに紐があればいいんだけど」

「ごそごそと引き出しを漁るさくら。そして。」

偶然ズボンのウエストを締める紐を見つけたさくらは、それを使うことにした。

そうすれば、裾が広がらない。

「遅えぞ、おい」

ひよ、と頭を覗かせた黒鋼は、渡した服の上着だけをワンピースのように着たさくらを見て、思いきり噴き出してしまった。

「ぶふっ！　んだよ、そりゃあ……」

「黒鋼さあん……」（怒）

「だから長衣ロブにしたのか。まあいいんじゃない？　似合う似合う」
「しばしと地駄を踏んでウケている黒鋼を、さくらは恨みがましいジト目で睨む。

くつくつと笑う彼の目元には、涙さえも浮かんでいる。

「笑わないでよ……失礼ねえ」

「ぷ　　つと膨れた餅のようになって閉まった彼女に、黒鋼は二ツと口角をあげて笑った。

「行くぞ」

夜明け間近の森を、さくらを乗せた狼姿の黒鋼が駆けてゆく。

夏とはいえ、早朝の気は冷たく肌を刺す。

耳元で鋭く風が鳴り、翩ひらられた髪が頬を打った。

「ど、どこまで行くの？」

「奥だ、奥」

「奥ってなに

っ！？」

「るせえ、しつかり掴まってなっ」

更に速度を上げた黒鋼に抱きつい（しがみつい）て、さくらは毎度の事ながら身の凍る思いを味わっていた。

（は、速いっ……とにかく、早く止まって　　！）

と、急停止した黒鋼から、さくらは危うくずり落ちそうになり、慌てて地面に足をつけた。

「黒鋼さん、どうした……の？」

「てめえ、なんだ」

夜明けの薄闇に、黒鋼の唸りが響く。

そこまで言いかけたさくらを背中に庇って、黒鋼は牙を剥いた。

二人の前に現れた青い毛皮を持つ獣は、どこか穏和にさえ聞こえる声で礼を取った。

「夜分に失礼を、私は『連れ』を探している旅の者です」

「へえ、そうかい……それで、俺たちになんの用だ」

すると、青い毛皮のウサギはニィ……と三日月形に目を歪ませて笑い

嘲笑を含む声で言った。

「その子は、私の探している『連れ』に相違まちがいありません」

「だから……返せつか」

「はい。おいで、さくら……みなお前の帰りを待っているぞ」

一步にじり寄った獣に、さくらは身の底からくる何か　　悪寒

を感じて、黒鋼にしがみついた。

さくらに戦慄が走る。

自分は、この男を知っている！

鳴りやまない警鐘。

宙に舞う感じ。

翻る衣。

侮蔑と、嘲笑の笑み。

そして、悲鳴。

冷や汗が首筋を伝い、さくらは、耳の奥で血潮が逆流する音を聞いた気がした。

震えが、止まらなかった。

「イヤだと言った!」

黒鋼は牙をむき出しにして唸り、青毛のウサギ・蘭溪を喰い干切らんばかりに間合いを詰める。

「てめえ、どうにもこいつを捜しに来たって感じじゃあねえよな。殺意の宿る目だ。コイツは誰だろうが、他の奴にくれてやる気はねえ……今すぐくたばりたくなきゃ、さっさと失せる!」

「ふっ 思った以上に楽しませてくれる。殺すには、ちと惜しいな。まあ勢々、足掻くがいいさ」

くくくと低く嗤って、蘭溪は地脈に染み込むように目元まで潜り、影の底に消えていった。

「あの声……知らないのに、でも知ってるっ!?!」

座り込んでうち震えるさくらを、いつの間に戻ったのか、黒鋼の逞しい腕が抱き寄せる。

「お前、ウサギ共と関係してたんだな……それで記憶喪失になった。けど安心しろ、たとえ全部元に戻ったとしても、俺はお前を離さねえ」

さくらの瞳が、涙で潤んで震えた。

小さく頷くと、黒鋼の胸板に甘えるように頬寄せる。

「嬉しい……あたし、嬉しい」

頬を染めてはにかむさくらの初々しさは、彼を夢中にさせるには充分すぎる理由だった。

「さくら……っ!」

「やんんっ……ん、ううん」

「んはっ　　んんっ、んっ……」

黒鋼は、夢中でさくらの唇を奪っていた。
強く吸い上げ、舌を絡める。

「やだ……あん、黒鋼……」

「逃げるなよ……な？」

やんわりと押し倒され、さくらは恥ずかしがってもがく。

夜目にも薄紅に上気するさくらの肌に、黒鋼は更に欲情した。

その唇が、彼女に触れる。

「あんっ……だめえ……」

「もう、離さねえよ……覚悟しな」

地平を染め上げる払暁の中、当初の目的を忘れて睦み合う二人。

禁止されたことほど、嵌りやすく甘美なものはない。

まさに『禁断の恋』に堕ちた黒鋼を止める者は、今のところいなかった。

禁断の恋（後書き）

こんばんわ、維月です。

ああ……二人の濡れ場が多すぎた。
（汗）

朔はどこいったああ！？

急転直下の恋 求婚（前書き）

胡国・茜嶺で、人狼族の青年・黒鋼と暮らし始めたさくら。

ぶっきらぼうで、粗暴。だが優しい彼にさくらは惹きつけられ、彼もまた彼女に惹かれている。

今日も、奔放な二人の愛は深まるばかり。

そして、遂にプロポーズされたさくら！

記憶は戻るのか！？

異界ラブストーリー、好評連載中！

急転直下の恋 求婚

「起きて！ もう黒鋼ってば……もうお昼だよ？」

下敷きにされたままのさくらは、黒鋼の胸板をなんとか押し返そうと、奮闘中だった。

「苦しいよお、起きて」

完全に寝入っているのか、いくら押しても起きる気配はない。あまつさえ、『父さんだぞお』などとにやけていたりする。

（重い……それにしても、どこかに隠し子でもいるのかな？）だからといって放っておく程、さくらも甘くはない。

いまは、華奢なさくらにとって、逞しい黒鋼の重みは驚異でしかないのだ。

「黒鋼のバカあ……このまま死んだら絶対、恨んでやるうう」

やや暫くじたばたともがいてから、さくらは小さく鼻を鳴らして、そのままぐったりと伸びてしまった。

「悪いな……死なせるつもりはねえよ」

やっと、ゆっくりと体を起こした黒鋼に、さくらは膨れ面。

「やっと起きたのね、もう……」

がしがしと頭を掻き毟る黒鋼は、聞いているのかいないのか、素知らぬ顔で大あくびをしている。

「朝ゴハン通りこして、お昼ゴハンになっちゃったじゃない。聞いている？」

牀台に座りながら髪を梳き、身繕いを終えたさくらは隣りに座っていた黒鋼に甘えた。

「ねえ……キスして？」

「朝っぱらから誘うなよ……」

「嬉しいクセに」

「……ああ」

また、その情事に牀台が苦しそうに軋んだ。

昼の温んだ日射しに、彼女の素足が眩しくて。
絡めるようなキスの後、黒鋼はついと目をそむける。
最近はそれでなくても、理性が保たないのだ。

目に痛い。

「結局、昨夜はそのまま帰って来ちゃったからね……もう一回行ってこようよ。あたし、仕度してくる」

「お、おう」

ぱたぱたと、さくらが部屋から出て行く。

それを名残惜しげに見送ってから、黒鋼は頭を振って、なんとか邪念を振り落とした。

「って！　なに考えてんだよ俺っ」

（もし、このまま暮らしが続いたら……理性保てる自信がねえよ。どうする）

再び牀台に、大の字で寝転がり一人苦悩する黒鋼は、妄想が暴れそうになるのを懸命に堪えた。

そんなことではいけないと、自分でも分かってはいるのだ。

徐々にだが、最近さくらの記憶が戻りつつある。

そして、あいつ　　さくらに夫がいるのを知った。

いる、ということは認めているが、名前が思い出せないことと、彼女本人に自覚というか、実感が沸かないようなのだ。

もし、さくらの夫がここに来たときは、やはり返すべきだろうか。しかし本人の記憶が戻らない限り、『あんたは誰だ』というシチュエーションが妥当だろう。

どっちにしろ、残酷なことに変わりはない。

それならば、いっそのこと……。

「奪^とつちまうか」

どちらが後腐れがないかといえば、もちろん後者の方だ。

いや、ないとは言えないが、現状を認めさせるのが一番自然なような気がする。

それに、

「あ　　っ、黒鋼まだ着替えてなかった！　置いてっちゃうぞ？」

「なあ、さくら」

「なあに？　おっかない顔して」

それに搜すだろ、普通は。

自分の妻がいなくなっても探しにも来ねえたあ、どついう事だ！？

譬えどんな事情があれど、そんな奴にさくらの夫を名乗る資格はない。

と、俺は思う。

「俺んトコにいろ、いや……いてくれ」

「なあに、それ昨夜も言ってたね。　　どつしたの？」

刹那、気の抜けたような顔をした黒鋼に、さくらは（やっぱり）無邪気に小首を傾げて尋ねる。

「お前なあ……　やっぱ分かってねえか」

「なにがよ」

普通にしているても、鋭い彼の眼差しに挑むように、さくらも黒鋼を見返す。

まっすぐに見つめられた黒鋼は、一気に赤面すると同時に、半ば怒鳴るように言った。

「一度しか言わねえぞっ」

「うん」

こくり、とさくらの喉が上下する。
なにを言われるんだろうか。

「俺と……結婚してくれ!!」

あまりの迫力に、彼女はやや暫く目をしばたかせていた。
そして、おもむろに沸騰する。

その顔は、互いにまるでトマトのようだ。

「黒、鋼……どうして？」

「俺なら、お前を泣かせたりしねえ…苦しませたりもしねえ。だから、俺のモノになれ」

やんわりと抱き締める腕に、さくらは幸せそうに『ほう』と息をついた。

「ほんと？」

「お前の夫だかが来ても、絶対対に渡さねえから」

黒鋼は強くさくらを抱き締めると、軽く額に口づけ、照れくさそうに微笑んだ。

「嬉しいなあ……でも、もう少し…考えさせて？」

「さくら？」

不安そうに表情を曇らせた黒鋼に微笑んで、彼の腕を解く。
戸口を出て行ったのを、見送った矢先だった。

さくらが、頰ほほれた。

その様は、細く柔らかい草が折れるかの如くで。

血の気の失せた白蠟の頬は、瘦せて尖ったほお骨が目立つばかり。
そして、口許には鮮血がこびりついていた。

「さくら!?! さくらっ、どうしたんだよ!」

いくら呼びかけて頬を叩いても、さくらは目を開けず、昏倒したまま動かない。

まるで 『魂そのもの』が抜けてしまったような感じた。

「医者つ、くそつ……分からねえ、医者つてのはどこにいやがる！」

青白い顔色。

滞り気味の脈。

どうしよう。

どうしよう。

騒ぎ とり乱す、黒鋼の声を聞きつけた隣家の老婆がやってきて、唐突に彼の背中を杖で一突きした。

「こりゃ！ 大の男が情けないつ。まずは落ちつくんじゃ……医者なら、山一つ越えたところにおるから、一晩かからずに着けるだろつよ」

「すまん、おばば」

心底すまなそうに言う黒鋼に驚いて、老婆は険しくしていた表情を幾分か和らげた。

「よいさ、気にするでない。はみ出し者のよしみじゃ……それにしてもものう、なんとも面妖な。この娘、人間なのかい？」

「そうだが、なんだ？」

返事が来るとは思っていなかった老婆は、驚きに目を張り、そつとさくらの頬を撫でた。

「まわりの連中が騒いでいたが、どうやら話は本当のようだ。流れ着いたのを拾ったんだってね。可哀相に、こんなに毒を溜めて」

「毒だと！？ なんだ、病気なのか？ だから、コイツは血を吐いたんだなっ」

身を乗り出した黒鋼の背中を、老婆はなにも言わずに押し出す。
その代わりに目配せをして、黒鋼に『行け』と促し、片手の杖を掲げて見せた。

風が、止む。

死気が生氣に転じていくのを、黒鋼は体のどことも言えない場所で感じていた。

騒めきが静まり、夕闇が忍び寄ってくる。

「時間がない、急ぐんだよ……」

さくらを抱えて駆けていった黒鋼の背中を見送って、老婆はぼつりと呟いたのだった。

昼の陽気は死気であり、どんな禍事まがごともなりを潜めている。

しかし今は、死気と生氣の境である。病人には、一番の峠だ。

（体：悪くしてたなんて、全然気づかなかった！ やべえよ、冷たすぎだっ）

時折止まってはさくらのために暖を取り、少しでも体温が戻るように念じる。

しかし火影に照らし出される彼女の頬は白く、まるで、内部から凍っているかのように熱を受け付けない。

「必ず助けるっ……助けるから、頑張れっ」

再び走り出した黒鋼が、山裾に棲む医者イサナの元に着いたのは、夜が明けると明けないかの一手前だった。

「すまねえ、助けてくれ！ ここに、急に血い吐いて倒れた奴がいるんだっ、開けてくれ！」

激しく、せっぱ詰まった呼びかけに、木製の扉が今にも砕けそうなほどに歪む。

それが余程応えたのか、間を持たずに勢いよく扉が開き、手提げ灯ランタナ

を片手に掲げた金髪の男が現れた。

金髪といっても、それ程明るい色ではない。

普通の色が太陽と譬えるなら、彼の色は月光のよう。

「はいはい、そんなに叩かないで……近所迷惑になっちゃうだろ？ その子が患者だね、とにかく中へ」

「あつ、ああ！」

茜嶺と隣村の境の山裾に住む医者^{せい}は、晟と名乗る男だった。

「この子、人間だね……吐血するまで我慢してたんだ。こりゃあ酷い」

晟は、診察台に仰向けにしたさくらの上に、手を翳しながら云った。
「コイツ、助かるのか!？」

「連れてきたのが俺の処でよかった。他じゃ、どうにもできないだろうから」

身を乗り出した、黒鋼の肩を押し返して座らせると、晟は微笑んでみせる。

「どうなんだって聞いてるっ」

「怒鳴らないで、いま確かめてるんだ」

濃厚な、怨嗟の気配。

それに。

彼女には、『護り』が働いている。

死した、魂の気配。

彼も、ひどく彼女を心配している。

ひどい汚穢^{おあい}だ。

晟を光輪が包むと同時に、彼の片手に光が灯った。

その手で触れていくと、灯った光は青白く揺れながら、やがてさくらの心臓あたりに染み込んだ。

「なあ！ どうなんだっ」

「かなり深刻な状態だよ……この子、呪われてる。おそらくは厭魅^{えんみ}、禁呪だ」

「の、呪いだって！ 笑かすんじゃないよ、てめえ…医者だろ？んな事信じてんのかよっ」

引きつった笑いを浮かべる黒鋼に、晟はへにやんと笑った。

「幸いね、俺は呪術師でもあるんだよ。言ったら、『他じゃ、どうにもならない』って。俺なら、できる」

「じゃあ、さくらは助かるんだな！？ それさえ破っちまえば」

「あと 血を吐いた原因だけど、全部が呪いのせいって訳じゃないよ。この子…さくらさんと言ったね、さくらさんの体は『変成』を起こしてる。この世界で生きていけるように、変わり始めるんだ。その変化に体内が軋む。それともう一つ」

「なんだよ」

黒鋼は、短く息を詰める。

「彼女……妊娠してる。身籠もってるよ」

さらりと言う晟。

「なっ、なにい！？ だだだ誰の奴だよ！！」

思いきりわめく黒鋼に、晟は不思議そうに首を傾げた。

「えー、君のじゃないの？ 彼女なんでしょ？」

晟は緑色の瞳を細めて笑う。

詮索する女性のような雰囲気を感じ、黒鋼は思いきり顔を顰める。

「そ、そうだが……身に覚えがねえ！」

（げっ、そっぴや……あの夜！ 覚え……あるかも）

思わず赤面して怒鳴る黒鋼に、晟はどこか楽しげに笑った。

「そういえばね、君の名前：聞いてなかったと思うんだけど？ 教えてー」

「黒鋼だよ、知らねえのか？」

訝る黒鋼に、晟はまたも『くにゃん』とおどけてみせる。

「知らないって、なにが？ 俺あんまり外出しないから、よく知らないんだ」

人狼族の中でも、隔絶された力を持つ個体。

異種^{ハイフ}混血。

今は、神話の世界にしかその名を聞かない妖魔の血を、黒鋼はひいているのだ。

それ故につけられた異名は『鬼神』黒鋼。

「まあいい、とにかく助かるんだな…コイツ。それで、どうすればいい…その、呪いとやらは」

肩を竦めて言う黒鋼に、晟はどこか面白そうな風に笑って腕組みする。

「まあ、本業は医者だけど…呪術^{こっち}の方が得意分野。任せてよ」

「足元に気をつけてきて…こっちだよ」

床の隠し扉を開くと、地下室独特の冷気が吹き上がり、秘密めいた雰囲気を感じさせる。

先導してランプを掲げた晟が、中段で立ち止まって微笑んだ。

急転直下の恋 求婚（後書き）

どうも、維月です。

仕事の都合で更新が遅れてしまった……。はあ。

さて、本編。

新キャラ登場！ 彼の性格、作り直した方がいいかなあ（汗汗）

衝突（前書き）

蘭溪の攻撃により記憶をなくし、茜嶺という漁村に流れ着いたさくら。

黒鋼との生活に終わりが訪れつつあった。

さくらの記憶が戻ったのだ！

『変成』を起こして吐血した彼女を、黒鋼は医者に見せに行くが…

…そこでさくらの新事実が明らかになる！

衝突

「イタカ？」

「アア、ミツケタ」

「センダツテ、ホンタイニツタエニツタ……サア、ドウウゴクカ
ミモノダナ」

漆黒の闇に紛れて潜伏している梁呂側の暗殺部三人組は、暗殺部特有の微声で、標的の動きを見張っていた。

「くっ、ぬかったわ……呪が甘かったのか、あの小娘め、返してき
おった！」

吐血した鮮血のこびりつく口許を拭って、蘭溪は憎々しげに、叫ぶ
ともつかない声で叫き散らす。

「くそ、くそ……たかが人間の分際で！ 許さん、許さんぞおっ」

パタツ……パタツ

鮮血が掌を伝って、地面を赤黒く染めていく。

再び吐血して、蘭溪は体をくの字に折り曲げた。

「あの女……殺してやる！」

狂気の宿る目が、ひときわ青く燃えたぎった。

晟の案内で入った部屋は、壁天井すべてが朱塗りで、そこかしこ
に甲骨文字によく似た、おそらく一般人には解読不能な文字が刻ま
れている。

そして、文字たちは自在にその空間を廻っていた。

地下室独特の冷氣と水の気配が、不可思議な雰囲気を取り際立たせ
ている。

「さくらさんをこっちに……この池に浸して」

薬湯元々の色なのか、他にも様々な薬草が沈む澄んだグリーンの水

に、黒鋼は静かにさくらを横たえた。

水は、まるで冬の凍水いてみずのよう。

冷たい痛みが走り、彼は苦渋にその顔を歪ませた。

「いてっ！……っ！か、なんだこの冷たさはっ。真冬なみだぞ」

「それが、いま彼女が感じてる『痛み』だよ。水を通して伝わったみたいだね」

「さくら……」

触れようと伸ばした手を、晟はやんわりと、だがしつかりと押しとどめる。

「ダメだよ、今は触っちゃいけない。邪気を炙り出しているからね……見てごらん、早速始まった」

静かな水面に、ゆっくりと泡が浮かんでは消える。

同時に、水中に筋を引く青白い糸。

「なっ、なんだよこりゃあ！」

青白い糸は恰も、蛇のように鎌首をもたげて床へと這い出し、寄り集い、布を織るように一人の男の姿を現した。

【お、のれ……！人間の小娘が……許さん、許さん！】

ボロボロと崩れては戻るを繰り返しながら、『それ』はさくらへの怨嗟を吐き散らす。

「やっとおでましたね、コイツが……術者、さくらさんを呪詛した犯人だよ。どうやら兎族のようだけど」

見覚えのある容姿に、黒鋼は唸る　　というか怒鳴った。

「コイツ、あん時のっ！？　またなんか仕掛けてやがったっ」

「ねえ、あの時って？　なーに？」

「あん時は、あん時だ。初デート壊しやがって……って、てめえは知らなくていいんだよっ」

忘れもしない。

初デートを邪魔した男だ。

忘れようにも、忘れられるわけがない。

「それよかコイツ……手負いみてえだな」

べつとりと鮮血のこびりつく口許、狂気の青い瞳。

痛手さえも凌駕するほどの執念が感じられる。

「同族に追われてるみたいだ。なんだろうね、兎族のほう……なんだかきな臭い」

晟はうむむ、と唸ってから、ポケットにある呪符　　紙人形を取り出す。

そして薬湯の池からさくらを抱え出し、紙人形を彼女の額に張り合わせた。

紙人形は一度、等身大の繭玉に変じると、蕾が綻ぶが如くにその形を変化させてゆく。

やがて現れたのは、さくらと瓜二つの式神だった。

「おっ、おい！　さくらが分裂したぞっ」

慌てて後じさる黒鋼、案外小心者である。

「いいや、分かれたんじゃないよ。元に戻ったのさ……彼女を呪ったのと同じモノに。それと、呪詛返しも兼ねて、今度彼女を呪おうとしても術は働かずに、術者自身を殺すように、と。ちょっとオマケした」

てへ、と無邪気に笑った晟に、黒鋼はヒヤリとなる。

（コイツ……もしかしてやばい奴かも）

「見かけに寄らねえな、お前。黒いこと言いやがる」

「さて、次の手を打つとしようかな」

晟は女神のように微笑むと『そんなことないよ』と、さくら型式神の背を軽く押し出した。

「さ……行っておいで。その力の持ち主の元へ。そして見張れ、もし動きがあれば殺しいい」

是と応えた式神は、疾風となって鎬矢の如くに、天高く跳んでいった。

「さて……」

椅子に座らせていたさくらに向き直ると、晟は彼女の額に人差し指で触れる。

すると、徐々にじわじわと青い光の皮膜が覆った。

「君は戻ってくるんだよ、目を開けて」

彼女の瞼が、ゆっくりと開かれてゆく。

いま夢から醒めたような薄茶の瞳が、ふわりと光を戻した。

「戻ったね、おかえり」

白く、か細い手が伸ばされる。

差し出された彼の手を取り、覚束ない足取りで立ちあがるさくら。

「お前……よく、無事でっ！」

痩せて、更に華奢になったさくらの肩。黒鋼は堪らずに思いきり抱き締めた。

「心配ばっか、かけやがって……よく、戻ってきたな」

強く閉じた黒鋼の目尻から、涙が、堰をきったように幾筋も伝いおちた。

「黒鋼……ここ、どこ？ 寒い」

強く締めていた彼の腕を解いて、さくらは身を竦ませる。

すべて、^{あか}緒で統一された空間。

冷気……。

いや、霊気だろうか？

さくらは漠然と、雨上がりの、故郷の森を思い出していた。

雨。

冷気、水の…気配。

心許なくて……愛おしく、甘酸っぱいような思いがこみ上げてきて意識が……覚醒していく。

「なあ、コイツ記憶喪失なんだよ。それも治ったのか？」

黒鋼は、どこか縋るように屍に訊^とう。

信じたくないのだ、彼女が自分から離れていくことを。

紛れもない事実だが、分かつてはいるが……もう一度問わずにはいられなかった。

ゆるゆると、首を振る屍。

その答えが、どちらを意味するのか……彼にはもう分かっていた。

時が、動き始めたよ。妨げる、手だてはないんだ。

「初めまして、さくらさん……俺は屍。巫蠱^{ふこ}道士なんだ。君を戒めていたモノは、取らせて貰ったよ。よかったら、話してくれるかい？ 兎族のこと、そして……君がどこから来たのか」

「……」

さくらは暫しの沈黙のあと、何度か瞠目を繰り返してから、ゆつくりと頷いた。

「あたし、ずっと漂っていたのね。あの日、突き落とされてから今まで。朔の処に、早く帰らなくちゃ……」

「帰るって、さくらさんは朔というヒトの処から来たんだ？ どこ

に棲んでたんだい？」

ひとしきり、走った痛みがさくらの頭を軋らせる。

その痛みに、彼女は強く眉間を顰めた。

「ごめんよ、ムリしないでいいから……ゆっくりね」

「ええ……あたしは、夫と梁呂にいたわ。兎族同士が争っていて……
あたしが、その始まり。ダメ……これくらいしか思い出せなくて」

夫。

その響きに、黒鋼は爆ぜんばかりに目を見張った。

「言っな……それ以上言っなよっ」

傾いださくらを抱き寄せて、黒鋼はきつく頬寄せる。

「ダメだ……行かさねえっ、お前は……俺の傍で幸せになればいい！
わざわざ不幸になりに行くこたねえよっ」

「今も昔も、あたしが始まりで兎族は闘ってるの……あたしが始まりだから、だからあたしが終わらせなくちゃ」

ただ成り行きを見ていた晟が、やにわに言った。

その声音に、尋常とは思えない意志を感じたからだ。

「さくらさん……記憶が戻ったんだね」

「さくら！？」

小さく頷いた彼女に、黒鋼はまたも目を張る。

さくらは黒鋼の側から離れると、悲愴に顔を顰めた。

「ごめんね、黒鋼……もつと前から、記憶は戻ってたの。あなたの
気持ち嬉しかった……愛してくれて、嬉しかった。でも、これじ
や騙したのと、同じだよね」

泣いても状況は動かないし、誤魔化せないのは分かっている。

けれど、泣かずにはおれなかった。

痛い……。

痛い。

静寂が、痛い。

「巻き込むくらいなら、忘れたまま暮らせばいいと思った。けど……そんなのはダメ、自分だけ逃げて生きるわけにはいかないのよ。さだめが、あたしを逃がさない」

泣いて腫れた目元を拭って、さくらは二人を交互に見やる。

「言い方が悪かったんだね。別に君を責めてる訳じゃない……さくらさん、俺たち君の力になりたいんだ。だから、なにがあったのか全部話してくれる？」

翡翠のような緑の瞳を和ませ、晟はさくらの頬を撫でた。

その温みが愛おしくて、また涙腺がゆるむ。

「バーカ、そんなんで俺が諦めると思うな。お前の行く先、どこにだって付いてくぜ」

「黒鋼、それってストーカーって言っただよ？」

へんつ、と強がって胸を張った黒鋼を、晟が茶化す。

「んだとお…… 耄られてえのか teme ！」

「おっと、暴力はなんだ？」

一方……晟の式神付きの蘭溪は、思いの外の深手を抱えて、茜嶺の山林を逃亡していた。

青い巨体が、木々をへし折りながら森中を疾駆する。背後の、そう遠くない距離に、無数の気配を感じる。

おそらくは追っ手、梁呂側の軍勢だろう。

蘭溪は唸った。

「ふん……結局残ったのは俺だけか。くだらん奴らだ、怖じ気づきお

って！」

カララ、と脆い岩盤が崩れて谷底の闇に消えてゆくのを見送って、口惜しげに足踏みする蘭溪。

これですべて、彼の退路は断たれた。

「くそっ…来すぎた！」

谷底には、硫黄の噴き出す地獄谷。

これしきの熱で溶ける体ではないが、長丁場になれば不利な地形だ。
「追いついたぞ、蘭溪っ！！」

風の中に、短かな黒髪がさんざめく。

蘭溪より数軒離れた場所に、引き絞った矢を番えた青年が構えていた。
た。

朔だ。

その他にも刹霞や奈与、弓阿がいる。

「屠られた同胞の辛酸…はらから思い知るがいい。蘭溪、反逆罪により貴様をこの場で極刑に処す！！」

「ふふふ…くはははっ…兄上、今更、もう遅いわ！」

歪んだ笑み。

牙を剥き出しに、耳まで裂けた口を開けて高笑いする蘭溪。

「貴様…黙りや！」

きらりと白刃に光が反射し、鞘から刀身が抜かれた。

刀を振り上げたのは、弓阿だ。

「弓阿…兄妹だろう、兄を斬るのか？」

「罪人に、兄もヘチマもない…彼岸でその罪、悔いることだ」

戦姫の異名を持つ彼女からは、普段からは想像のできないほどの気迫と殺気が放たれていた。

「止せ、やめろ弓阿！」

必死に身を振る蘭溪。

しかし白刃が、滑らかに弧を描いて振り下ろされた。

ガシュッ……ッ！

斬り捨てられた蘭溪はそのまま崖を滑落し、谷底の闇に消えていったのだった。

「この世界に、人間はいないのよね？ どうしてか知ってる？」

さくらは、自分より頭2つ分背が高い晟を見あげて問うた。

「色々説はあるけど、気候のせいとか…一番有力なのが戦争による減少、及び絶滅かな」

「俺も、そう聞いているが……さくら、なにか知っているのか？」

大きく頷いたさくらに、黒鋼と晟は、共にぎよっと目を張った。

「兎族と人族が千年前に大戦をしたの、その原因が……あたしよ」

衝突（後書き）

ああ、黒鋼がしつこい。
（汗）

茜嶺の役（えき）（前書き）

一方、蘭溪を倒した弓阿たち梁呂の側兔族は、茜嶺の陣営で仮眠を取っていた。

予期せぬ戦闘に、弓阿達は戸惑うが……？！

茜嶺の役（えき）

「千年前の悲劇……それでこの世界の人族のすべてが滅んだ、だと？」

「さくらさんが始まりつて、千年前とどんな関わりが？」

「やっと言葉を吐きだした二人は、顔を見合わせて動揺を露わにする。まったく、事態が飲み込めていないようだ。

突然に事実を告げられたのだ。

すぐに受け入れられるはずもないのは当たり前だ。

「人と兎族はね、それまでは上手くやってたの……貿易とかも盛んで平和だったと聞くわ。あたしの前世、もう一人の『さくら』と兎族の長が出逢い、恋に堕ちるまでは」

「ちよつと質問」

ひよこ、と小さく手をあげる晟。

「さくらは、どこから来たの？」

（い、いつの間にか呼び捨て……まあいいや）

「日本というの。もうあんまり口にしてなかったから、懐かしい響きね」

「ニホン……？ 聞かねえ国名だな、どこだよそりゃあ」

「知リたがりだねえ、君も」

身を乗り出して興味津々な黒鋼を、またも晟が茶化す。

どうやら、からかい癖が板に付いてしまったらしい。

それとも、もしかしたらそれが彼の地なのかも知れないが。

「もしかして、伝承に聞く『倭国』かい？ 遙か東海の果てに浮かぶ島国で、不老長寿の」

「『倭』……そう、昔は確かにそう呼ばれたらしいわ。でも、全然不老でも長寿でもない国よ？」

「……その日本から、兎族のヒトと一緒にここに来たのか。梁呂はウサギの島だもんね。ということは ダンナさんは兎族なん

だ？」

「そう、だけど…話がずれてるから戻すわね。今も昔も、あたしのせいで兎族は変動を起こしてる。あたしが始まりって…さっき言ったのはその事よ」

さくらは小さく咳払いをして、面白がっていた晟を窺める。

「帰りたい？ 彼の処に…：口封じに殺されかけたんだろ？ そんな一族に戻ったら、今度こそ殺されるかも知れないよ。運命さだめなんて気にしないで、余所で暮らした方がいいと思うけどなあ」

「お前の言い分にも一理あるが、まあ説得したってムダだ…：どうあつても行くんだろ、兎に会いに。俺は氣にくわねえけどな」

「きゃっ！ や、やーん」

唸るように言った黒鋼は、さくらを抱き寄せて、ぐしゃぐしゃと思いきり髪をかき混ぜた。

「ほーんと、黒鋼はさくらが好きなんだねえ…：でもお、それって不倫っていうんじゃない？」

にこやかに晟、爆弾投下。

黒鋼は石化し、一瞬大氣が凍った。

それを叩き割ったのは、もちろん晟だ。

「ねえさくら、ダンナさんって…：どんなヒトなんだい？ 俺、人型してなかったら食べちゃいそう」

「えっ！」

にこにこしながらも、一番黒いオーラを出しているのは彼だ。

黒鋼は、未だ凍結中。

（そっか…：この人たちにとって、朔は食べ物ではないんだわ！）さくらは、失念していた自分を一瞬呪った。

「さくらは可愛いのに、相手が変なのだったら悲惨だろう？ だったら、俺あたりに乗りかえたりして…：」

「晟、晟…：後ろに」

（きゃー……なんなの、この色気は……それに、この妖気は……）
さくらは、甘える晟の後ろに聳える黒鋼に、寒気を催した。

その一瞬後、甘えていた晟が頭を押さえて、地面に沈み込む。

「いつ……いつてえ」

「このボケ狐！ 間違っても横取りなんか考えんじゃねえ！」

とかなんとか。

威張り散らす黒鋼だが、彼も、ヒトのことは言えない立場である。

「……黒鋼……」

（ふう、なんとか助かった）

「痛いなあ、もう……お陰で変化が解けちゃった……冗談だよ、冗談」

晟が涙目で振り返った先には、まさに『怒髪天を突く』状態の黒鋼が、震える拳を構えていた。

金色の房尾が、不機嫌そうに床をうつ。

「晟って、狐だったのね……犬じゃなかったんだ。泣かないで？ よしよし」

ひんと、鼻を鳴らして蹲る金色の狐を、さくらは傍に座つて撫でた。

「ああ　つくそ！　さつさとウサギんとこ行くぞつ、一発殴らなきゃ気が済まねえ」

それに増々むくれた黒鋼は、遂に鼓膜が破れるほどの大声で吼えまくった。

「ちよ、ちよつと……殴っちゃダメだよ黒鋼っ」

「うるせえっ！　さつさと行くぞつ」

「黒鋼も行きたがつてるし、俺も、会ってみたいな」
「……え」

（どうしよう、どうしよう……会ったら、朔が、殺されるかも知れない。でも、会いに行きたいの）

「……分かった、行きましょう。あたしも、伝えなくちゃいけないから」

同意を待つ二人に、さくらは躊躇いながらに頷いた。

（朔は、絶対自分を責めてる……早く行って、抱き締めてあげたい）
『生きてるよ』って、伝えたい。

朔、朔ちゃん……待っててね。

待っててね。

「っあ!？」

茜嶺の山中、兔族の陣営の天幕。

仮眠を取っていた朔は、微かにさくらの声を聞いた気がして、天幕を転がり出た。

「どうした朔、騒々しい」

天幕の傍の炉端に佇んでいた奈与が、不機嫌に顔を歪ませて朔を振り返った。

火影が、彼の端麗な顔に、明らかな動揺を浮き彫りにさせた。

「さくらの声がしたんだ……絶対に夢なんかじゃねえ。近くにいるのかも知れない」

「ぬあんだと？ さくらが心配だったら、よくものうのと寝てられるな！ このへなちょこっ!」

月は中天を流れ、凍えた御手で、触れたもの凡てを眠りへと誘う。

夜は一時だけ死の気配を孕み、月は残酷な微笑を浮かべていた。

「これ……やめぬか。喧しいのはどっちも同じじゃ……ムダな労力ちからを使うでない。今は気を抑えて休め」

口論する二人に、弓阿の鋭い叱責がとぶ。

「す、済まない……たかが夢で騒いだ。ムダに騒いで悪かったよ」

「よかろう、朔……お前の心痛もよく分かるが、いまは動くときではない」

「ああ……」

「ホントだつ。さくらにお前みたいな『へなちよこ』は似合わない、
もしや愛想尽きて、他の男と暮らしてるかもなっ」

「おっ、お前……ヒトの気にしていることを何度も！（怒）」

「あーあーあー、やめんか二人とも」

涙目で睨む朔の脇腹を、奈与は小突いて鼻白む。

ドンッ
！

弓阿がいい加減にしろ、そう言いかけた刹那、激震が地面を揺るが
せた。

正しくは、外郭に張り巡らされた結界が、加圧に軋んでいるのだ。
空間の軋み。

譬えるならば、張りつめた糸同士が擦れる音だろうか。

「やまいぬ 狢共だ……っ、囲まれている！」

結界ごしに響いてくる唸りに、兎たちは身を凍らせて身構え、襲撃
に備えて武器を帯びる。

狢は黒犬型の妖魔で、狼よりは劣るが、俊敏さを武器にする凶暴な
種族だ。

「結界が揺れてる、体当たりしやがつて！ 餌じゃねえっつーの！」
泡吹く牙が結界に迫り、何度も体当たりを繰り返している。

「射手、構え！ 結界が破れたら同時に矢を放て」

キレる朔を宥めながら、弓阿は部下達が騎乗するのを見送った。

そして、自らも愛馬の背に跨るのだった。

「久々じゃのう、共に一暴れしてやろうじゃないか……のう、猗風いふうよ」

弓阿は不敵に笑って、『愛馬』の首筋を撫でてやる。

「グルル…フウ、フウッ」

翼持つ犬型妖魔・天馬だ。

猗風と呼ばれた天馬は、荒々しく黒土の地面を抉った。

主従共に血の気が多く、かつては梁呂最強の忍として恐れられてい
たのだ。

「来るぞ、朔：変化を解けっ」

「お、お前こそっ」

いつの間にか協調している二人を、弓阿はどこか嬉しそうに見ていたが、すぐに元に戻って、鋭い号令を発した。

「破れるぞっ、撃ち方……」

構えっ」

結界が欠片を散らして爆ぜる、泡吹く牙が火影を返して黄色く映え、襲撃の咆哮をあげた。

「放てえ

っ！！」

ひとときわ声高に、^{かちとき}関があがった。

茜嶺の役（えき）（後書き）

どうも、維月です。

読んでくださる読者の皆様、更新が遅れてしまい申し訳ありませんです。期間が空きすぎてしまったので、ちょっと話が繋がってない箇所もあるかも知れません。

では、本題。それにしても、朔がなんだかヘタレです。

黒鋼が出しゃばってるせいでしょうかね……（汗）

再会（前書き）

朔とさくらが、ようやく再会を果たす！！
感動的な再会と思いきや…そこに横恋慕の黒鋼が乱入！

再会

「血と、獣の匂いだ……ウサギだな、近いぞ」

黒狼・黒鋼はすんすんと風の匂いを嗅いでから、牙を剥いた。

「兎族さくが！？　お願いっ、あたしを早くそこに連れて行っつ」

彼の背に騎乗していたさくらは、夜目にも青褪めて必死に嘆願する。ウルウルと瞳を潤ませる彼女を、黒鋼は思いきり『べろりん』と舐めた。

「きゃ　　っ、またやった！　黒鋼のバカあつ」

さくらは慌てて、黒鋼の毛皮に涎を拭う。

「ピーピーとうっせえ、泣くな！　あああ…やっぱり返したくねえっ」

「こらこら、ちゃんと飼い主に返してあげなきゃ…人間が珍しいのは、誰だって同じだよ」

晟は困ったように笑って、きつく寄り添う黒鋼を、さくらから離す。「イヤだ……こいつだけは離したくねえ。今更戻って、コイツが幸せになれると思うのかよ？」

きつく睨み据える目が、悲痛を帯びて翳る。

「それが、不義でも？」

晟の穏やかな眼差しに受け止められ、黒鋼は、ついと顔を背けた。

「晟、ありがと…後はあたしに任せて？　あたしが不甲斐ないせいで、こうなったんだもの。ちゃんと始末つきたいわ」

「そう……さくらはいい子だね」

くうん…と小さく鼻を鳴らして、黒鋼がさくらの腕に鼻面を擦りつける。

「黒鋼？」

「まあ、あれだ……腹の子のことは心配すんなよ。俺は、たとえ不義でも構わねえし。だから、行くな」

一瞬、世界が音をなくしたようだった。

音は聞こえても、その意味を結ばない。

「え……なに、言ってるの？ 黒鋼ったら、変な冗談よしてよね」
なぜか力む黒鋼を撫でてやりながら、さくらは訝しげに眉を寄せる。
「だ、だから……お前の腹の子の話だ。もしかしたら、俺のかも知れねえし」

「嘘でしょ？！ あたし、そんな訳ないわ。不義だなんて……どう
いう事！？ それに、お腹に赤ちゃんがいるなんて、知らないわよ
うっ」

「いでっ！ いでで、コラっ！ さくら痛エっ」

パニックのあまり、さくらは黒鋼の毛皮を思いきり筆ってしまった。

「やだやだっ……朔ちゃんに、なんて言おうっ」

「やめ っ！ さくらっ。ハゲる、ハゲるってっ」

完全無視。

というか、聞こえていない。

「大丈夫だよ」

わたわたと騒いでいた二人は、暢気な晟の仲裁に、ぴたりと動きを止めた。

「……晟？」

きょとんと見あげるさくらに微笑んで、晟は黒鋼の背中（さくらの後ろ）に腰掛ける。

「ってコラ！ 俺はハゲていいのかよっ」

つつこむ黒鋼だが、流される。
シカトだ。

「ちっ……（怒）」

「ここに来て、どのくらいか覚えてる？」

「ええ、結構経つんじゃないかしら……三ヶ月くらいかな？」

「来るものは、ちゃんと来てた？」

「……それが、ずっと来てなかったのよ。どうしよう……夢じゃないんだわっ」

赤らんだ顔を覆って、さくらは頭を振る。

「それはさておき、困ったなあ……黒鋼くろがねがこれしきで諦めるわけ、なさそうだし」

「当たり前なこと言ってんじゃねえ。行くんだろ、ウサギん処に」
そう言って、黒鋼は背中から屍を振り落とした。

「おっと！ 危ないだろ、さくらに何かあつたらどうするのさ！」

「さくらはお前に任す。巫山戯てる時じゃねえぞ……テメエにも分かるだろ。血の匂いが、濃くなつてやがる」

さくらを庇って屍はきつく黒鋼を睨むが、それは殺気だった彼の氣配に、あっけなく相殺されてしまっていた。

黒鋼の中の血が騒ぐ

古の夜叉が、今ゆっくりと目を醒ました。

「行くぞ！ 豺共なんぞにデカい面させられねえっ、ぶっ潰してやる……！」

「はいはい、まったく血の氣の多い」

ボケているさくらの脇で、一頭の妖狐が起きあがる。

狐は屍の声で喋った後、さくらの服の袖を啜えて、自らの背中に引っ張り上げた。

荒々しい動作なのに。

なのに、さくらはなんの衝撃もなく屍の背に座ることができた。
きっと、彼が氣を遣ってくれたんだろ。

「走るよさくら、しっかり掴まってて！」

皆まで言い終わらないうちに、二頭は走り出していた。

白刃が、血と火花を散らす。

「跋鬼伏邪……臨！ 前！ 先！」

朔は片方で牙を防ぎながら、開いた左手で呪を切った。

不動印だ。

たちどころに、相手は呪力に搦め取られて緊縛される形になる。

朔の目の色が、凍っていく。

「貴様……っ、たかが、兎族の分際で！」

突如の司令塔の失脚に、豺たちは一歩ずつ、後退を始めていた。

「うるせえよ、兎族だからなんだ……弱者は、強者の糧になるべし。だから、てめえはここで死ぬんだよ」

薄闇に、血が、飛沫いた。

耳を挟りそうな風が、五体を叩いていく。

晟の背で、さくらは幽かに煙の匂いを捕らえていた。

だんだん、それが近くなる。

「いた！ あそこだよっ、結界の残滓……所々に残ってるけど、そのまま行っても良さそうだ」

「きゃっ」

落下の感触に、さくらは短く息を詰めた。

「平気？ もう着いたからね。立てる？」

そつと問う、晟の深緑の瞳。

そろそろと背中から下りたさくらの傍に、黒鋼が寄りそう。

「豺共を追っ払ってくる……お前は、そこから動くな」

さくらの手を舐めてから、黒鋼は駈けだしていった。

「う、うん」

「やつほ……ウサギさんたち、やっぱり驚くよねえ」

ゆるゆると、晟の変化が解けていく。

再び緊迫する兎族だが、朔は例外だったようだ。

「さく……ら？」

刀を取り落とし、さくらを見つめたまま微動だにしない。
それは、さくらも同じだ。

懐かしい声を聞いた、彼女の瞳から涙がこぼれた。
いくつも、いくつも止めどなく。

「朔ちゃ……朔ちゃん！」

走り出すさくら。

「さくらっ！ さくらっ……さくらあっ！」

きつく抱擁する二人を、晟は微笑みながら見送った。

（よかったね、さくら。……げっ！ こっちは全然よくなかったりしてっ）

ゆらり……。

「あれが……さくらの夫なんだな」

「こっ、こら黒鋼っ……ダメだってば。折角会えたのに邪魔だろっ？」

一人黒いオーラを出している黒鋼に、晟は慌てていい添える。

ゆらり、と人型に戻った黒鋼は、晟を締めあげた。

一方さくらと朔は、きつく抱き合ったまま動かなかった。

いや、朔がさくらを離そうとしないので、動けないのだ。

「ほんとに、さくらだよな……生きてたっ、さくらだ！ ちゃんと生きてたっ」

「あたしが悪かったの……ごめん、ごめんね朔ちゃん」

「謝るな……お前が生きてただけでいいんだ」

「あの二人が、助けてここまで連れてきてくれたのよ？」

指さした先の二人を見た朔は、一瞬言葉をなくしてしまった。

（さ、さくら？ 俺たちの天敵種族と、お友達になってたり……する

?)

「どうしたの?」

「い、いや…なんでもねえ」

再会を喜んだのも束の間、朔、一気に汗みずくになる。

大将の弓阿でさえ、その表情を凍らせているのだから、無理もない。

「じゃ、じゃあ…礼、言わねえとな」

声が裏返っている。

不気味だ。

「俺に耐えろつてか! もう我慢できねえぞ俺あつ」

「おいおいっ…あ! さくら、丁度よかった…この狂犬を止めて
くっ」

こっちはこっちで、また揉めているようである。

「やだ黒鋼っ、なに怒ってるのよう…きやつ!」

「お前が、さくらの夫か」

さくらを脇へ押して、黒鋼は思いきり朔を睨んだ。

「あ、ああ…」

二人の身長差、約10センチ。

朔、再び固まる。

「テメエみてえなガキに、さくらを幸せにできると思ってたのかよ?
こいつを捜しに来もしやがらねえ奴にや、渡せねえな」

殺気を露わにする黒鋼に、朔は息ができずにいた。

「おっ、お前こそ…さくらの何が分かるんだよ!」

じりじりと迫る間合いに、目には見えない苛烈な火花が散る。

「その言葉、そっくり返してやる…コイツはな、人間だ。俺たち
のようなチカラも持ってねえ…だがさくらは、弱い訳じゃねえんだ
よ。それがなぜか、テメエは考えたことがあるか!」

一気に増した辛辣きわまりない雰囲気^{アトモスフィア}を和らげるように、
松曉^{マツキョウ}が撫でていった。

再会（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbitパニック』31部のお届けにあがりました！
朔とさくらが、ようやく再会を果たす…が。

黒鋼v's朔……ああ、どうするんだ朔！（汗）

天泣（前書き）

蘭溪の襲撃によって裂かれたが、遂に再会を果たしたさくらと朔。
蘭溪は死んだ。

一連の騒動は、静かに幕を閉じたのだった！

天泣

一人だけ異なる存在。

生きられる時間も、持ち得る能力も、何一つ持っていない。

人間。

似て非なる者

姿こそ同じだが、非力な生き物。

さくらはそれを理解しながらも、重圧に耐え、今までなんとか踏み止まっていたのだ。

「分かるかつ……想いの強さだ！ コイツはな、血へと吐いて死にそうな目に遭ったつてのに、テメエのことばかり心配しやがるつ。なのになだ！ 探しに来ねえたあどいうこつだ！！」

「……！？」

朔は目を見張る。

忘れていた。

一族に固執するうち、自分自身だけしか見えていなくて。

何より大切なはずの、彼女のことを思いやれなかった。

いや もう、そんなものは理由になどなりはしないだろう。

「俺はバカだな……謝るのは俺の方だ。さくら、お前の心を一人にした、俺が……悪かったんだ」

朔は涙を溜めた瞳で、さくらを振り向いて笑う。

「分かったら、大切にしろ！ ……泣かしたら、俺が許さねえ。いつでも取り上げに来るからな！」

「ああ　　肝に銘じておくよ」

黒鋼に背を小突かれて、朔は地べたに頽れる。

「朔ちゃん、もういいの……いいから、泣かないで」

「すまない　　さくら、本当にすまないっ」

声を上げて号泣する朔の肩を、さくらは優しく、愛おしげに抱き締める。

朔ばかりが、悪い訳じゃない。

油断した、自分にも非はあるのに。

この優しいウサギは、全ての罪を被ったのだ。

「雨……？　晴れてるのに。お天気雨だわ」

晴れ間から天地あめつちに降る雨は、神の泪。

天泣　　。

朔を抱き締めながら、さくらは小さく息を吐く。

それは、安堵の息。

これで、一連の騒動は終焉を告げた。

ひそかな雨雫が、さくらの目尻を伝っていった。

天泣（後書き）

こんにちは、維月十夜です。

『Rabbitぱにつく』32部です。

再会を果たして、ラブモードに突入した二人ですが……黒鋼は、さくらを諦めていません。実は。

やれやれです。（笑）

悲しい理（ことわり）（前書き）

無事、朔との再会を果たしたさくら。
しかし。

『変成』を起こしたさくらは、もう人の形を保ってはいなかった！？

悲しい理（ことわり）

「ねえ朔……」

「ん〜？」

朔とさくらは、夜に沈んだ浜辺で寄り添っていた。

月は中天に流れて、淡く海原を撫でていく。

「あたしね、ずっと……帰りたいって、思ってたの。思い出した」

遠い望郷。

この世界の向こう側に、必ず戻ると言っていた、あの日。

「さくら……今でも、戻りたいか？」

朔は、愛おしげに頬擦りしながら、さくらを腕の中に閉じ込める。

「ううん。たぶん、もう……そこにあたしの居場所はないの」

「さくら？」

月明かりに照らされた、さくらの顔が悲しみに翳る。

もう、戻れないのだ。

自分は『人間』という存在を逸脱してしまっサイクルたから。

身体が、変わってしまったから。

「もう、戻れない」

「さ……くら？ お前」

朔は気づく。

自分を見つめる彼女の双眸が、青いことに。

彼女の瞳が、闇の中でも沈んでいないことに。

「もういいの、あたし……人間じゃなくなっちゃったから。帰る場所は、ここしかないのよ」

彼女が、もう人間ではないのは事実なのだ。

さくらはもう、殆ど兔族になっていた。

「兔族に、なってる？」

「朔ちゃん……だからもう、なにも言わないでするすると、彼女の頬を清いものが伝っていく。変わっていく、身体が痛かった。

血反吐を吐いて歪み、引き裂けて死んでいく『人間の身体』が悲しかった。

初めて血を吐いたとき、『人間のあたし』は悲鳴を上げた。

怖くて、怖くて内側で叫んだ。

お願い！ あたしを殺さないでっ、どうして死ななきゃいけないの！？

誰か、この『異形』を殺して！

氷を抱いて、身の内に巣喰う異形を殺すのだ。

『これ』が死んでしまえば、あたしは助かるのでしょ！？

ダメよ、それはあなたの子供よ？ 殺してはダメ、あなたまで死んでしまう。

ウソ！ イヤよっ、死にたくないよ！ あたしにも、生きる

権利があるのにつ

その叫びを聞きながらも、自分はすることもできず、変化に喰われていった。

いやだ！

ひととき大きく声があがったが、
痛みに耐えて、叫びを飲み込む。

それが自分に与えられた運命なのだ。

受け入れるしか

そうするしか、なかった。

「あなたと生きていたいから、選んだ。これでいいの」

「さくら…っ、どうして、なぜだ!？」

抱き締められた彼女の目尻から、涙が一筋こぼれ落ちる。

「人として生きるということは…朔より先に死ぬということ。そんなの、耐えられない。あたしにはできないよっ」

愛しい者のため……

少女は『人』の理を棄てた。

「そんな惨い道を……俺は、さくらに選ばせちゃったのか!？」

さくらは、わななく彼の腕に触れて、ゆるゆると首を振る。

「朔も…誰も悪い訳じゃないわ。あたしの身体が変わったのは

あたしたちに子供ができたからなのよ?」

「
はっ?」

空耳を聴いた気がして、朔は抱いていたさくらを離してしまった。

「やっぱり驚いた、あたしも最初は驚いたわ。でも本当よ……」

くすくすと笑うさくらに、朔は呆気にとられたまま動けない。

「まさか 本当！？ 夢じゃ、ないよな？」

「そうよー。お父さんになったんだからね、しっかり頼むわよ？
朔」

悲しみを代償にして、手に入れた幸せ。

「やだもー…ほら、泣かないのっ」

（俺はやっぱり、愚かなのかも知れない）

それでも幸せ、と。

よかったと思えてしまう、手前勝手な自身が情けない。

（あれ…でも、それよりもっとイヤなこと、忘れてないか？）

「……やばい」

冷や汗まみれ、しかも涙目でぼつりと呟いた夫に、さくらはきよと
んと振りかえる。

「朔ちゃん？」

「さくらっ…アイツだけには言うなよ？ もし知ったらどうなるか

…」

アイツとは、もちろん奈与のことである。

『この、へなちょこのクセにっ！』と蹴りが来るのはまず確定だ
ろっ。

「大丈夫よ、奈与ならきつと分かってくれるわ？」

頼りなく震える朔。

はつきり言っつて、かなり情けない。

「なにを、聞いたら悪いんだ？」

「企業秘密！ 奈与には言っちゃならねえ話…って奈与！？ なん
で、ここに」

背後に、今いるはずのない奈与の声を聞き、朔は言葉どおり飛び跳
ねた。

そこには、肩で荒い息をする奈与が構えていたのだ。

「母さんの、戻りが遅いから見に来たら…っ…やっぱりお前か朔！」

「なに怒ってんだよ、おいっ」

朔は、すかさず後じさった。

それに彼の色違いの双眸が、訝しげに細まる。

「怪しい、お前：なにか隠してるだろう」

「べ、別に」

（これだけはっ……これだけは言う訳にはいかない！ 殺されるゝ）

「吐け、このへなちよこウサ！ なにがあつたんだっ、母さんから人間の気配が消えてるだろう」

蛇に睨まれた蛙とはこの事か、絞られる朔は、あっという間に汗みずくだ。

「な、なんで分かった？ 隠してたのに」

「わからないでかっ！？ さくらは、いつからああなんだ！ もう、父上たちと同じ気配がするじゃないかっ」

「やめれバカ奈与！」

「うるさいっ、なんでさくらをちゃんと護らなかつたんだ！」

怒りにまかせて奈与は獣化し、朔に飛びかかった。

「俺にふるな！ バカ野郎っ」

キイキイと喧嘩する二人は、既に動く毛玉と化している。

まき散らされる砂と一緒に、ふわふわと毛玉が舞う。

じゃれている二匹に、さくらは大仰に溜息した。

「こーら、二人ともやめなさいッ：話すから、大人しくして？」

「さくら！？」

仲良く(?) 声が重なった朔と奈与は、『フンっ』と思いきりそっぽを向く。

（朔は後でいいにしても、問題は奈与……相当怒ってるわ。無理ないけど）

「おいで、おいで奈与」

耳をV字にして威嚇し、じりじりと後じさって睨む奈与の瞳には、大粒の涙が溢れている。

さくらは以前彼に言った言葉を反芻して、痛苦に顔を歪めた。

【ねえ奈与、あたしがお母さんになってあげる】

【ずっと、一緒よ】

「……一人にしたね。寂しくして、ごめんね？」

さくらはそっと彼の傍に屈み、首に腕をまわした。

「悪いお母さんだよ……っ、あなただけのお母さんじゃ、なくなっちゃった」

頹れたさくらの姿が、大きく歪む。

「さ……くら!？」

そこには、銀色のウサギが、大きな目に涙を溜めて佇んでいた。

「あたし……もう、人間じゃないんだ」

「どういうことだ、どうしてだ! どうしてこんな惨いことを!？」

いつの間にか人型に戻った奈与の頬を、止めどなく涙が伝う。

「変わらざるを得なかったのよ。人間を棄てないと、お腹の子も、あたしも助からなかったから」

「お腹の子？」

みごとに惚けた顔をして、奈与は鸚鵡返しに呟いた。

心なしか、焦点が合っていない。

「そんなんっ……」

どわ。

「なっ、奈与!？」

卒倒した奈与を抱えて、さくらはオロオロ。

「だからだ、コイツには言うなっ……っていったのに」

ミニサイズに縮んで、さくらの腕で伸びている奈与をねめつけながら、朔はぶうたれる。

「やだ どうしましょ」

「とにかく戻るか」

足早に踵をかえす朔。

完全に伸びてしまった奈与を抱えて、さくらは忙しなく朔の後を付いていくのだった。

そして、伝わる（前書き）

無事帰還を果たしたさくら。しかし　彼女はもう『人間』では
なかった。それに、もう一つの新事実が判明して！？

そして、伝わる

「なに

っ!？」

早朝の城館を揺るがせたのは、間違いなくこの城の主である弓阿だ。
「ばあちゃん、うるさ…」

ゴッ!

両耳を伏せてぶつたれる紫生だが、弓阿の無言の鉄拳に敢えなく撃沈。

「さくら、お主……妾と同じ気配がするっ、一体、なにがどうしたんじゃっ!？」

彼女の突如な変化に、城中・城下の者すべてが顔を見合わせては首を傾げていた。

「だから……叔母上、結局は全部朔^{コイツ}のせいですって」

「なっ、なにおうっ!」

さくらを板挟みにして、齒噛みし合う二人。

あっという間に取っ組み合いの喧嘩が始まった。

弓阿は肩を竦めて、障子戸に凭れていた刹霞に問いかける。

「なにか、分かることはないか？ 人の娘を娶ったことのあるお主なら、なにか知っているのではないかと思っただよ」

視線が集まり、刹霞は短く咳払いした。

「前代未聞…としか言いようがない。人が我らと同族に変化するなど……」

彼にしても分からないことなのだろう、口調には、いつもの自信が見受けられない。

「父上！ さくらを怖がらせるなよっ、ほらっ、泣きそっじゃないか!」

「え!？ いやさくら、別にお主が悪いという訳じゃっ」

ぼろぼろと泣き出したさくらに、刹霞は大慌てだ。

「それは分かるんだけど……あたし、云わなきゃいけないことがあるの」

「男衆、ちよつときな。さくら？ 泣くんじゃないの、なにがあったんだい？」

それでも、ぼろぼろと涙をこぼす彼女に、一同は騒然となる。

「さくら、大丈夫か……どこか苦しいのか？」

朔は心配そうにさくらを抱き寄せるが、彼女は小さく頭を振った。

「うっん、今みんなに伝えるんだと思ったら……なんだか嬉しくて」

「……さくら……」

「大丈夫よ、一人で言えるから」

「さくら、なにがあつた……話しておくれよ」

「あのね……」

懇願する三阿に、さくらは口を開く。

騒めきが、一瞬おさまった。

すつくと立ちあがつたさくらは、嬉しそうに……でも少し悲しみも混ぜた笑顔で真実を告げたのだつた。

「聞いて、あたしね……朔の子供ができました。きつと、だから変成が起きて、人間の身体が剥がれたんだと思うの」

「……なんてこと どんなに苦しかったろう、お前、そんな、なんて痛いことを」

三阿は、ひしとさくらを抱き締めて涙ぐむ。

「人間を棄てたのだから？ なんて無茶をしたんだ。死んでいたかも知れないんだぞ？」

「こうするしか、なかったの……じゃないと、あたしも……お腹の子も助からなかったわ。人間の身体を棄てたのは、もう後悔してないわ」

「本当にお前という子は……無茶ばかりだよ。心配する者の身に

もなっ てくれ、命がいくつあつても足りやしない」

「三阿さん……」

「今宵は宴だ！ さくらの寿を祝つての無礼講じゃあ……！」

涙を拭つて微笑むと、彼女は城を揺るがすほどの大音声で言った。

そして、伝わる（後書き）

どうも、維月です。

ついに（やっと？）、朔とさくらがくつつきます。

このまま平和にことが進めばいいのですが…現実はその甘くはないのです。ラストまであと少し…乞うご期待くださいませ

烈火（前書き）

その、肚の底から響くような絶叫を聞いて
寒を催した。

さくらは酷い悪

『モノノケ』と化した蘭溪…

彼が、さくらを求めて兎族の里に向かってきた！？

烈火

毒霧の霞む谷底

硫黄谷。

蘭溪は、血反吐を吐いてもがいていた。

その脇で、使令を果たした晟の式神が霧散する。

彼の血まみれの身体は、目を除いて全てが闇に覆われようとしていた。

闇は、全て彼がその身に溜めた恨みや憎しみ・妄執……そして呪いが形を変えたものだ。

闇は黒く棘々（おどろおどろ）しい蛇体を模し、牙を剥いては彼を塗りつぶしていく。

「あ……つい、熱いっ！？ やめろ……っ、ぐあっ、やめろ

っ」

最期の絶叫は咆哮となり、ビリビリと天地を軋ませる。

余地なく食い尽くした闇は、彼を『モノノケ』に変えたのだった。

「いま、なにか聞こえた？！」

夜明けのうす青い部屋の中、さくらは跳ね起きた。

なにかの叫び声が聞こえたのは、気のせいだろうか？

さくらは、その肚の底から響くような絶叫に、ひどく禍々しいものを感じて背を凍らせる。

なにかが、とてもイヤなものが来る……。

そんな気がして、さくらは闇阿を呼びに走っていった。

一方、見張り台にいた闇阿も、動揺の異変を感じて考えこんでいた。まだ遠方だが、微かな異臭がする。

これは死臭だろうか。

ひどく焦げた匂いと、血の生臭さ。

「弓阿さん！ なにか変な匂いがしませんか？！ それに、声みたいなのを聞いて。不安だから知らせに来ただけだ」

「さくら、呼べば下に降りたのだぞ？ こんな所に登ってきて危ない。お主も分かるか、大気が濁つとるんだ…妾はここで様子を見る、お主は皆に知らせてきてくれ」

「はい！」

見張り台を降りたさくらは、座敷で伸びている朔を起こしに向かった。

パン…と勢いよく、障子戸を開け放つ。

「朔ちゃん！ 起きなさいっ、おーきーてー！！」

伸びている朔を、さくらはガクガクと揺らす。

「んああ、なあんだよさくら…まだ朝だろ？」

「まだじゃなくて、もうなのっ！ 大変なんだから、早く起きて頂戴！」

むにゅと朔の頬を伸ばして、さくらは膨れ顔。

「分かった、分かったから…ったく、奈与起きろ、さくらが呼んでんぞっ」

朔は、渋々転寝をしていた奈与を叩き起こした。

「なにっ！？ なにかあったのかっ」

（フン、コイツはこんなモンだろ…）

奈与の場合、さくらの名さえチラつかせれば起きるのだ。

譬え、どこにしようと思っけつけるだろう。

「いや、それが俺もさくらに叩き起こされてな。なんか異変がどうとか…ってもういねえし！」

朔も、少しは見習って欲しいところである。（最近怠け気味）

剌霞は民を高台へと避難させ、兵で周囲を固める。

さくらと奈与が触れて廻ったお陰で、現状が兎族全体に伝わったの

だった。

「姫さま、いけません…紫生が傍で護ります！ だからお戻りをっ」
母同様に武装するさくらの周りを、紫生が泣きそうな顔で跳ね回る。
「あたしも闘うのよ、ただ護られるのは好きじゃない。みんなと一緒に闘うわ」

「紫生、もちろんお前も闘うんだ。兎族の男なら、ちゃんとおし」
「母上……はい。この紫生、兎族のために闘いましょう」

「我らも命を賭しましょう、御方の恩のために！！」

紫生の言葉を皮切りに、兎族の兵士全てが平伏した。

「三阿さん、あれは…っ」

さくらは、朔の鎧の胸元にきつく身を寄せる。

腐臭が、濃くなった。

「分かっておる……あれは蘭溪じゃ。ついに、憎しみに喰われたか」
陽光に反射して、棘々（おどろおどろ）しい漆黒の獣が唸りを轟かせる。

触れている地表は悉く焼けただれ、死臭をまき散らした。

「ニクイ……ニンゲンガ、ニクイ！ コロス……コロシテヤル

！？」

憎悪に凍った青い瞳が、さくらを見つけて真円に裂ける。

勢いを付けるために身を撓ませてから、唸りをあげて走り出した。

「来たよ、こつちへ来る！？」

「あんな化け物、どうするんだ！」

木々をへし折って猛進する憎悪の塊に、民は震え上がる。

短く空気を裂く破裂音、それに続いて重く砲撃音が轟いた。

戦陣の兵が闘っているのだ。

黒い獣はあつという間に業火に覆い隠され、もがいては牙を剥く。
だがすぐに大きな身震いで焰を振り払い、獣の咆哮は天地をひどく拉がせた。

「さくら、お前はここで民の守りを頼む！」

「弓阿さん！？ ダメよっ、刀じゃ『あれ』は斬れないっ」

愛馬の背に跨った弓阿に、さくらは慌てて縋りつく。

「行かせておくれ……愚弟を止めるのは、どうか妾に」

「弓阿さんっ……一人じゃ行かせられません。行くというのなら、あたしを連れて行ってくださいっ」

彼女の傍で、朔と奈与も頷いた。

「しかし、お主は言うなれば生まれたばかりの赤子に等しいのじゃ……それに騎獣はどうする……」

「それなら大事ない、奈与がいるではないか」

言いかけた弓阿を、刹霞が遮る。

「俺も行くぞ、コイツ一人にや任せらんねえからな」

朔につつかれ、奈与は膨れ面。

「いや、お前はここに残れ」

掴み合って喧嘩を始めた二人のうちの、朔の方を弓阿がつまみ上げた。

「なっ、なんで俺がッ……」

「お前たちが喧嘩してどうするんじゃ、収まるものも収まらぬわいべーっ」と舌を出す奈与に、朔は地団駄を踏む。

「それじゃあ奈与……お願いね」

兎型に転変した奈与を抱き締めて、さくらは青い瞳を細めた。

「ああもっ、仕方のない……妾の負けじゃ。各々方、出陣が決まったからには、うかうかしてられぬぞ?!」

ぐるりと見回してから、弓阿はクシヤリとさくらの髪を撫でる。

「弓阿さん……あたしも闘います、護られるだけはイヤだから」

「昔と変わらん、お主は」

「ええ」

「……随分と楽しそうじゃねーか」

突如割り込んだ黒鋼の声に、一同は背後をふり返った。

「黒鋼！？ どうしてここに、帰ったんじゃ…」

ぴょん、と飛び出してきたさくらを、黒鋼は嬉しげに軽々と抱きあげて笑う。

「すげえコトになってんな、兎共がドンパチ始めやがったって…今その話で持ちきりだぜ？」

「それどこじゃないの、あれ見てよ！」

もがもがと暴れて、さくらは迫りつつある黒い獣を指さした。

「ああ、アイツだな。青毛のクソ野郎…ついにモノノケになったか」「笑い事じゃないのーっ、今から闘いに行くんだからっ」

子兎よろしく暴れるさくらを地面に降ろすと、黒鋼はスタスタと三阿の傍に歩いていく。

「アンタが将^{しょう}だな？ 頼みがあるんだが、いいか」

「人狼の小僧、さくらを救ったのはお主だったな。なんだ、頼みとは」

ニヤリと笑った三阿に、朔たち一同は冷や汗を禁じ得ずに、その場に凍った。

「俺を、軍に加えちゃもらえねえだろうか？」

「黒鋼？」

不思議そうな顔のさくらに、彼は不敵に笑う。

「奥の手は俺にくれ。こんなコト、滅多にねえぞ」

「まあ、よからう…兵は多いに越したことはないからな。どうじゃ、猗風…お主も異存なかる？」

三阿は騎乗したまま、愛馬である銀の巨狼に問う。

「主様がよいと思えば、猗風も同じこと」

凜とした女の声で、猗風は『是』と応えた。

その時、黒鋼が彼女を食い入るように見ていたことは、誰も気づいていないようだった。

「お主、名は？」

「黒鋼」

「そうか…行くぞ、黒鋼」

弓阿は黒鋼を軍に加え、戦地へと陣を進めたのだった。

「
聲が、聞こえる」

疾駆する奈与の背中、さくらはぽつりと呟いた。

烈火（後書き）

こんばんわ、維月です。

『Rabbitぱにつく』 35話のお届けにあがりました。
モノノケと化した蘭溪は、さくらを求めて兎族の里へ猛進中……。

かすかなる聲（前書き）

さくらは、助けを求める蘭溪の声を聴いた。
そして、『彼女』は動き始める！？

かすかなる聲

ニクイ…ドウシテ、ナゼカノジヨハ、アニヲエランダンダ！

さくらは戦慄した。

彼の声の流れ込んできて、灼けるような悪寒を催させるのだ。

「やっぱり、気のせいじゃない」

「さくら？ どうしたんだ…顔が青いぞ？」

急停止した奈与に、朔も慌てて足を止めた。

「どうした！？」

弓阿に止められたが、無理を承知で付いてきたのである。

クルシイ…カナシイ、カナシイ……クルシイ、ダレカ…タ
スケテクレ！

「^{こえ}聲がするのよ、おそらく…蘭溪の」

「なにっ！？」

朔は血が滲むほど強く、唇を噛みしめる。

（あの男は、モノノケになってまでさくらを苦しめるのか！？）

「なんて言ってる！ 忘れてしまえ、そんなものっ」

「ダメ…聲が止まない。助けて欲しがってる！ とめてくれってっ」

「奈与っ、弓阿に伝える！ 早く行ってこいっ」

「分かった！！」

額を抑えて俯くさくらを抱き締めて、朔は奈与を急がせた。

「彼…とても苦しんだんだわ。闇の底で、凍えて泣いている。彼に武器は効かないから、斬ってはダメと伝えて……でないと、みんな死んでしまう。早く！」

ぜいぜいと蒼白な顔で言う彼女に、朔は引っかけかりを憶える。

彼女は、そんなものの言いをしたりはしない。

それに、気配が被って

いや、重なっている。

「わ、分かった！ お前はそこにいろっ」

朔は、口論している奈与と三阿の仲裁に入ると、さくらの『お告げ』を伝えた。

「とにかく喧嘩してる時じゃない、三阿！ 今すぐ兵を止めてくれ！

あれに武器は効かないし、でないとみんな死んじまうんだ！」

「バカを言うな！ いま兵を止めた方が危険なことが分からぬかつ」

ゆらりと、さくらが立ちあがる。

彼女の全身を銀色の光輪が覆い、細い毛先を揺らめかせていた。

「あれは……私が止めます。私でなければ、止められない」

その声を背後に聞いて、三阿は目を張った。

さくらから、およそ尋常ではない靈氣が発せられていたからだ。

「お主、さくらではないな……あの『さくら』か！？」

「そうよ。ずっとこの子の中で、時を待っていました……私をあの者の傍へ連れて行きなさい」

「母……上なのか？ 本当に」

よろめいて、奈与はさくらの前に仁王立ちになる。

「奈与……ごめんなさいね。すべて私が始まり、だから、幕は私が引くわ」

涙ぐむ彼女を無言で背負うと、奈与は滑るように兎型に転変した。

「俺が連れて行く、叔母上たちは高台で待っていてください」

「待ちな」

背を向けた彼に、黒鋼が唸る。

「なにを……二度は言わぬぞ、去れっ」

「だーから、お前一人じゃ危なっかしいんだよ。俺はお前よりも強えし、足も速い」

「なにが言いたい！」

ぐると牙を剥く奈与に、黒鋼はそれ以上言わずに、狼に変化する。

「なにしてる、行くんだろ？ 行け！」

「わ、分かってる！」

黒鋼の吼えに後押しされ、奈与はようやく走り出した。

「弓阿……さくらが」

駆け去った二人を見送った後、朔は複雑な思いで隣の弓阿を振り向く。

「さくらの遺志に、任せるんじゃ……我らは高台へ行こう。民が、待っている」

弓阿の先導に、兵は従順に移動を始めた。

戦陣の兵等は、たじろいでいた。

それは、突如血反吐を嘔いて崩落した獣のせいだ。

「どうしたんだ……動きが止まったぞ……」

「よく分からんが、油断はできん……気をつける」

そんなような会話がヒソヒソと交わされる中、闇のそこで、蘭溪は声を聴いていた。

（サムイ……オレハ、モウモドレナイヨウダナ。アノコロニ、モドリタイ）

分厚い壁を隔てているような幽かな声だが、彼にとってそれは、それでも温もりを与える。

そんなような気がして、闇底の彼の頬を涙が伝った。

戻れたらいいのに。

あの暖かった、豊かな時代に。

誰よりも愛していた彼女の、生きていた時代に。

こんなにも望んでいるのに、声が出ないんだ。

彼女の、生まれ変わりを見つけたのに…。

優しくしてやろうと、今度こそ優しくしてやろうと思ったのに。

また、彼女を深く傷つけた。

もう戻れないのか…。

昔の自分にも、昔の兔族にも。

ならばいつそ…もう。

ならばもう、いつそ殺してくれ。

と、兵が騒めき始め、そこに堕ちていた蘭溪
ゆっくりとその巨体を起こした。

いや、獣は

細かに鋭く、風を裂く音が閑地に響く。

上空から、しなやかに奈与が獣の傍に降りたつた。

「ありがとう奈与、ここでいいわ…下がっていて？」

さくらは彼の背を降りると、蹲る獣に惜しげもなく歩み寄る。

なぜか獣も抵抗せずに、彼女の接触を受け入れた。

「私に分かる？ 蘭溪。こんな姿になってしまつて、私があなたを

傷つけてしまったのよね。最期まで、あなたの気持ちに応えられな

かった私を許してね」

さくらは、やんわりと闇色の獣を抱き締める。

「ヲレコソ… スマナイ」

低くぐもった声がして、獣はさくらに頬寄せた。

「ごめんなさいね、本当に…でももう今度こそ、一緒にいられるわ
？」

「サ…ク、ラ」

彼女の腕の中で、獣は輪郭をなくしたようだった。

彼を取り巻いていた闇が、浄化されたのだ。

闇が消えた後、そこにあつたのは……傷つき、痩せさらばえた一匹の青兎だった。

「今度こそ、絶対に一緒よ？ もう、行きましようね……どこへも行けるから」

虚ろだった蘭溪の瞳の色が、悄然と褪せていく。

彼女が撫でると彼は幸せそうに、鼻先を小さく動かした。

「せめて、道案内ぐらいさせて頂戴ね？ ね？ 蘭溪」

さくらの身体が、ゆっくりと頷れる。

「さくら！？」

彼女が地面に触れるすんでの所を、駆けつけた奈与が慌てて受け止めた。

「……奈与」

起きあがったさくらは涙を拭って、腕の中の蘭溪を見せた。

骨張った、小さな体。

蘭溪は、息を引き取っていた。

「彼がね、最期に謝ってくれたわ……本当に、済まなかった。ありがとって」

言いながらさくらは嗚咽が止まらずに、奈与の胸元に掻き付いて、大声で泣いた。

「兎族の因縁も、これで終わった。帰ろう？ さくら」

「うん……」

これで本当に、兎族の因縁は幕を閉じた。

後日、蘭溪の亡骸は刹霞の妻・さくらの墓の傍に葬られることになったようだ。

かすかなる聲（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbit』はにつく『次話で最終回です。』

さくらではない、『さくら』が蘭溪を連れて行きます。

蘭溪…可哀相な奴ですが、真の悪人ではなかったんですね。

未来へ…（前書き）

朔とさくらが棠国へ戻って、3年が経っていた。

紆余曲折の果てに幸せを手にした二人。

未来への架け橋。

世代が替わり、時代が変わっても、梁呂の乱を治めた、元は人間だった勇敢な少女の話は、後々まで語り継がれていった。

未来へ…

さくらと朔が棠国へ戻って、3年が経った。
そして…。

「パパちゃん、あつかんべ」

「くおら、また脱走する気かおのれは」

がし、と背を押さえられ、子供は無惨にも地面に押しつけられることになる。

「うつ、やあゝつ」

「つたく、紐でも付けときたいぜ」

脱走した息子を抱きあげて、朔は溜息した。

「もう逃げないか？」

「やら」

また溜息。

現在、母親であるさくらが留守なので朔が子守り中なのである。

（はあ）……ガキの世話って大変）

「おあーしゃんは？」

「んー？」

むに、と鼻をつままれて、朔は濁音気味の声で応える。

「んあいのの、はにや…はにやせ」（買い物、鼻、離しやがれ）

「いないの？ ぼく、おあーしゃんさがすつ」

やっと離してくれた鼻をさすって、朔は渋々彼の物見行に同行することにした。

話題は戻るが、朔とさくらの間には一人息子・奏かなでが生まれていた。
3つにしてはちゃんちゃ坊主で、利発な彼に親となった二人は毎日
がてんてこ舞い。

「おおーしゃーん？」

てこてこと歩いていっては、木の虚に頭をつっこんだり。

枯れ葉の裏を返して呼びかけてみるが、結局見つからずに、機嫌を損ね始める奏。

「あえ、おおーしゃーん？」

朔はというと、切り株に腰掛け、飽きてしまったのかポケ…と空なんかを見ている。

当然、奏のことは忘れている。

「おおーしゃん、いない…」

（やつぱガキだな、気づいてねえし）

しよげた奏は、ぼしゅんと柔毛の黒い子兎になり、耳を毛繕いする。
「おおーしゃん、ぼく、きらいなの？」

枯れ葉を銜えて、ころころと砂の上を転がるしぐさが可愛すぎて、出るに出られない、バカ親な朔が物陰にいた。

（我が息子ながら、可愛い。ま、俺には劣るけど）

「朔ちゃん？ なーにしてんのかな？」

「子守りです…ってさくら！？ つーか早っ、もう買い物済んだのか？」

うだうだと物陰で悶えていた朔は、さくらの冷たい一瞥に跳ね上がってしまった。

「あたりまえでしょー？ 本当は奏も連れていきたかったんだけど、まだ人混みになれてないし。早く戻ってこないと、朔ちゃん見習って悪いコになっちゃう」

「点検、俺の嫌いな人参が入ってないか」

もそもそと買い物袋を漁り始めた朔の足を、さくらは踏みつけた。

「漁らないの、行儀悪いわねっ…悪いコっ」

「ひ、ひでえな、さくら…俺そんなに悪い子じゃないだろ？ 夜以外は」

「ヘンなこと言わないの！ 教育に悪いでしょ。文句言っていないで、これ持って行ってね？ あたしは奏抱っこするから」

「あう？」

きょとんと首を傾げる奏。

幼いのが幸いで、会話の内容が理解できていない。

「へいへい（さくら、奏が生まれてから変わったな…俺、悲しい）」
朔は苦笑して荷物を両手に持つと、玄関へ向かっていった。

「おあーしゃん（お母さん）」

もにもにと両手を伸ばして、奏はさくらの足に抱きついて笑う。

「あら〜？ 泥んこじゃない、奏え。おフロ入らなきゃ」

「やらよー、おフロやら〜」

にーっと笑うやんちゃ息子に、昔見た朔の満面の笑みが重なって、さくらは思わず溜息した。

（ほーんとそっくり、瓜二つなんだから）

ねえ、琥珀。

きつと、アンタが引き合わせてくれたんだよね。

色んなことがあったよ、色んな人に出会って別れたよ。

結局、あたしは人間を棄ててしまったけど。

人間でいたら、こんな道は絶対歩かなかったと思う。

始まりは徳島。

そして、あの場所から始まった。

出逢いと別離の果てに、あたしはかけがえのないものを見つけたの。
大切な人の傍で、『生きる』と言うこと。

Rabbitぱにつく、もう本当に毎日がパニック状態。

琥珀、それにお父さん、お母さん。

あたし、ここで生きてるよ。

約束、まもったからね。

「おあーしゃん、かえろ？」

「あ、うん。お父さんも待ってるし、帰ろっか？」

「うん！」

さくらは石青の空を見あげて深呼吸し、ひとしきりの風に身を任せ
た。

未来へ…（後書き）

『Rabbit』につく』最終章です。

紆余曲折の果てに幸せを手に入れたさくらと朔。

ここまで読んでくださった読者様方、本当にありがとうございました。

本作について質問などがございましたら、何なりと申しつけくださいませ。

それでは。

2006・4・26 維月十夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2469a/>

R a b b i t ぱにつく

2010年10月28日03時42分発行